

ハイネ戀愛詩集

ハイネ戀愛詩集

田中克己譯  
角川書店刊



ハイネ戀愛詩集

田中克己譯



角川書店

目次

若き日の悩み（二八二七—二八三二年）

夢のすがた	九	二	こひのなげき	二
一 獻詩	二	三	あこがれ	三
二 ゆめ	二	四	うつりかはり	四
三 祝詞	三	五	期待	五
四 結婚式	四	六	せつかち	六
五 婚禮	五	七	こひといふことば	七
六 あらそひ	六	八	大工	八
七 婚禮の夜	七	九	無題	九
八 墓地	八	一〇	白い花	一〇
九 蒼ざめたひと	九	一一	さやうなら	一一
一〇 復活	一〇	一二	出帆	一二
歌		一三	ライン河上	一三
一 こひの挨拶	一	一四	カルル・フォン・ユの記念帖に	一四
		一五	豫感	一五
		一六	反響	一六



ハイネ戀愛詩集

若き日の悩み

ハトキ 歴史探検

若き日の懐み

一八二七年——一八三二年

夢のすがた

一(獻詩\*)

僕はいつか夢みた、はげしい戀のほのほを  
美しい捲髪マキカミと天人花テンジンカと木犀草キスィソウ  
あまい唇とにがいことばを  
かなしい唄のかなしいしらべを

夢はとつくにさめて消えてしまひ  
僕のいちばん戀しい夢のすがたも消えてしまった  
情熱に浮かされてむかし僕が  
弱々しい詩にしたのだけが残つてゐる

あはれ見棄てられた僕の詩よ、もうおまへも消え去れ  
よ

そして僕のところから姿を消した夢のすがたを探すが  
いゝ  
もしも見つけ出したらことづけをしておくれ——  
はかない影法師どのはかないうたを送りますと

\* 括弧の中は初發表のときにつけられてゐた題、以下同じ。

二(ゆめ)

上にもふしぎな恐ろしいゆめが  
僕を楽しませおどろかした



僕の眼のまへにはいまだにいろんな恐ろしいすがたが

ちらつき

胸はげしく波うつ

よにも美しい花園を

僕はたのしく散歩してゐた

たくさん美しい花が僕をながめるので

僕はうれしかつた

さまざまのたのしい戀のしらべを

小鳥たちはさへづつてゐた

日は金の光にとりまかれて紅く

花ははでな色どりに塗られてゐた

草からは香油のかをりがふんだんに流れ出て

風はこゝろよく静かに吹いた

何もかもが輝き何もかもがほゝえんでゐた

やさしくその美しいながめを見せてくれてゐた

この花のくにのまんやかに

澄んだ大理石の噴水があつた

美しいをとめがあるのを見たが

せはしなく白い着物を洗つてゐるのだつた

愛らしい頬つべた、やさしいひとみ

ブロードの捲髪マッシュの氣高いすがた

見るとそのをとめは見えないが

しかもよく知つてゐる顔だつた

美しいをとめはいそがしくしながら

唄をまつたくふしぎに口ずさむ

「水よ流れよお流れよ

わたしの麻衣マキをきれいに洗つてよ」

僕はその子に近づいて

さゝやいた「いつておくれ

美しいかあいい娘さん

この白い着物は誰のです」

彼女は即座にこたへた「早く用意なさいよ

あなたの經帷キヌカサ手を洗つたげるのよ」

かういふがはやいかそのすがたは

泡のやうに消えてしまつた——

僕はまだ魔法にかゝつたまゝ

まもなく暗い荒れた森に來た

木々は空にむかつて聳えてゐた

僕は呆然と立つて思案にくれてゐた

ほら、なんとうつろなこだまだらう

遠くの斧のひびきのやうだ

藪をわけ荒野をぬけて急いで行くと

ひらけた場所に出てしまつた

緑の土地のまんやかに

大きな櫛の木が立つてゐた

どうだ、わがふしぎなをとめどのが

斧で櫛の幹を切つてゐる

「うちーうち、ひつきりなしに

唄を口ずさみながら斧をふりあげる

「輝く斧よ、光る斧よ

はやく櫛の箱をおこさへよ」

僕はその子に近づいて

囁いた「いつておくれ

ほんとにきれいな娘さん

誰に造つてやるの、その櫛の箱は」

すると彼女は即座にいつた「時間がないのよ

あなたの棺を作つてゐるのよ」

かういふが早いか

姿はすつかり泡のやうにかき消えた

まはり一帯は草一つない  
青くてとてもひろい荒地だった  
僕はどうなることかわからないで  
心中ふるへながら立つてみた

そしてなほも進んで行きだすと  
白い細長いものが見えて来た  
それを目がけて急いで行つて立ちどまると  
なんとあの美しいをとめを僕は見つけた

廣い荒野に白いをとめがゐて  
鋤で地面を深く掘つてみた

僕は彼女を見る勇氣も出ないほどだった  
あんまり美しくしかも怖ろしいひとなので

きれいなをとめは急がしくしながら  
唄をとでもふしぎに口ずさむ  
「するどい幅の廣い鋤よ鋤よ

深く廣い穴を掘つておくれ」

僕は彼女に近づいて  
聞いた「いつておくれ

とても美しいかあいい娘さん  
こゝのこの穴は一體なんですか」

すると彼女は即座にいつた「おだまりなさい  
あなたのですしい墓を掘つたけたのよ」  
美しいをとめがかういふと  
墓は大きく口をあけた

そして僕が墓穴をのぞきこむと  
體ちゆうぞつとする身ぶるひがし  
暗い墓穴のやみの中へ  
僕はおちこみ——そして目が覺めた

※ 幼女と死の死刑執行吏の娘ヨセファとの關係で出来た作品

### 三（祝詞）

夜の夢に僕は自分自身を見た  
黒い大禮服と絹のチョッキを着て  
手にはカフスをはめてみた、お祝ひの時のやうに  
僕の前には愛らしい最愛の戀人が立つてみた

僕はお辭儀をして云つた「あなたが花嫁ですか  
ではお祝ひを申し上げます」  
さうは云つたもののどからは長く引張つた  
上品に冷たい聲がしぼり出されたばかりだった

すると戀人の眼から苦しみの涙が不意に  
流れ出た、そして涙の波の中で  
僕の眼の美しい像がとけさうになつた

あゝかあいい眼よ、けだかい戀の星よ

おまへはうつゝでいくどもだましたが  
夢でもだますのだね、でも僕は信じてやる

※ この詩以下三篇は榮妹アマリーエ・ハイネの一九二二年八月  
の結婚によつて出来た。

### 四（結婚式）

夢で僕は小さな變な男を見た  
竹馬に乗つて大股に歩いてみた  
白いシャツを着ていゝ着物を着て  
しかし中味は粗末で汚かつた

中味は下品で役に立たないが  
みかけは威嚴に満ちてゐた  
勇氣について長廣舌をおふるひなすつた  
そしてまさしく傲慢にまさしくまごゝとふるまつた

「誰だか知つてるか、来て見なさい」

夢の神様は仰せられ、ぬけめなく  
鏡にうつつた姿をお見せになつた

祭壇の前にその小男が立ち

僕の戀人が横にゐて、ふたりは云つた「はい」  
たくさんのお腹がわらつて叫んだ「アーメン」

### 五（婚禮）

何が僕の狂暴な血をかり立てさわがせるのだらう

何が僕の心を荒々しい情熱に燃え立たせるのだらう

僕の血は煮え立ち泡立ち沸騰し

激しい情熱が僕の心をやきつくす

血が狂ひ沸騰し泡立つのは

悪い夢を見たからだ

陰気な夜の息子がやつて来て

喘ぎながら僕を連れて行つた

明るい家に連れて行つた

堅琴がひびきばか騒ぎのする家へ

炬火たなまつと蠟燭の灯で明るい家へ

僕は廣間へ来て入つて行つた

愉快な結婚の披露宴だつた

お客たちは喜ばしげに卓についてゐた

新郎新婦を眺めたら――

あゝあゝ僕の戀人が新婦だつた

うれしさうな僕の戀人だつた

見知らぬやつが新郎だつた

新婦の名譽の席のうしろによりそつて

僕は立ちつゞけてゐた、一言も云はなかつた

音楽がかなでられた――全く静かに僕は立つてゐた

喜びのざわめきが僕を悲しませた

新婦はたいへん幸福さうな眼をしてゐるし

新郎は彼女の両手を握りしめてゐる

新郎は杯にいつばいっいで

のみほし、新婦に殷勤にさし出した

新婦は感謝の微笑をした――

あゝあゝ彼女は僕の紅い血を飲んだ

新婦はきれいな林檎をとり

新郎にそれを手渡した

彼はナイフをとつてたちわつた――

あゝあゝそれは僕の心臓だつた

ふたりは長いこと甘いながしめをかはしあふ

新郎は大膽に新婦を抱いて

その紅い頬にキッスした――

あゝあゝ僕には冷たい死がキッスした

僕の舌は口の中で鉛のやうになつてゐて

一言さへもしやべれなかつた

ざわめきが起つてダンスがはじまつた

盛装した新郎新婦がまっさきに立つて踊つた

死人のやうに無言で僕が立つてると

踊り手はまほりを活渡に踊りまはる

新郎がなんかひそ／＼さ／＼やくと

新婦は紅くなつたが怒らない――

### 六（あらそひ）

静かな夜、あまいゆめで

僕のところへ魔法の力でやつて来た

魔法の力で戀人が

ぼくの小部屋へやつて来た

僕は彼女をみつめた、美しいすがただ

僕がみつめるとやさしくほ／＼ゑんだ

僕の胸がうれしさでふくらむまでほゝゑんだ  
そこで風のやうに大膽にことばがほとぼり出た

「お取り、僕のもつてるものを何でもおとり  
一番だいなものも君になら喜んでゆづつてあげる  
そのかほり夜中から雞の鳴くときまで  
君の愛人になれるなら」

とてもふしぎさうに僕を見つめて  
愛らしく悲しげに親しげに見つめて  
その美しいをとめは云つた

「お、私にあの世の冥福をちやうだい」

「天使のやうな君のためなら  
楽しい生命、青春の血は

喜んで僕はさしあげよう——  
けれど天國はどうしてもあげられない」

もやの中にとけてなくなつた——

僕はしかし快樂の中に死なうとして  
腕に美しい戀人を抱いてゐた

小鹿のやうに僕にすがつてゐたが  
苦しい悲しみに彼女も泣いてゐる

美しい戀人は泣いてゐる、僕にはわけがわからぬが  
そのものいはぬ薔薇のやうな唇にキッスする——

「お、美しい戀人よ涙の潮をとめなさい  
僕の熱情に身をまかしなさい」

「僕の熱情に身をまかしなさい——」

このときとつぜん僕の血は氷つた  
高い音を立てて地面はふるへ  
奈落が大きな口をあけた

黒い奈落からまつ黒な群が上つて来て——

僕のことばは口早やに出てしまつた

ます／＼美しいかほをして  
いつまでも美しいをとめはいひつゞけた  
「お、私にあの世の冥福をちやうだい」

このことばは僕の耳にぶくひゞき  
僕の魂の底へ

炎の海をながしこんだ

僕は息ぐるしくて息づまりさうだつた——

金の御光に包まれて

白い天使たちがあらはれた

しかしものすごく黒い天魔の群が  
それに向つてあら／＼しく突進した

それが天使たちと争つて

天使たちを追ひ散らした

最後に黒い天魔の群も

美しい戀人はまつさをになつた

戀人は僕の腕から姿を消し

僕はひとりぼつちで立ちのこされた

すると僕のまはりをふしぎな環になつて

黒い群が踊りまはり

つめよつてまもなく僕をとらへる

高い嘲笑がゲラ／＼とひゞきわたる

環はせまくなる一方で

恐ろしい歌はいつまでもひゞいてゐる

「おまへはあの世の冥福をやつてしまつた  
もう永久におれたちのものだ」

＊ ヨゼフとの關係で出来た作品。

## 七（婚禮の夜）

代金をもつてるのにまだくゞくゞするの

しふい面した奴よ、なせまだくづ／＼する  
僕はもう居心地のいゝ部屋で坐つて待つてゐる  
はや眞夜中が近づいた——花嫁だけがゐないのだ

身の毛のよだつ風が墓地から吹いて来る——

風よ、僕の花嫁に逢つたかい

たくさんの蒼い妖怪どもが形を現はして

齒をむき出して僕にお辭儀をして「おゝ、逢ひました」

荷を解け、使ひになにをもつて来た

この火の法被ほろろを来た黒い小僧ども

「御主人様は御披露なされます

ただちに龍車に乗つてお出ましとのおもむきを」

この灰色の小男どの、君のぞみは何だ

故學士どの、何に驅り立てられて来た

彼はだまつてかなしい眼つきをして僕を見て

頭を振つてから引つこんだ

むく毛のやつめはなせく／＼うたつて尾を振るのだ

黒猫の眼はなぜそんなにギラ／＼光るのだ

亂れ髪の女どもはなぜ吼えるのだ

お乳母どのはなぜ僕の守唄をうたふのだ

お乳母どの、けふはその唄といつしよに家にゐろ

そのねんねんようはずつと昔にすんでゐる

けふといふ日、僕は結婚式をするんだぜ——

まあごらん、もう上品なお客さまがたが見えた

まあごらん、紳士がた、それは慥慥といふものだ

諸君は帽子の代りに首を手にしてゐる

絞首臺服のもち／＼足の諸君

風は止んだ、どうしてこんなにおそく来た

箒の柄をもつたおばあさんももうやつて来た

あゝ、祝福してくれ、おまへのむすこなんだぜ

すると蒼い顔の中で口がふるへる

「永遠に、アーメン」とおばあさんがいふ

十二人のやせぎすの樂師がのろ／＼と入つて来る

めくらの胡弓ひき女がすぐあとからよろめいて来る

そこへまだらのジャケツを着た道化役が

墓掘入をせをつて苦しきうに来る

十二人の修道女が隔つて入つて来る

やぶ睨みのやり手婆が先頭に立つてゐる

十二人の淫亂な小坊主どももちゃんといつて来て

みだらな歌を讚美歌の節にして口笛ふく

古着屋さん、そんなに顔を青くして叫ぶなよ

おまへの毛皮の上衣は淨罪界では僕の役に立たない

あすこでは毎年たゞでまきのかはりに

王侯や乞食の死骸でぬくめてゐるんだ

花賣むすめたちはせむしで曲り足で

たぶん地獄ちゆうがたさわざだ

がや／＼ざわ／＼して群が増して来る

永劫の罰のワルツまでが聞えて来る——

しつ、しつ、もうすぐ僕の戀人も来るのだ

賤民ども、生まれ、でなけりやいそいでうせろ

僕のいふことさへほとんど聞えやしない——

そら、車の音がいまガラ／＼とするぢやないか

料理女よ、どこにゐるのだ、いそいで門をあけろ

ようこそ、戀人よ、御機嫌いかじ

ようこそ、牧師さま、さあ、おかけ下さい

馬の足としつぽをもつた牧師さま

わたくしは師の下僕でございます

花嫁御よ、どうしてだまつて青いかほして立つてるの  
牧師さまはたゞちに結婚式にとりかゝられる  
僕は高い血の出るやうな料金を拂ふのだが  
おまへを手に入れるためなら易々たることだ

花嫁御よ、跪け、僕のよこにひざまづけ——  
そこで彼女は跪きひれ伏す——あゝ、しあはせなよろこ  
び

彼女は僕の胸に波うつ胸によりかゝる  
僕はふるふるよろこびをもつて彼女を抱いてやる

金のまき毛の波が僕たちふたりをめぐり  
をとめの胸は僕の胸にあはせて鼓動する  
ふたつともよろこびと苦しみに鼓動する  
そして空たかくへまひ上る

#### 八(墓地)

僕は僕のあるじなる戀人の家を出て

こゝで祝福する僧侶の役をつとめるのは  
夜の生んだおそろしい息子なのだ  
血だらけの聖書からのきまり文句をつぶやいて  
その祈禱は邪悪、その祝福は呪詛だ

怒濤のうなりのやうに、雷鳴のやうに唸り  
シュッ／＼音たてきちがひのやうに吼える——  
そのときたちまち青い火がもえる——  
「永遠に、アーメン」とおばあさんがいふ。

狂氣してま夜中のおそろしさの中をさまよつた  
墓地のよこをとほりすぎようとすると

墓がまじめなかほをしてだまつてさしまねく

樂師の墓からさしまねく

キラ／＼かゞやく月光のもと

さゝやきがする「兄弟、すぐ行くよ」

霧のやうに青いのが墓からあらはれる

あらはれ出たのは樂師だつた

墓の上たかく座をしめた

すばやく琵琶の絃をなでて

まつたくうつろなするどいこゑでうたふ

「うつろな陰氣な絃よ

いつかは胸をあんなにひどくもえ立たした

古い唄をまだ知つてるか

天使はそれを天國のよろこびといひ

心臓はよろこびの海に泳いでる

あの神の聖なる高いくにで

だが頭はこわくて火のやうにもえて

地獄がその手を上にのせてゐる

悪魔はそれを地獄の責苦といひ  
人間はそれを——こひといふ

この最後のことばのひびきが止むか止まぬかに

墓はみな口をあけた

まぼろしどもがあらはれて

樂師のまはりに漂つて金切聲で合唱する

「こひよ、こひよ、おまへの力は

われわれをこゝの寢床へつれて來た

われわれの眼をふさいだ——

おい、なぜ夜に呼んだのだ」

かやうにごた／＼と吼え立てうめき立てなげき立て

ぶん／＼いつてがあ／＼きい／＼いつて

きちがひじみた騒ぎが樂師のまはりをとりまいた

樂師ははげしい絃をかきなでた

「ブラヴォ、ブラヴォ、いつも狂氣でよくこそおいで

聞いたか

わしの呪文のひびきを  
毎年毎年ちひさい部屋で

ひっそり閑としてゐたが

けふは愉快にやらう

御免をかうむつて——

まづ氣をつけろ、わしただけか——

生きてるときは馬鹿だつた

きちがひじみた激情で

きちがひじみたこひの火に身を任せた

けふだつてなくさみがなくちやならない

むかしなが自分のしきたりだつたか

きちがひじみたこひの狩が

どういふふうに驅り立て

どういふふうにいためたか

めい／＼この場でほんとのところを話すことにしよう」

すると環のなかから風のやうに身輕に  
やせたのがとび出して口ずさみはじめた

「わしは仕立屋の職人だつた

針と鋏をもつてゐた

わしは仕事及早かつた

針と鋏のことにかけて

そこへ親方のむすめがやつて來た

針と鋏を手にして

そしてわしの心臓をつきさした

針と鋏とでもつて」

そこで幽霊どもは愉快な笑ひを合唱した  
ふたりめがしづかにまじめなほほをしてすゝみ出た

「リナルド・リナルディニ

シンデルハンノ、オルランディニ

とりわけカルロ・モールだつた

わしが手木にしようとしたのは

やつぱりこひした——失禮ながら——

わしもあの英雄たちと同じやうに

そして一番美しい女のすがたが

わしの頭に亂暴にも出現しました

わしは嘆息もした、こひしげに泣いた

こひに頭が混亂すると

わしの指をすばやく

隣の金持のやつポケットに入れた

ところがお巡りがわしに惡意をもつた

そこでわしは隣のやつがもつてゐた

ハンケチでもつてこがれの涙を

拭かうとするといふ段になつた

信心ぶかいお巡りたちのしきたりによつて

みんなはおれをとりかこんでつれて行き  
神聖かつ大なる牢獄は

わしをその胎内にとちこめた

わしはこひのおもひにたのしく耽りながら

そこで毛糸をつむいで坐つてた

リナルドの幽霊が來て

わしの靈魂をつれて行く日まで」

そこで幽霊どもは愉快な笑ひを合唱した

三人めが化粧して着飾つてすゝみ出た

「わしは舞臺の王者だつた

二枚目役をつとめてゐた

「神様」とたび／＼はげしくどなり

「おゝ」とたび／＼やさしくためいきした

モーターマー(五)を一番上手にやつた

マリアはいつもとても美しかった  
 だけでもつとも自然なしぐさにもかゝらず  
 彼女はわしを決して理解してくれなかつた――

ある日、わしはとう／＼絶望して

『マリアよ、神聖なものよ』と叫び

七首ななむねをすばやく手にとつて

ちよつとだけ深く突きすぎた

そこで幽霊どもは愉快な笑ひを合唱した

四番目が白い羅紗を着てすゝみ出た

「講壇から教授はしやべりなすつた

彼がしやべると僕はよく寝入つた

だがその何千倍かよく眠れたらう

彼の愛嬌のあるお嬢さんのところなら

彼女はよく窓ぎはでやさしく僕に會釋した

花の中の花よ、僕の生の光りよ

けれどこの花の中の花はおしまひに

乾からびた俗人、金持の畜生に摘まれた

そこで僕は女どもと金持の野郎どもをろつて

悪魔の藥草を僕の酒にませ

死と兄弟がための酒のみほした

そいつはいつた『多謝多謝、わしは死神だ』

そこで幽霊どもは愉快な笑ひを合唱した

五番目が繩を首にまきつけてすゝみ出た

「伯爵は酒にまかせて自慢し見せびらかした  
 自分のむすめと寶石とを

伯爵どの、きみの寶石が僕と何の關係があらう

わしにはむすめの方がずつと氣に入つた

兩方とも嚴重に錠や門がかゝつてる

そのうへ伯爵はあまたの郎黨どもを雇つてる

しかしわしには郎黨どもや錠や門が何の關係があら

う

わしは安んじて梯子をのぼつた

わしは安んじて戀人の小窓にのぼつて行つた

そのとき下から怒つてのゝしるのを聞いた

『小僧、さういふときはしづかにしなけりやならな

いぞ

おれだつて寶石は好きなんだからな』

伯爵はかう嘲笑してわしをつかまへる

そして歡呼して郎黨のむれがわしをとりまいた

『畜生、野郎ども、わしは泥棒ぢやないぞ

わしは戀人を盗まうとしただけだ』

いくらしやべつてもむだ、いくら策をめぐらしても  
 むだだつた

すばやく繩の輪が準備された

太陽が出ると彼女はびつくりした

まがふ方なき絞首臺にわしを見出して

そこで幽霊どもは愉快な笑ひを合唱した

六番目が頭を手にさげてすゝみ出た

「こひのかなしみにかり立てられてわしは狩獵に

行つた

鐵砲をもつて忍びあるいた

木からはうつろな鳴きこゑがした

鳥が鳴いた『頭――切れ、頭――切れ』

あゝ、一羽の小鳥でもさがし出せたらな

それを戀人の家へもつてゆくものを

かう考へて戴やしげみの中を

わしの狩人の眼はうかゞひまはした



あすこでいちやついでるのは何だ、嘴をつきあはし  
てるのは何だ

二羽のやまばとかもしれぬぞ

わしは忍び寄つた——撃鐵を上げて——  
見る、わし自身の戀人だつた

わしの小鳥、わしの花嫁だつた

みしらぬ男が彼女をしたしげに抱いてみた

さあ、手だれの射手よ、うまくあてろ

みしらぬ男はそこで血にまみれて倒れた

そのすぐあとで首斬人の行列が——

わし自身がその場の立役者だつたが——

森をよこぎつて進んだ、木からは

鳥が鳴いた『頭——切れ、頭——切れ』

そこで幽霊どもは愉快な笑ひを合唱した  
そこで樂師自身がすゝみ出た

### 九（若ざめたひと）

僕は横になつて眠つてゐた、ほんとになごやかに眠つて

ゐた

怨みと悲しみはなくなつてゐた

そこへゆめのすがたが現はれた

一等きれいなむすめさん

彼女は大理石のやうに蒼ざめてゐたが

わけありげにふしぎなやうすだつた

眼は眞珠のやうに涙くみ

髪はふしぎに波うつてた

しづかにしづかにこの大理石のやうに

蒼いむすめは動いて來て

僕の胸によりかゝつた

大理石のやうに蒼ざめたむすめさんは

「わしはむかし唄をうたつてた

美しい唄は種切れになつた

體の中で心臓がほり裂けたら

唄はそのときはもうさよならだ」

そして氣ちがひじみた笑ひが倍になつて高まつた

そしてあをさめた群は環をつくつて漂つた

そのとき教會の塔から「一時」が鳴つた

そこで幽霊どもは泣きながら墓へとびこんだ

(一) ヴルピウス (Chr. Aug. Vulpius) の作なる遠慮小説

「リナルド・リナルディ」 (Rinaldo Rinaldi) の主  
人公。

(二) アルノルド (Gutz. Ferd. Arnold) の小説「シンドル  
<ノネス (Schinderhannes) の主人公。>

(三) 同くアルノルドの遠慮小説「オランダ・オランダイ  
」 (Orlando Orlandi) の主人公。

(四) シーロ「群盜 (Krauber)」の主人公カール・モール  
(Carl Moor) のこと。

(五) シラーの戯曲「マリー・ステュアート」に登場する。エ  
リザベス女王に幽閉されたスコットランド女王メアリーに  
應じて失敗し自殺する。

憎みと喜びとで僕の心臓は

なんと動揺し熱く燃えることが

美人の胸は動悸しない

氷のやうにつめたい胸だ

「ほんとにわたしの胸は動悸せず

氷のやうにつめたいけれど

わたしも戀の喜びは知つてます

戀の全能は知つてます

わたしの口と頬とは燃えて赤くならず

わたしの心臓には血が流れませんが

ふるへてこはがりさからはないで

わたしはあなたの眼には美しくて善良ですもの」

そして一層はげしく僕を抱きしめて

苦しいといつていゝくらゐにした

そのとき雞が鳴き——黙つてかき失せた

大理石のやうに蒼ざめたむすめさんは

一〇（復活）

呪文の力で僕がたくさんの

蒼ざめた死骸を呼び出したので

こいつらはもうもとの

まつくらやみへ歸らうとはしない

先生の鎖めの呪文をば

僕はふるへとおそれとで忘れた

そこではつた幽霊たちが

僕自身を朦朧とした住居に引ばりこむ

やめろ陰気な悪魔たち

やめろ僕をば困らすな

この地上のばら色の明りのなかには

まだたたくさんのうれしいことがあるはずだ

僕はあのふしぎに美しい

花の方へいつもゆかうとしなけりやならない

もしも彼女を愛してならないとなら

僕の全生涯は一體なんだらう

僕は彼女を一度だけ抱きしめたい

もえる心臓に押しつけたい

一度だけもつとも幸福なくるしみの

キッスを唇と頬とにしてみたい

一度だけその口から

愛情のこもつたことばを聞いてみたい

そしたら即座に、幽霊どもよ

おまへらについて暗いところへ行くとよ

幽霊どもはこれを聞きとつた

そしておそろしげにうなづいた

愛するひとよ、僕はやつて来た

愛するひとよ、僕を愛しますか

歌

一（こひの挨拶）

ひどくうつくしくて清らかな

とてもたのしげなをとめ子よ

おまへにつくすといふことだけに

僕の生命を捧げたい

おまへの愛らしい眼は

月光のやうになごやかに輝いでる

おまへの赤い頬つべたは

あかるい善哉いろの光をちらす

おまへの小さい口からは

眞珠がならんでるやうに光がさす

けれど一番うつくしい寶石を

おまへは祕密の胸の箱にひめてゐる

僕がいつかおまへを見た時に

心にしのびこんだのは

無邪気なこひといふものだらう

とてもたのしげなをとめ子よ

二（こひのなげき）

夜ふとところに抱かれて

しづかに僕はなやみを訴へる  
たのしい人からは遠ざからねばならない  
よろこびの笑ふところからはこはがつて逃げねばならな  
い

しづかに僕の泪はながれる  
いつもいつも流れる、しづかにながれる  
しかし胸のもえるあこがれは  
どの泪も消さうとはしない

むかし笑ふ元氣な子供だつた僕は  
いろいろの面白いあそびをした  
生のくれる物がうれしくて  
苦しみの感じなど知らなかつた

そのころはこの世は色とり／＼の  
花のたくさん咲いてゐる庭園にはかならず  
僕の日課は薔薇やすみれの花や

影が僕にはむかつておそろしげに脅かす  
胸のなかではひと知れずさ／＼やいてる  
僕自身のなじみのないこゑが

なじみのない痛み、なじみのない苦しみが  
ひどくあら／＼しくわき上る  
僕の内臓には  
なじみのない熱情がくひこむ

しかし僕の心を休みなく  
炎がもえてみだすのは  
苦痛のため僕が死ぬるのは――  
こひよ、おまへのしわざだぞ

### 三（あこがれ）

若者たちはそれぞれ娘の手をとつて  
菩提樹の並木路を散歩する

ジャスミンの花の花守りだつた

みどりの草原であまいゆめを見ながら  
僕は小河のおだやかに流れるのを見てた  
いまは小河を見ると

僕の青いすがたが見える

僕の眼が彼女を見てからは  
僕は青い男になつてしまつた  
僕は人知れずかなしくなつた  
僕にはふしぎなことが起つた

心中ふかく永いこと

しづかな平和な天使をいだいてた  
この天使がふるへてこはがつて  
星の故郷へ逃げ去つた

僕の眼をくろいやみがつく／＼でしまひ

僕はしかしあるいてゆく、可哀さうに  
まつたくひとりぼつちで

僕の心臓は苦しくなり、眼はくもつて来る  
戀人とたのしんでゐる他人を見ると  
といふのは僕もかあいい戀人があるが  
彼女がほんとに遠くにゐるものだから

何年ものあひだ辛抱した  
もうこれ以上くるしさが耐へられない  
僕は荷造りをして杖をとり  
ひろい世間へ出て行つた

數百時間あるきつゞけ

とう／＼大きな都會に來た  
これは河口にある美しいまちで  
三つの堂々たる塔がある

こゝでたちまち僕のごひのうらみは消えた  
 こゝには僕の上るこびが待つてゐた  
 こゝでは僕はいゝひとの手をとつて  
 かをる菩提樹の並木路を散歩することが出来る

四（うつりかはり）

僕の戀入のよこにみると  
 うれしきで胸がうき／＼する  
 心がゆたかになつて来て  
 世界を賣物に出したくなる

しかしまた彼女の白い腕から  
 またも別れねばならないときは  
 ありあまるほどあつたものはみな消えて  
 僕は乞食のやうに貧しくなる

五（期待）

朝起きては問ふ  
 戀人がけふは来るだらうかと  
 夕方には力なく倒れてなげく  
 彼女はけふも来なかつたと

夜は悲しみに  
 目をさましてねむれず  
 ひるまは半ば眠つたやうで  
 ゆめを見ながらさまよふのだ

六（せつかち）

心はあちらこちらへと追ひ立てられるやうだ  
 もうすこしたてばきつとあのひとに會へるのだ  
 きれいなむすめの中でも一等きれいなひとに――

正直ものの心臓よ、ひどく動悸してゐるね

でも時間といふものはのらくらものだ  
 のん氣にのろ／＼と足をひきずつて歩き  
 あくびしながらゆつくり歩く――  
 こののらくらものめ、急いでくれよ

氣がちがふほどあせつて追ひ立てられるやうだ  
 しかし時の女神たちは實際こひをしなかつたのだ――  
 こつそり惨酷な同盟を結んで  
 意地わるく戀するものせつかちをあざけつてゐる

七（こひといふことは）

木の下をたゞひとり悲しんで  
 僕はさまよつて行つた  
 そのとき音のゆめがやつて来て  
 胸にしのび入つた

空高くとぶ小鳥たちよ

その歌は誰が教へたのだ  
 啼きやめろ、僕の心臓は  
 それを聞くともまた悲しくなるんだから

「ひとりの娘さんがやつて来て  
 いつもいつもこれを歌つてた  
 そこでわたしら小鳥もおぼえたのです  
 美しい黄金きんぎょのことはば」

そのことはもうそれ以上はなしぢやならない  
 とつてもずるい小鳥たちよ

僕の悲しみを盗まうとするんだね  
 だが僕は誰ひとり信用しないよ

八（大工）

こひしいこひしいひとよ、手を僕の胸にあててこらん

聞えるかい、心臓の小部屋の中のとときめきが  
いぢわるい大工がそこにゐて  
僕の柩を作つてゐるんだよ

晝も夜も甕を打ちたゝいて  
もう長いこと睡眠を妨害して来た  
あゝ、急いでくれ、大工さん  
僕がまもなく眠れるやう――

## 九(無題)

僕の歌が  
花であつたらいいのに  
こひしいこひしいひとに  
かゞせるやうに贈るのに  
僕の歌が  
キッスであつたらいいのに

戀人の頬に  
こつそりみんな贈るのに

僕の歌が

小さい豌豆だつたらいいのに  
豌豆スープに煮たら  
うまいにちがひないのに

## 一〇(白い花)

父の庭にはこつそりと  
かなしげな青い花が咲いてゐる  
冬が去り春が来ても  
青い花はいつもひどく青い  
青い花は病氣の  
花嫁のやうに見える

僕に青い花がひそ〜といふ

しづかな天使のやうなよろこびがやつて来た

## 一一(さやうなら)

僕のかなしみの美しい揺籃ゆりかごよ  
僕のやすらひの美しい墓碑たふしよ  
美しい衞まもりよ、別れねばならぬ  
さやうなら！ と僕はおまへに呼びかける

さやうなら僕のいとしい戀人の  
ゆききする聖なる戸口よ  
さやうなら僕が彼女を  
はじめて見た聖なる土地よ

いつそきみを見なければよかつたのだ  
僕の心の美しい女王よ！  
そしたらこんなことにはならなかつたらう  
いま僕がこんなにみじめであるなんて

青い花はさうさゝやいてひどくたのわ――  
そこで僕は負けてすばやく摘んだ  
すると急に僕の心臓にもう出血しなくなり  
僕の心の眼は明るくなつた  
僕の傷ついた胸には

「ねえあなた、あたしを摘んでよ」  
花に僕はいふ「僕はいやだ  
決しておまへを摘みはしない  
僕は艱難苦勞して  
緋いろの花をさがしてる」

青い花はいふ「あちこちさがしなさい  
あなたが冷たく死ぬ日まで  
探してもむだよ、緋いろの花は  
決して見つかりはしませんよ  
それよりあたしを摘みなさい  
あたしはあなたと同じく病氣です」

きみの心にふれようとはしなかつた  
愛を求めもしなかつた

きみの息のたゞよつてゐるその場所  
たゞしづかな生活がしたかつたのだ

だのにきみは僕をば追ひ拂ひ

きみの口はひどいことばを吐いた

僕の心中には狂氣がうごめいて

僕の胸は病み傷ついた

僕の手足はなえしぼんで

杖にすがつて僕は足をひきずつて歩く

疲れた頭をはるかな土地の

冷たい墓穴に横たへるまで

※ 一八一九年の夏、ハイネが商會を閉店して、大學入學準備のため、ハンブルグを去つて、デュッセルドルフにかへるときの作品。

### 二三(出帆)

荒くれた水夫さん待つてくれ

僕もすぐいきみについて港へゆく

二人のをとめに別れを告げる

ヨーロッパ船とあのひとに

血の泉よ僕の眼から流れて出る

血の泉よ僕の體から流れて出る

熱い血で僕が苦痛を

書きしるすやうに

おゝ戀人よ、けふになつて

なぜ僕の血を見るのをこはがるのだ

永年、僕が蒼ざめて

胸から出血して前に立つのを見てたくせに

不吉な林檎の贈物で

われらの祖先を不幸に陥れた

樂園の蛇のことをうたつた

古い唄をきみは知らないのか

まがごとみな林檎がもつて来た

エヅアはそれによつて死をもたらし

エリスはトロイの火をもつて来た

きみは死と火の兩方とももつて来た

(一) 舊約聖書創世記によれば人類の祖アダムの妻エバは蛇に誘はれて樂園の林檎を食ひ、神の怒りにふれこののも人間は死ぬべく運命づけられた。

(二) ギリシア神話では戰神アレスの姉妹、ハレウスの婚禮に招待されなかつたのを怒つて林檎を投げ出し、列席のヘラ、アフロディテ、アテナの三女神の争をまき起す。この争にアフロディテに采配をあげたパリスは報酬としてトロイの王姫ヘレンを獲ることを女神から許され、トロイ戦争の原因となる。

### 二三(ライン河上)

山と城とは見下してゐた

鏡のやうに澄みわたつたラインの河を

僕の小舟はしづかに帆走する

日の光に照らされて

さゞ波をなしてたはむれる金の波を

しづかに僕は眺めてゐた

僕の胸深くかくしてゐた感情が

こつそり頭をもたげて来た

やさしげに挨拶し約束し

流れの美しさは僕を誘ふ

だけど僕は知つてるのだ、表面は輝いてゐても

その内部の死と闇とをかくしてゐることを

表面には楽しみ、胸の中にはわるだくみ  
流れよおまへは戀人をつくりだ

あのひともやさしくなづくことが出来て  
やはり正直さうにやさしくほゝんで見せるのだ

一四 (カルル・フォン・ユ\*の記念帖に)

はじめはほとんど絶望した

とても耐へられないだらうと思つた

だのにとにかく耐へて来た——

だけど「どういふふうに」とだけは訊ねてくれるな

\* カルル・フォン・ユヒトリツツと、ベルリンでの友でシレジア  
生れの劇作家にフリードリヒ・フォン・ユヒトリツツといふの  
がある。これの親戚であらう。

一五 (豫感)

星辰のかゝやいてゐる上の方では

いまこゝには歌がある、かつて狂ほしく

エトナ火山から流れ出る熔岩の流れのやうに

心の奥底から流れ出て

輝く火花をまはりにちらした歌がある

いまその歌はだまつて死人のやうにねてゐて  
つめたく凝結して霧のやうに蒼ざめてゐる

しかし戀の心がいちどそのうへをたゆたへば  
あらためてむかしの炎が生きかへらす

こゝ下界では僕たちの手に入らぬ

よろこびが僕たちに咲いてくれるにちがひない  
死の冷たい手の中で

生ははじめて暖まることができ

夜の光が照り出すのだ

一六 (反響)

薔薇と扁柏<sup>ツツジ</sup>と金箔とで

棺のやうにこの木を

愛らしく美しく飾りたい

そして僕の歌をなかに埋葬したい

あゝ戀をもいつしよに埋葬できたらなあ

戀の墓のかたへには休らひの花が萌え

咲き出てひとが摘むだらう——

けれどその花は僕自身が墓に入らねば咲かないのだ

僕の胸にはいろんな豫感が高くなる

戀の心が歌のうへに露をおく

遠國のなつかしい戀人よ

この木がいつかおまへの手にわたつたら

そのとき歌の魔法のしぼりはとけて

蒼白い文字はおまへをみつめるだらう

訴へるやうに美しい眼をみつめ

かなしみと戀するものの吐息とでさゝやくだらう

物語詩

一 得度式

森の禮拜堂にたゞひとり  
處女マリアの畫像のまへに  
敬虔な青いかほした少年が  
うや／＼しくひれふしてゐた

「おゝ、マドンナ、わたしを永遠に  
このしきめの上にひざまづかしておいて下さい  
ひどく冷たい罪の多い世間へ  
決してわたしを追ひ出さうとしないで下さい

あなたの熱情だけでもえながら

おゝ、マドンナ、けふはわたしのいふことを聞いて  
下さい

慈悲心にみちた、奇蹟をたくさんおもちの方よ  
わたしにめぐみのしるしを施したまへ  
はんの恵みのしるしだけでもようございます」

このときおそろしい奇蹟があらはれた  
森と禮拜堂はたちまち消えた  
少年はまるで無我夢中だった  
何もかもまた／＼くまにかはつたのを見てとつた

きれいな廣間に呆然として立つてゐた  
そこにマドンナがおみでだつたが後光はなかつた  
かあいいをとめにすがたを變へられて  
會釋し子供らしいよろこびをこめてほゝゑんだ

おゝ、マドンナ、あなたのおつむには  
かゞやく捲髪がきら／＼と波打つてます  
お口の聖なる薔薇のまはりには  
あまいほゝゑみが漂うてゐます

おゝ、マドンナ、あなたのお眼は  
星かげのやうにわたしを照らします  
生の小舟は迷つてゆきますが  
星は永遠に安全にみちびいてくれます

おゝ、マドンナ、ためらひなく  
あなたの苦痛の試練に耐へました  
信仰にみちたこびを盲目的に信じ

そして見よ、ブロンドの捲髪の頭から  
みづから一本の毛をぬきとつて  
神々しい聲で少年に語られた  
「あなたの地上の最上の褒美をお受け」

いつてみよ、この得度式を確證したのは誰だ  
空の青いさなかに爰と  
七色の波が立つのを見なかつたか  
みんなはそれを虹と呼ぶ

天使は上り下りして  
翼をさわ／＼はたかせ  
ふしぎなうたを小さいこゑでうたふ  
あまい調和したひびきをば

少年にはよくわかつた  
天人花が永遠に咲いてゐる  
あの國へたえず自分をば



こがれの情で引つばるのはなにか

## 二 悲しいひと

かなしみと苦しみとが  
顔のうへに記されてある  
蒼ざめた少年を見たひとは  
みんな心がかなしくなつた

同情をこめたそよ風は

熱いひたひをひやさうとしてあふいでやり  
いつもは内氣なむすめたちも  
なくさめにその心のなかへほゝろみかけようとした

まちの人のほげしいざわめきから  
彼は森へのがれて来た  
そこでは楽しく木の葉が鳴つてゐた  
たのしい小鳥の歌がひびいてた

けれども歌はずく止んだ  
木の葉はかなしく鳴り出した  
悲しいひとがのろ／＼と  
森に近づいて行つたとき

## 三 やまびこ

一人の騎者がはざまを行つた  
悲しげにしづかに跑步あしで  
「あゝ僕は戀人の手もとにゆくのだらうか  
それとも暗い墓穴へか」  
やまびこがこたへてくれるには  
「暗い墓穴へだ」

騎者はなほも進んで行つた  
そのうへ苦しく吐息をついた  
「それぢやこんなに早く墓穴へ行くのか  
それもいゝ、墓穴には休息がある」

やまびこがそれにこたへてくれた

「墓穴には休息がある」

騎者の頬からはかなしげに  
涙がひとしづくころげおちた  
「墓穴にしか休息がないのなら  
それなら墓穴も結構だ」  
やまびこはうつろなこゑで答へた  
「墓穴は結構だ」

## 四 二人の兄弟

上のはう峰のいたどきに  
闇につゝまれた城がある  
しかし谷間には火花がとび  
輝く劍があら／＼しく鳴る  
怒りたつてそこで狂暴な

決闘をやつてゐるのは兄弟だ  
語れ、なにゆゑ兄弟が  
手にした劍で争ふのだ

伯爵の姫ラウラの眼の火花が  
兄弟の争ひの火をつけた  
ふたりは戀に燃えたつた  
氣高かあいいをとめゆゑ

しかし兄弟ふたりのうち  
どちらの方に姫の心は向いたのが  
いくら考へてもきめられない――  
劍をぬけ、決めよう

そしてふたりはあつぱれ大膽にもたゞかつて  
切りこみ切りこみ劍を鳴らした  
荒々しい劍上氣をつける  
夜には不吉なまやかしが忍んでゐる

あゝあゝ血まみれの兄弟よ  
 あゝあゝ血まみれの谷底よ  
 互ひの刃にうちざゝれて  
 たゝかひ手はふたりとも倒れたのだ

數百年の時がたつた  
 幾代ものひとが墓に入つた  
 かなしげに峰の高みから  
 荒れた城が眺め下して

しかし夜には谷底で  
 こつそりとあやしく何か動き  
 十二時といふときが来ると  
 そこで兄弟ふたりがたゝかふのだ

### 五 哀れなベートル

(一)

どこにゐてもどこへ行かうとも  
 なかからおれをいためつける

戀人のそばへおれをおしやる  
 グレーテが癒してもできるやうに  
 そのくせあの子の眼を見ると  
 またすぐそこから去らずにすまない

おれは山の上へ登つてゆかう  
 そこではなんといつてもひとりぼつち  
 そしておれがじつとそこへ立つたなら  
 しづかに立つて泣いてやらう

(三)

哀れなベートルはよろめいてゆく  
 のろ／＼と死人のやうに蒼ざめ物におちて  
 ちまたに立つてみたひとひとは  
 彼を見ると思はず立ちどまる

ハンスとグレーテは踊りまはり  
 よろこびで夢中に叫びをあげる  
 ベートルはむつりして立つてゐて  
 白雲のやうにまつ青だ

ハンスとグレーテは花よめ花むこで  
 婚禮の晴着を着飾つてる  
 哀れなベートルは爪をかみ  
 ふだんの着物を着てゐるのだ

ベートルは低いこゑでひとりごといい  
 かなしげにふたりを眺めてゐる  
 「まつたく正氣すぎてなかつたら  
 いつそ自殺をするんだが」

(二)

おれの胸には悲しみがすんでゐて  
 胸をはりさかうとしてゐるのだ

娘たちはお互ひに耳うちしあふ  
 「あの人はきつと墓から出て来たのよ」  
 あゝ、ちがふ、かあいいむすめさん  
 あのひとはこれから墓へゆくのだ  
 彼は戀人をなくなした  
 だから墓が一等いゝ場所なのだ  
 そこなら一等よく横になれ  
 最後の審判の日までわむられる

### 六 囚人の歌

おいらのお祖母がリーゼを迷はしたとき  
 みんなが火あぶりにかけようとした  
 もうお役人がどつさりインキを塗りたくつたが  
 お祖母は白状しなかつた  
 みんながお祖母を釜にぶちこむと

お祖母は「人殺しい、かなしや」と叫んだ  
それから黒いけむりが昇つたら  
お祖母は鳥になつて空に舞ひ上つた

おいらのまつ黒な羽の生えたお祖母よ  
この塔へおいらを訪ねに来てくれろ  
連く格子のなかへ飛んで来て  
おいらにチーズと菓子をもつて来てくれろ

おいらのまつ黒な羽の生えたお祖母よ  
おゝこいつだけは氣をつけてくれろ  
おいらがあした空を飛ぶときに  
おいらの叔母たちが眼を啄き出さぬやう

### 七 擲弾兵

フランスへと二人の擲弾兵が歩みつけてゐた  
彼等はロシアで捕虜になつてゐたのだつた

ドイツの宿舎へ来たとき  
ふたりはうなだれた

ふたりともそこで悲しいしらせを聞いた  
フランスはもう絶望だ  
大軍は敗れうちくだかれ  
皇帝は、あゝ皇帝は捕虜になつたといふ

擲弾兵たちはそこで涙ながした  
この悲しいしらせを聞いたとき  
一人はいつた「なんと悲しい  
古傷がなんとひどく痛むぢやないか」

もひとりはいつた「萬事休した  
おれもおまへと一緒に死にたいが  
だけど家には妻子がある  
おれがみなけりや、やつらは駄目になる」

嘶く馬の聲のきこえる日まで

そのとき皇帝は墓の上をよぎり  
あまたの劍は鳴りひびき輝くだらう  
そのときおれは武裝して墓から出る――  
皇帝を、皇帝を護るため」

＊ 一八一九年デュッセルドルフでの戦、詩人自身は一八一六年  
の作だといつてゐる。

### 八 使命

わが僕、起つて早く鞍をおけ  
ひらりと馬にまたがつて  
森越え野越え早駆けしろ  
ドゥンカン王のお城まで

着いたら既に身をひそめ

「おれには妻がなんだ、子がなんだ  
おれにはもつと立派なのぞみがある  
きやつらには腹がすいたら乞食でもさせろ  
皇帝が捕虜になられたのだ  
兄弟、おれの願ひをひとつ聞いてくれ  
おれが死んだら死骸をば  
フランスへもつて行つて  
フランスの土に埋めてくれ

紅いリボンの十字章を  
おれの胸につけてくれ  
鐵砲を手にもたして  
劍を吊らしてくれ

さういふふうにして横になつて、じつと耳を傾けよう  
墓の中でちやうど歩哨のやうに  
砲彈の唸りこそと

馬丁に見つけ出されるまで待て  
馬丁に問うてくれ「ドゥンカン王の王女のうち  
花嫁になられるのはどちらの方だ」

そして馬丁がもしも「栗色髪の方だ」といへば  
そのしらせをいそいで持つて来い  
だが馬丁がもしも「金髪の方だ」といつたら  
それならあまり急を要しない

それなら細匠のところに行つて  
縄を買つてくれ  
物いはずゆつくり馬をやれ  
縄をおれのところへ持つて来い

### 九 嫁とり

戀人よ僕はひとりでは行かない  
おまへが僕と一緒に行くべきだ

愛する古い荒れたかくれ家へ  
さびしいつめたい悲しい家へ  
そこでは僕の母が門口にしゃがんで  
子供の歸りを待つてゐるんだ

「陰気な方、わたしをはなしてちやうだい  
誰があなたを呼んだのです  
あなたの息は熱く手は氷のやう  
あなたの眼は火花をちらし頬はあをい  
だけどわたしは楽しく暮したいのよ  
薔薇のかほりのする日光のあたるところで」

薔薇にはほほせりやいゝし日は輝かせろよ  
僕のかあいい戀人よ  
白く波うつひろいヴェールをかぶつて  
高鳴るリラの絃をかい撫でて  
婚禮の歌をうたひたまへ  
夜風が曲を吹いてくれよう

### 一〇 ドン・ラミロ

「ドンナ・クララ、ドンナ・クララ  
永年はげしく愛して來たひとよ  
おまへは僕を破滅ささうときめてしまつた  
しかも無慈悲にきめてしまつた

ドンナ・クララ、ドンナ・クララ  
人生の賜物はやはりたのしいね  
だけど地下のくらしは怖ろしい  
くらい冷たい墓のなかは

ドンナ・クララよるこびなさい  
明日はフェルナンドが祭壇のまへで  
花嫁としてきみに挨拶するよ——  
婚禮には僕を招待するかい」

「ドン・ラミロ、ドン・ラミロ  
あなたのことばはひどく聞えるわ  
わたしの意志を馬鹿にする  
占星ホラのことはよりまだひどいわ

ドン・ラミロ、ドン・ラミロ  
陰気な憂鬱などおすてなさい  
むすめは世間に澤山あるし  
わたしたちは神様がお裂きになつたのよ

ドン・ラミロ、あなたは勇敢に  
あんなに澤山のモール人モール人にお勝ちになつたのね  
今度は御自分にお勝ちなさい——  
明日はわたしの婚禮に來てちやうだい」

「ドンナ・クララ、ドンナ・クララ  
え、誓ひますよ、行きますよ  
あんとと輪舞ワルツを踊りませう

お休み、明日は行きますよ」

「お休みなさい」——窓はガチャンと鳴つた  
下でラミロは溜息ついて立つてゐた  
化石したやうにまだ長いこと立つてゐた  
とう／＼闇に姿を消した——

永いあらしひのあととう／＼夜も  
書に屈服しなげりやならなかつた  
まるで多彩な花園のやうに  
トレドのまちはひろがつて見えた

宏壯な建物や宮殿が  
日光に照らされ明るくかゞやいてゐる  
教會の高い圓屋根は  
鍍金されたやうに壯麗にかゞやいてゐる

蜂のむれのやうにうなりながら

花婿の邸の戸口まで  
群衆はなだれを打つて来る  
そこでは豪奢に古式どほり  
結婚の祝ひがはじまるのだ

馬上試合はたのしい宴會と  
聲高い歡呼のうちにいれかはら  
時刻はざわめきに早く去り  
とう／＼夜になつてしまつた

すると婚禮の客たちは  
廣間に舞踏しようを集まつた  
ともしひの光にそのとり／＼の  
豪華な衣服が照りかゞやく

一段高い椅子には花嫁と  
花婿とが腰を下してゐる  
ドンナ・クララとドン・フェルナンド

祝ひの鐘の音はひびきたる  
信にみちた禮拜堂からは

祈りの歌がこゝろよく聞えて来る

ただどあすこには、ほうら見る  
あすこの市場の禮拜堂からは  
雑沓し波うつて

とり／＼人の群が流れ出る

華麗な服装の騎士や貴婦人たちが  
莊嚴にきらびやかな廷臣たち  
明るい鐘の音は鳴りわたり  
そのあひまに大風琴の音もする

しかし畏敬の念から道をあけてもらひ  
群衆のまんなかを歩いてくる  
着飾つた若い夫婦である

ドンナ・クララとドン・フェルナンド

そしてふたりは甘い會話をかはす

そして廣間では着飾つた人の波が  
たのしげに波うち

高い太鼓の音はなりひびき  
喇叭は高く鳴らされる

「お、美しい夫人よ、でもどうして  
あなたのお眼は廣間の隅に  
向けられてゐるのです」  
騎士はいぶかつてかういつた

「ぢやごらんにならないのドン・フェルナンド  
あすこの黒いマント着たひとを」  
すると騎士はやさしくほゝゑんだ  
「あゝあれは影にすぎませんよ」

けれども影は近づいて来た

マントを着けた人間だつた  
早くもラミロと見わけがついて  
クララは眞紅になつて挨拶する

舞踏はもはや始まつてゐた  
踊り手はワルツの荒い輪になつて  
陽氣にぐる／＼まはつて  
床はみし／＼いひ震動する

「心底から喜んでドン・ラミロ  
わたしはあなたとをどりますわ  
でも陰氣な黒いマント着て  
おいでになるべきぢやなかつたわ」

射通すやうなすわつたまなこして  
ラミロは美しいひとを見て  
彼女を抱いて陰氣にいふのだつた  
「ぜひと来いと仰しやつた」

そしてふたりは渦巻の中へ入つてゆく

「放して、放して、ドン・ラミロ  
あなたの息はほんとに死骸のほひよ」  
「またもや陰氣な聲だつた」  
「ぜひと来いと仰しやつた」

床には湯氣が立ち熱くなり  
ヴァイオリンはたのしげにひびいてる  
氣ちがひじみた魔法にかゝつたやうに  
みんなは廣間でめまひがする

「放して、放して、ドン・ラミロ」  
人波のなかでいつまでも泣聲がする  
ドン・ラミロは相變らずこたへていふ  
「ぜひと来いと仰しやつた」

「それぢや後生だから、歸つてぢやうだい」

纏れた舞踏の雑沓中へ  
ふたりのをどりては入つて行つた  
高い太鼓の音はなりひびき  
喇叭は高く鳴らされる

「あなたの頬は雪のやうにまつ白よ」  
内心ふるへながらクララはさゝやいた  
「ぜひと来いと仰しやつた」  
ラミロのこゑは陰氣にひびいた

あふれる人ごみのあひだから  
廣間では蠟燭がかゞやいた  
高い太鼓の音は鳴りひびき  
喇叭は高く鳴らされる

「あなたの手はほんとに氷のやうよ」  
クララはこぼさに身をぢぢめて驕いた  
「ぜひと来いと仰しやつた」

クララはしつかとしたこゑで叫んだ  
この言葉が出るか出ないかに  
ラミロのすがたはかき失せた

クララは顔こぼらせて立ちすくんだ  
寒氣がして目がくらみまはりが暗くなつた  
氣絶がこのあかるいすがたを  
自分の暗いくにへ連れて行つた

とう／＼昏睡が遠のいて  
クララは睫毛をしばたゝいた  
けれど恐怖にあらためて  
美しい目をとちようとする

そのうち舞踏がはじまつたが  
クララは席を立たないで  
花婿のよこに坐つて  
そこで騎士は心配して問ふのだつた

「ねえ、なぜ頬を蒼くしてるの、  
なぜきみの眼はくもつたのだ」

「でもラミロは——」とクララはどもつていつた  
恐れて舌がいふことを聞かないのだ

だけど今度は花婿のひたひに  
恐れてふかいかつい皺ができ

「夫人よ、血なまぐさいことを聞きなされるな——  
けふの晝、ラミロは死んだのだ」

\* 元來は北阿のウラケニヤの住民の意から轉じて、黒人の總  
稱、とりわけ北阿居住の回教徒、こゝでは一四九二年までスエ  
インにゐたアラセン人のクラナダ王朝との戦ひの事にかけてい  
ふ。

一一 ベルジャザル

はや眞夜中は近づいた  
バビロンはしづかな休息をしてゐた

王は厚顔にみどりちらし亂暴に神を冒瀆した  
群れゐる臣下どもは高らかに喝采した

王は誇らしげなまなざしして叫び  
召使はいそいで出てゆき歸つて來た

彼はたくさんの黄金の器具を頭にのせて來た  
エホバの神殿から奪つて來たのだ

ふちまで酒の満ちた聖杯を  
無道な腕で王はつかみとつた

底までいそいで飲みほした  
それから泡のついた口で聲高に叫んだ

「エホバきさまに永遠の嘲りを豫告する  
おれはバビロンの王なのだ」

高みの王城だけは灯がゆら／＼し  
臣下どもがさわいでゐた

その上手の王の廣間では  
ベルジャザルが宴を催してゐた

臣下どもは綺羅星のやうにみならんで  
輝く酒の入つた杯をのみほしてゐた

杯は鳴り臣下どもは歡呼して  
わがまゝな王を悦に入らせてゐた

王の頬には熱い火がかゞやき  
酒に果敢の勇氣が湧いた

血氣にかられて無思慮にも  
王は罪深いことばで神をそしつた

この恐ろしい言葉がひゞきやむか止まぬかに  
王は心中ひそかに恐ろしくなつた

するどい突ひごゑがびたつとやんだ  
廣間は死人のやうにひつそりした

そして見よ、見よ、白い壁に  
人の手のやうなものがあらはれた

書いた、書いた、白い壁に  
火の文字を、書いて消えた

王は眼を握りて坐つてゐた  
その膝はガタ／＼ふるへ死人のやうに蒼くなつて

臣下どもは寒氣がしおひえきつて坐つてゐた  
しづまりかへつて坐つて聲を立てなかつた

陰陽師たちが来たが壁の火の文字を  
解くことはだれひとりできなかつた

ベルシヤザルはしかしその夜に  
臣下どもから殺された

\* バビロニヤ最後の王。この詩は舊約聖書ダニエル書第五章に取  
材してある。

## 一一二 ミンネゼンゲル

ミンネゼンゲルがいましも

歌合せに乗り出でる

いかにもふしぎな試合だ

全くふしぎな競技だ

泡立つやうに烈しい空想が

ミンネゼンゲルの馬であり

詩法はその柄の役をなし  
ことばは彼の剣なのだ

きれいな御婦人方は絨緞敷いたバルコニから

嚙々として見物してござつてだが

正しい月桂冠を手にしてゐる

正しい貴婦人はその中にはあない

他の者は柵の中にとびこんでも

身につゝがないのだが

われわれミンネゼンゲルはそこですでに

致命傷を負ふものだ

胸の底から湧く歌の血が

そこで一等よく迸り出た者が

一等美しい口から最上のほめことばを

かち得る勝利者なのだから

\* 十三世紀にドイツの諸王侯に仕へた宮廷詩人、もつぱら戀愛  
を歌つた。

## 一一三 モール人の小夜曲

眠つてゐるツライマどこの

胸に涙のしづくがながれる

するとそのかあい小さい胸は

アブドルをこがれて鼓動する

眠つてゐるツライマどこの

耳にそのかなしい溜息がきこえる

するとそのフロンドの小さい頭は

アブドルの戀をこつそりたのしくゆめみる

眠つてゐるツライマどこの

手の上に心臓の血の泉がながれる

するとそのかあい小さい手は

アブドルの赤い鮮やかな血をほこぶ

あゝ、くるしみは口のなかに

舌をもたず啞に生れて來た

涙ばかり、ためいきばかり

胸の傷からの血をもつばかり

\* ドン・ラミロの詩集題。

## 一一四 窓の眺め

蒼い顔したハインリヒが通りすぎる

きれいなヘドヴィヒは窓ぎはにゐて

小聲でいつた「神様おたすけ

下ゆくあのひとは幽霊のやうにまつさをです」

下ゆく男は眼をあげて

ヘドヴィヒの窓をこがれて見た



きれいなヘドヴィヒは戀わづらひみたいなものにとりつかれ

幽霊のやうに彼女も齎くなつた

きれいなヘドヴィヒはもう戀のかなしさで  
毎日毎日窓べに立つて見張つてた  
だがまもなくハインリヒの腕に抱かれた  
毎夜毎夜の丑三つ時に

一五 傷ついた騎士

鬱陶しく悲しいひびきのする  
わかしばなしを知つてゐる  
一人の騎士がこひわづらひ  
その戀人は不實だとさ

おのれ自身の戀人を  
不實な奴とさげすまねばならぬ

僕の船は早く走る

戀人の家のそばを通りすぎた  
窓のガラスが光つた  
目ごとび出すほど見つめたが  
手をふつてくれるひとはなかつた  
涙よ、僕の眼が霞まないやうに  
眼から出て行つてしまつてくれ  
僕の痛む胸よ、やぶれるな  
あんまり大きすぎる悲しみのため

一七 後悔の歌

ウルリヒの君は緑の森を馬に乗つて行つた  
木の葉がたのしく鳴つてゐた  
きれいな少女の姿をしたものが  
木の枝ごしに盗み見してゐるのを見つけた

おのがこゝろの苦しみを  
恥づべきこととせにやならぬ

闘技場にのりこんで  
騎士に試合を申込みよからう  
「おれの戀人にけちつけるやつは  
決闘の用意をしたがよい」と

すると多分みんなは黙つてしまひ  
自分自身の傷だけが黙らぬだらう  
そこでおのれの苦情いふ胸に  
彼は槍をさし向けねばならぬだらう

一六 水の旅

僕はマストにもたれて立ち  
ひとつづつ波を数へてゐた  
さよなら美しい故國よ

公達きんたちはいつた「おれはよく知つてゐる  
この花のやうな火のやうな像を  
いつもおれのまはりにうろついて誘ふのだ  
人ごみの中でも荒野でも

あすこの唇は二輪の薔薇だ  
かあいけて純潔だが  
澤山のいやなにかいことはか  
よくあのなかにずるくもぐりこんでゐるんだ

だからこの口はほんとにきつかりと  
毒をもつ蛇がわるがしこく  
くらい葉かげで舌を鳴らしてそ  
美しい薔薇のしげみとちがひはない

あすこのとてもかあい頬の  
あのとでもかあい舌くぼ  
それは穴だ、そこへおれを

物狂ほしい欲望が追ひこんだのだ

あすこにはきれいな頭から

きれいな捲髪が垂れてゐるのが見える

あれはふしぎな綱だ

それで悪魔がおれを捕へたのだ

それからあすこのあの青い眼は

しづかな波のやうに澄んでるので

おれは天國の門だと思つたが

實は地獄の門だつた——

ウルリヒの君はなほも森を馬にのつて行つた

木の葉は氣味わるくざわめいた

そのとき遠くに二番目の姿が見えた

とても蒼ざめて悲しげだつた

公達はいつた「あゝそこにゐるお母さん

わたしをあんなに母らしく愛して下さつたのに

わたしは悪行と悪口とで

御一生をとてまかなしい目におあはせした

あゝわたしが苦痛の火で

あなたの濡れたお眼を乾かしてあげられたら

あゝわたしが胸から出る血で

あなたの蒼い頬を紅くしてあげられたら——

ウルリヒの君はなほも馬に乗つて行つた

森ではくらくなりはじめ

いろんなふしぎなこゑが聞えはじめた

夕方の風が囁くのだ

公達は自分のことばを聞いた

ほんとは幾重にもこだまするのだ

馴れた森の小鳥の仕業だつた

聲高にしゃべり歌ふのだ

ウルリヒの君は氣持のいい歌をうたつた

後悔の歌をうたつた

そのうたをしまひまで歌つてしまふと

またあらためて歌ふのだつた

### 一八 ある歌姫(二)に

彼女が古い物語詩をうたつたとき

いまも僕はおもひおこす、彼女をほじめて

僕の眼が見たときの魔力にみちたすがたを

彼女のこゑがやさしくひびいたとき

そしてこつそりあまく胸に入つて来たとき

涙は僕の頬をながれおちた——

僕はどうなつたのかわからなかつた

ひとつのゆめが僕の上におそつて来た

僕がまだ子供で母さんの

きもちのいゝ部屋のあかりのかけに

しづかに坐つてゐてとても美しい

お伽噺をよんでゐるやうな氣持でした

そとではやみと風のときに

お伽噺はほんとのことになりはじめ

騎士たちは墓穴からあらはれて来る

ロンツイスヴァルで競技があり

そこへローランド殿が馳せつける

たくさんの勇ましい武者がついて来る

そのなかに卑劣なやつガネロンも残念ながらまじつて

ゐる

こいつのためローランドは重傷を負つて

血まみれになり思もたえぬ

彼の角笛の合圖がやつとはるかに

カルル大帝のお耳に達したとき

そのとき騎士はもう死なねばならない——

そして彼といつしよに僕のゆめが死ぬ

僕をゆめから呼びおこしたのは  
 騒然たるもの音だつた

もう傳説は消えてしまひ

人々は拍手喝采して

際限なく「ブラヴオー」を叫び立てた

歌姫はふかく身をかゞめる

(一) ハイトの家によく来たブリマドンナのカロリーネ・シュテル  
 ン。

(二) 騎士の形として多くの作品に詠じられてゐるが、カル  
 (シャルマーニ) 大帝の忠臣として北スペインのロンセスガ  
 アレスでバスク人に殺された。劇のあるものでは養父ガネロン  
 に殺されることとなつてゐる。

### 一九 教訓

蜜蜂の子に母親がいつた

「蠟燭の火に用心おし」

けれど母親のいつたことを

蜜蜂の子は氣にかけない

あかりのまほりをぶん／＼とぶ

ぶん／＼いつてとびまはる

母親の叫びごゑは聞いちゃあない

「蜜蜂の子、蜜蜂の子」

若い血、くるつた血が

火の焔のなかへ押しやる

ほのほのなかへ押しやる

「蜜蜂の子、蜜蜂の子」

ばつともえ上り明るくなる

ほのほはひとを焼きころす

「むすめさんには用心おし

むすこよ、むすこよ」

### 二〇 デュカト金貨の歌

僕のデュカト金貨<sup>＊</sup>よ

おまへたちは一體どこへ行つたのだ

小河で嬉々として

浮き上つたり沈んだりして

金の魚のところへか

きれいな緑の牧場に

朝露をうけて明るく輝いて

金の花のところへか

青空たかく

光に包まれてさまようてる

金の小鳥のところへか

輝く群をなして

夜ごと御空でほゝゑんで

金の星のところへか

あゝデュカト金貨は

小河の波に泳いでない

緑の牧場で輝いてない

青空にとんでない

晴れた御空でもほゝゑんでない

僕の借金取りがたしかに

しつかと掴んでみやがるんだ

＊ 一〇〇年頃東ローマ帝國で鑄造され、その後この名の金貨  
 はハンガリー、ポヘミア、ドイツで公貨として用ゐられ、海  
 外貿易にも使用された。

### 二一 パーデルボルンの曠野での

#### 對話

遠くの物の音を聞かないか

低音四絃琴とヴァイオリンのやうだな

あそこできれいな女たちが踊つてるのだらう

速くて軽快な輪舞をば

「おい、友だち、そいつは考へちがひだ  
ヴァイオリンの音など聞えやしないよ  
仔豚がくん／＼なくのがきこえるだけだ  
親豚が鼻を鳴らすのがきこえるだけだ」

角笛の音を聞かないか

狩人が獲物をたのしんでるんだね

やさしい羊が草を喰つてるのが見える

羊飼は牧笛をならして

「おい、友だち、きみがきいたのは  
角笛でも牧笛でもないんだよ

向ふから豚飼の來るのが見えるだけだ  
家路に豚を追つてるのだ」

遠くの歌を聞かないか

面白い歌合せのやうだね

エンジェルがつばさをならしてその曲に

聲高の喝采を送つてる

「おい、友だち、むかうでい、酔のするのは  
歌合せではないんだよ

鵝鳥飼のこどもがうたひながら

鵝鳥を追つてるんだよ」

ふしぎにたのしく明るく

鐘が鳴るのを聞かないか

敬虔な教會通ひのひとたちが

信心ぶかく村の禮拜堂に參るのだ

「おい、友だち、あれは鈴の音だ

牡牛や牝牛がそれをつけて

自分らのまつくらの小屋へ

首を垂れて行くのだよ」

ヴェールがひら／＼するのが見えないか

夜が來たとき、しづかな場所に

呟いてゐる薔薇のところへしのびよつた

僕は墓のやうにこつそりとだまつて近づいて行つた

なみただけが僕の頬をころがりおちた

僕は薔薇のうてなの中をのぞきこんだ

灼熱する光のやうにかゞやいてた

僕はよろこんで薔薇の木のそばで眠りこんだ

すると僕をなぶるゆめがからかつてくれた

薔薇いろの胸着に胸をつゝんだ

薔薇いろのをとめの顔が見えた

彼女は僕にまつたく金いろのやはらかいなんだか美し

いものをくれた

僕はすぐにそれを金いろの小さい家へもつて行つた

その家のなかはまつたく大きすぎだつた

ひとびとが優美な輪をつくつてまはつてゐた

### 二三 夢と人生

妄想家の問ひには

友よ、そんなら笑ふがいゝ

僕が胸に固くをさめてゐることをも

きみはやはり錯覺だといふのかい

晝はあつく、僕のこゝろもあつかつた  
僕はしづかにくるしみをもちまはつた

小休みなしに十二人の踊り手が踊つて来た  
手をしつかとお互ひににぎりあつて来た  
一つの踊りが終りになり出すと  
ほかの踊りがあらたにはじまつた

僕の耳には踊りの音楽がなりひびく

「一番うつくしいときは決して歸つて来ない  
おまへの一生は一つのゆめにすぎない  
いまこの時がゆめのなかのゆめなのだ」――

ゆめはさめ夜が明けはじめた

いそいで薔薇の方を見ると――

あゝ燃える火花のかはりに

薔薇のうてなの中につめたい虫がひそんでゐる

### 二三 人生の挨拶

記念帖の一頁

この世はひろい國道だ  
われわれ人間は通行人だ  
徒歩で、あるひは馬で走り駆ける  
まるで傳令や傳騎のやうに

互ひにすれちがひおじぎをし

急行馬車からハンカチを振つて挨拶する

抱き合ひキッスしあひたいのだが

馬は疾走していつてしまふ

同じ驛で逢つたとおもつたら

親友公爵アレクサンデルよ

歐者ははや出發の笛を吹き

そしてもうわれわれを別れさす

＊ ハイネが一八一九、二〇年のころ、ボンで知己となつた貴族  
ツトゲンシニクティン公アレクサンデル。この詩はその記念帖  
にしろす。

### 二四 本當に

春が日光をもつてやつて来ると

花はふくらみ咲きひろく

月が光りながら動きはじめると

小さい星どもがそのうしろにたじよふ

歌人が二つのかあいい眼を見ると

心の奥底から歌がわいて来る――

しかし歌や星や花や

かあいい眼や月光や日光など

材料がいくら氣にいつても

どうせ永つときほしないのだ

抒情的間奏曲

ひかし一人の悲しげでものいはぬ騎士があつた  
 雪のやうに白いこけた頬をしてた  
 くらいゆめにとらへられて  
 よろめきふるへながら歩きまはつた  
 彼はひどく無骨で無作法でまともでなかつたので  
 つまづきながら彼が通りすぎると  
 花やむすめたちはとりかこんでくすくす笑つた  
 彼はよく家では一番くらい隅に坐つた  
 人目を避けようとしたのだつた  
 こがれて腕をさしのぼしたが  
 一言さへもいはなかつた  
 しかしま夜中になると  
 ふしぎな歌と物音がはじまつた――  
 扉のところを叩く音がきこえた

## 序詩

一八三三年——一八三三年

さら／＼と鳴る波の泡の着物を着て  
 戀人がこつそりとやつて来たのだつた  
 まるで薔薇のやうに咲き盛つてゐる  
 面紗は金銀珠玉ばかりで出来てゐる  
 ほつそりしたからだのまはりに金の捲髪がなみうつて  
 みる  
 まなこは快い力をこめて會釋する――  
 ふたりはたがひに抱きあつた  
 騎士は彼女をこひの力で抱きしめる  
 無骨ものがいまは火ともえて立ち  
 青い顔したものが赤くなり、ゆめ見るひとが覺め  
 恥かしがりだん／＼あつかましくなる  
 彼女はしかしいたづらのやうにからかつて  
 こつそりとその頭に  
 白いダイヤモンドの面紗をかぶせてしまつた  
 騎士はたちまち魔法にかけられて

水晶のやうな水の宮殿に來た  
 おどろいて見廻はすと四方八方が  
 びか／＼光つてるので眼がくらみさうだつた  
 だけど水精がとてもしたしげに彼を抱いた  
 騎士が花むこで水精が花よめだつた  
 侍女たちが琵琶をかなでた

彼等は音楽を奏しうたうたひ、きれいにうたをうたひ  
 足をあげて踊つた

騎士は正氣を失ひさうになつた  
 そしてかあいひとを一層しつかり抱きしめた――  
 そのときたちまちあかりは消えた  
 騎士はまたも家にひとりぼっちで坐つてゐた  
 陰氣な詩人の小さい部屋で

とても美しい五月の月

すべての蕾のふくらんだとき  
 わがこゝろにも  
 戀は芽をふいた

とても美しい五月の月  
 すべての鳥のうたつたとき  
 もえるのぞみとねがひとを  
 僕はあのひとにうちあげた

二

わが涙からかす／＼の  
 花が咲き出す  
 そしてわがためいきは  
 夜鶯のコーラスになる

おまへが僕を愛してるなら  
 花はどれでも贈つてやる

おまへの窓のまへには  
 夜鶯の歌をひゞかしてやる

三

薔薇、百合、鳩、太陽を  
 むかしはどれもこれも戀のうれしさで好きだつた  
 今はもう愛しない、たゞひとり  
 小さく美しくきよいひとりのひとだけを愛する  
 すべての愛の源なるあのひとこそは  
 薔薇で百合で鳩で太陽だ

四

おまへの眼を見ると  
 なやみもかなしみもみな消える  
 おまへの唇にキッスすると  
 僕はまつたく丈夫になる

おまへの胸にもたれると  
 天國の喜びがやつて来る  
 しかし「あなたが好き」とおまへがいふと  
 僕はせつなくて泣かずにをられない

五

とても愛らしく美しいおまへの顔を  
 最近にぼくはゆめで見た  
 とてもやさしく天使のやうだつたが  
 とても蒼い、痛々しいほど蒼い

そして唇だけが赤かつた  
 その唇にすぐ死の神が青いキッスをした  
 無邪氣な眼からもれてゐた  
 天つ光は消え失せた



## 六

おまへの頬を僕の頬にあててごらん  
 そしたら涙が一しよになつて流れるよ  
 おまへの胸を僕の胸にしつかとおしつけてごらん  
 そしたら焔は一しよになつて燃え立つよ

さうして僕らの涙の河が  
 大きな焔の中を流れたら  
 おまへを僕の腕が抱きしめたら——  
 僕はこひしさで死んでもいい

## 七

僕は魂を百合の花の  
 夢の中へひたしたい  
 百合の花は高い音を立てて

しかし僕はそれを教はつて  
 それを忘れてゐない  
 文法としては心底からこひしい  
 あのひとの顔が役立つからだ

## 九

歌の翼におまへを乗せて  
 戀人よガンジスの野へ  
 おまへを連れて行く  
 そこでは一等美しい場所を知つてるのだ

そこには静かな月影に照らされて  
 赤い花の咲く園があつて  
 蓮の花が自分の  
 親しい姉妹を待つてゐる

蓮の花はくすく笑ひさゝめいて

きつと戀人のうたをうたふだらう

ふしぎにたのしかつたあの時に  
 きみが與へてくれた  
 きみの口のキッスと同じく  
 歌はきつとふるへわななくだらう

## 八

高みの星たちは  
 じつと動かずに  
 數千年間ゐて

こひの苦しみを抱きながら見かはしてゐる

彼等は豊富な美しい  
 言語をはなしてゐるのだが  
 言語學者のたれひとり  
 その言語を解し得るものはない

星たちの方を仰ぎ見てゐる  
 薔薇はこつそりさくやきあつてる  
 かぐはしい物語を耳から耳へ  
 たちの良い賢いかもしかは  
 跳ねてよこを通りすぎ耳をすましてゐる  
 そして聖なる流れの波は  
 遠くでざわ／＼鳴つてゐる

そこで椰子の木の下の  
 僕らは腰をおろすのだ  
 そして愛といこひとともに飲み  
 幸あるゆめを夢みるのだ

## 一〇

蓮の花はおそれてゐる  
 太陽の明るさを

そして頭を垂れて  
ゆめみながら夜を待つてゐる

その戀人の月が  
光で目をさまさせると  
蓮の花はしたしげに  
やさしい花のかんばせを見せる

彼女は花ひらき眞赤になり、かゞやいて  
じつと高空を見つめる  
香り泣きふるへる  
こひと戀のくるしさに

## 一一

美しい流れライン川の  
波に影をうつしてゐるのは  
大きな伽藍のある

聖なる大都ケルンのまち

その大伽藍には黄金の皮に  
畫かれた像がある  
僕の生活の寂寞にも

この畫像はやさしく照らしこんでくれた

花や天使たちが  
聖母のまほりを飛んでゐる  
その眼その口その頬は  
僕の戀人に生きうつしだ

## 一二

おまへは僕を愛しない、僕を愛しない  
けれども僕はあまり困らない  
おまへの顔さへ見てゐれば  
僕は王様のやうにたのしい

奸計だとおぼせ立てたため、二人の子供とともに海蛇に殺め  
殺された。

## 一四

お、誓はないでキッスだけしろ  
女のちかひは信じない  
おまへのことばは甘いをそれよりも  
おまへにもらふキッスはなほ甘い  
キッスしてもらへばかう思ふ  
ことばにはひにすぎないと

★ ★

お、誓つてくれ、戀人よ、たえまなく  
口さきだけのことばを信じてやる  
おまへの胸に身をよせて  
自分ほしあはせだと信じてやる  
戀人よ、信じてやる、永久に  
いやそれよりなほ永く愛してくれると

おまへは僕をきらつてる、そのうへ僕をきらつてる  
さうおまへの紅い口がいつてゐる  
けれどもキッスにさし出してくれれば  
僕はそれで満足だ、ねえ、戀人よ

## 一三

僕を愛して抱いてくれ  
愛する美しいひとよ  
僕を兩手兩足で抱いてくれ  
しなやかなからだを抱いてくれ

★ ★

蛇のなかで一番うつくしいやつが  
むかししつかりとつかまへて  
まさつき抱きしめたことがある  
一番しあはせなラオコーン\*

\* トロイの海神の祭司。トロイ戦争のとき、ギリシヤ人の木馬を

## 一五

わが戀人の眼に寄せて  
 一等うつくしいカソツォーネ<sup>(一)</sup>を作る  
 わが戀人の小さい口に寄せて  
 一等すぐれたテルツィネ<sup>(二)</sup>を作る  
 わが戀人の頬に寄せて  
 一等立派なスタンザ<sup>(三)</sup>を作る  
 そしてもし戀人が心臓をもつてたら  
 あえかのソネット<sup>(四)</sup>作つたらうに

世間はばかだ、どめくらだ  
 日に日に馬鹿になりまざる  
 美しい子よ、おまへのことをいつてみる  
 おまへの氣立てがよくないよ

世間はばかだ、どめくらだ  
 いつもおまへを誤解してる  
 おまへのキッスがどんなに甘いか  
 どんなにたのしく熱いかを知らないのだ

## 一七

戀人よ、けふは僕にいつてくれ  
 おまへがむし暑い夏の日  
 詩人の頭から生れでる  
 あの幻ぢやないのかい  
 いや、さうぢやない、こんな日や

## 一六

- (一) 抒情的なみじかい歌。  
 (二) 三行を一節とする詩。  
 (三) 八行の尾韻のある詩。  
 (四) 十一韻音の十四行詩。

こんな眼の魔法の光や  
 こんなかあいきれいな子は  
 これは詩人の作ではない

うはばみや吸血鬼や  
 毛虫や怪物や

こんないやな荒唐無稽のものども  
 これが詩人の火の作るもの

だがおまへとおまへのずるさと  
 おまへのきれいな顔かたち  
 にせの無邪氣なめつきとは  
 これは詩人の作ではない

## 一八

波の泡から生れ出たもの<sup>(一)</sup>のやうに  
 戀人は美しさにかぐやいてる

あのひとは知らぬやつ  
 えらびにえらんだ花嫁なのだから

僕の心臓よ、辛抱づよいやつよ  
 裏切られにも怒るなよ  
 辛抱しろ、辛抱しろ、ゆるしてやれ  
 美しいお馬鹿さんのしたことは

- (一) 以下の三篇は一八二一年の従妹の結婚の直後に作られた。  
 (二) ヴァイナス。

## 一九

僕は怒らない、たとへ胸がはりさけようとも  
 永久に失つた戀人よ、僕は怒らない  
 たとへダイヤモンドのやうに光らうとも  
 おまへの胸の中の闇には光がささない

それは早くから知つてゐる夢におまへを見たんだもの

それからおまへの胸の中の闇を見た  
それからおまへの胸を噛む蛇を見た  
僕は見た、戀人よ、おまへがどんなにみじめかを

## 110

さうだよ、おまへはみじめだよ、だから僕は怒らない  
戀人よ、僕はどちらにもみじめであらう  
苦しい胸を死神が引裂くときまでは  
戀人よ、僕はどちらにもみじめであらう

おまへの口のまはりにうかぶ嘲りを僕は見た

おまへの眼が傲慢に光るのも僕は見た

おまへの胸をふくらます驕慢も僕は見た――

しかもおまへはみじめだ、僕と同じくみじめだ

おまへの口のまはりには悲痛が目に見えず痙攣し  
かくし涙がおまへの眼の光を曇らせ

傲慢な胸は秘密のいたでをかくしてる  
戀人よ、僕はどちらにもみじめであらう

## 111

なかの方で吹かれ鳴らされるのは  
あれは笛とヴァイオリンだ  
あそこでは僕の最愛のひとが  
婚禮の輪舞ををどつてる

あれは太鼓と箏の

鳴る音ひびく音だ

それにまじつて天使たちは

すゝり泣きうめいてる

## 113

では僕がおまへの胸をどんなに永く所有してゐたこと

をおまへはすっかり忘れてしまつたんだね  
美しくうそつきで小さいおまへの胸  
それより甘くうそつきのものはあり得ない

僕の胸をしめつけた

愛や悲しみをおまへは忘れてしまつたんだね

僕は知らない、愛は悲しみより大きかつたかどうか

僕はたゞ知つてゐる、それがふたつとも大きかつたこと  
を

## 113

僕の胸がどんなに深い傷を負つたか  
小さい花が知つてくれたら

僕の苦痛をなほすため

僕といつしよに泣いてくれよう

僕がどんなにかなしく病んでゐるか

夜鶯ナイトインが知つてくれたら

氣を引立てる歌を

たのしげにひびきわたらせてくれよう

それから僕の悲しみを

金の星たちも知つてくれたら

高みからやつて来て

なくさめごとを言つてくれよう

これらはみな知ることができないで

たゞひとりのひとだけが僕の苦痛を知つてゐる

そのひと自身が引裂いたのだ

僕の胸をば引裂いたのだ

## 114

一體なぜ薔薇の花はそんなに青い

お、戀人よ、いつてくれ、なぜなのだ

一體なぜ青草のなかで  
青い童が無言であるのだ

## 二五

一體なぜ悲しいことをはりあげて  
ひばりは空で歌ふのだ  
一體なぜバルサムの花のあひだから  
死骸のにはひがするのだらう

彼等はおまへにいろいろなことを話した  
いろいろなことを訴へた  
けれど僕の魂を苦しめてみた  
そのことだけはいはなかつた

一體なぜあんなにつめたく不機嫌に  
太陽は牧場をてらすのだ  
一體なぜ地上は墓場のやうに  
陰鬱で荒涼としてゐるのだ

彼等は大聲ぎし  
なげくやうに頭をふつた  
彼等は僕を悪魔といひ  
おまへはすつかり信じてしまつた

なぜ僕自身から病氣でかなしいのだ  
いとしいひとよ、いつてくれ  
おゝ心底から好きになひとよ、いつてくれ  
なぜおまへは僕を見棄てたのだ

けれども一等いやなこと  
それを彼等は知らなかつた  
一等いやなこととばかなことと  
それを僕はないしよで胸に秘めてみた

## 二六

菩提樹が咲き夜鶯がうたひ  
日はやさしく好いてほゝゑんでみた  
そのときおまへは僕にキッスをし、おまへの腕は僕を  
抱いた  
おまへのふくれた胸に僕を抱きよせた

僕らはよく「夫婦ごっこ」して遊んだ

だけどつかみ合ひやたゞきあひはしなかつた  
僕らはいつしよになつて歡聲をあげ笑談をいつた  
そしてやさしくキッスしあひ抱擁した  
最後に子供つぽい楽しみに  
森や野原で「かくれんぼ」した  
あまりにうまくかくれることが出来たので  
二度とふたゞび會はなかつた

## 二八

木の葉は落ち鳥はうつろに啼き  
日はものうい目附で挨拶した  
そのとき僕たちはよそ／＼しく挨拶した「さよなら」と  
そのときおまへは丁寧な一等丁寧なおじぎをした

僕は坊主のいふ

天國を信じない  
僕はたゞおまへの眼を信じる  
それが僕の天國の灯だ

## 二七

僕らはお互ひにいろいろなことを感じあつた  
だけど全くの仲良しだつた

僕は坊主のいふ  
主なる神を信じない

僕はたゞおまへの心を信じる  
ほかの神を僕はもたないのだ

僕は悪魔や地獄や

地獄の責苦せきくを信じない

僕はたゞおまへの眼と

おまへのよくない心とだけを信じる

二九

おまへは一番永く僕に操を立てつづけ

ぼくのことをとりなしてくれた

ぼくの愚問をしてくれた

ぼくが困つた時や心配の時に

おまへはぼくに飲物とたべものをくれた

ぼくに金を貸してくれた

洗濯物の世話をしてくれた

旅行には免狀の世話をしてくれた

わが戀人よ、神様がいつまでも

暑さや寒さからまもりたまふやう

ぼくに施してくれた善行には

決して報いたまはぬやう

三〇

地は永いあひだだけだつた

そこへ春がやつて来てきればなれがよくなつた

みんなが笑ひ歡びのこゑをあげ歡喜する

だけど僕は笑ふことができない

花が開き鐘が鳴り

鳥はお伽噺そのまゝにものをいふ

しかし僕はその話がおもしろくない

なにもかもがみじめに見えるのだ

人間といふものが僕には退屈だ

もとはかなりの友達さへもだ――

そのわけは僕のかあいいいとしいひとを

ひとが夫人と呼ぶからだ

三一

僕が永いこと永いことぐづつて

他國をうろつきまはりゆめを見てゐたので

僕の戀人は待ちきれなくなり

自分で婚禮の服を縫つて

やさしい腕で花婿として

馬鹿な若造の中でも一等ばかなのを抱いた

僕の戀人はひどくきれいでやさしいので

いまも僕の眼前にそのきれいな姿がうかぶ

年ちゆう花咲き花ひらく

葦のひとみ薔薇の頬

こんな戀人から手が引けたとは

僕の愚行の中でも一等の愚行だつた

三二

ひとみの青い葦

頬の紅い薔薇

小さい手の白い百合

それらは今も咲きつゞけてゐるが

心臓だけは枯れてしまつた

三三

世界は美しく天は青く

風はやさしくしづかに吹き

花は満開の牧場で目くぼせし

朝露にかゞやき光り

みわたすかぎり人々は歡呼してゐる――

だけど僕は墓にねて  
死んだ戀人によりそひたい

## 三四

いとしい戀人よ、もしもおまへが墓へ  
暗い墓へとゆく日があれば  
僕はおまへのところへ下りてゆき  
おまへにしがみつかうと思ふ

## 三五

僕はおまへの腕に抱かれる  
審判の日になれば死人は起き上り  
苦痛や満足の叫びをあげる  
僕たちふたりは何も氣にかけず  
しづかにねたまゝであより

キッスし抱擁しあら／＼しくしめつけよう

しづかな冷たい蒼ざめたおまへを

僕はうれし泣きし、ふるへ、やさしく涙をおとし

僕自身も死骸になつてしまはう

まよなかになれば死人は起き上り

たのしい宴會をして踊りだす

僕たちは墓穴にのこり

松の木は椰子の樹のゆめを見る  
はるか東方の國で  
焼けつく絶壁に  
さびしくだまつて悲しんでゐる椰子の樹を

## 三六

美しい明るい金の星よ

遠くの戀人に挨拶してくれ

僕がまだやつぱり心傷つき

青くて心がかはらぬといつてくれ

クッションでもあつたなら  
そしてあのひともつとひどく刺してくれたなら  
僕は刺し傷を喜ぶのに

(唄がいふ)

あゝあのひとの捲髪まきげにつかふ

カール紙の一片でもあつたなら

僕はこつそりとその耳に、僕の體の中に生きてゐる

息づいてゐることをこつそりさゝやくのに

## 三七

(頭がいふ)

あゝ、戀人の足をのせる

足臺でもあつたなら

そしてあのひともつとひどく踏みつけてくれたなら

僕は泣言をいはないのに

## 三八

こひしいひとが去つてから

笑ひをまつたく忘れてしまつた

たくさんんやつが駄洒落をいふが

僕は笑ふことができないのだ

あの子を失つてからは

あゝあのひとのピンを挿す

(心臓がいふ)

泣くことも僕は止めた  
かなしみに胸ははりさけさうだが  
僕は泣くことができないのだ

## 三九

大きな悲しみから  
僕は小さい唄を作る  
唄は鳴りひびく羽をあげて  
彼女のところへ飛んでゆく

戀人のところへゆく道を見つけたが  
また歸つて来て嘆くのだ  
嘆きながらもいはうとしない  
心の中で見て来たことは

## 四〇

森や野をうろついてゐる  
歡聲をあげて小山羊のやうにはなれてゐる  
美しい自然に挨拶してゐる

やつらは目を細めて眺めてる  
何もかもがいかにロマンチックに咲いてるか  
やつらは耳を長くして  
雀の唄にききほれてゐる

僕はしかし部屋の窓に  
黒いカーテンをおろす  
さうすれば晝でも僕を  
幽霊が訪ねて来てくれる

むかしの戀人が現はれる  
死人の國からやつて来たのだ  
僕の上に坐つて泣き  
僕の心をやほらげてくれる

僕は忘れることが出来ない  
愛するうつくしい女を

僕はむかしおまへを自分のものにしてた  
心とからだを自分のものにしてたのだ

からだはまだほしい

ひどくしなやかで若いからだは

心はいらない埋めてい

心は僕自身ので澤山だ

僕の心を切つて

その半分をおまへの體に吹きこみたい  
そしておまへを抱きたい、僕たちは  
一心同體でなげりやならないからね

## 四一

嗜着をつけた俗人どもが

## 四二

忘れたむかしのいろ／＼のすがたが  
墓から出て来てさししめす  
おまへの近くで僕がむかし  
どういふふうにくらしてゐたかを

ひるま僕はゆめみながら  
路といふ路をよろめき歩いた  
ひとびとは怪しんで僕をながめた  
僕がひどくかなしげで黙つてゐたので

夜にはもすこしましになつた  
街には人通りがなかつたからだ  
僕と僕の影とふたりきりで  
だまりこくつて方々うろついた



足音をこだまさせて  
 僕は橋の上をうろついた  
 月は雲間から出て  
 勿體ぶつた眼つきで挨拶した

おまへの家のまへにじつと立つて  
 僕は上の方を仰ぎみた  
 おまへの窓をじつと見た—  
 たいへん心がかなしかつた

僕は知つてゐる、おまへが窓から  
 なんども下を見おろして  
 月の光に僕が立像のやうに  
 つつ立つてるのを見たことを

## 四三

ある青年がある少女に戀したところ

その少女は他の青年をえらんだのだ  
 その青年はまたほかの少女を愛し  
 その少女と結婚したのだつた

少女は怒りにまかせて  
 みちで出くはした  
 ゆきあたりばつたりの男と結婚した  
 そこで青年は體がわるくなつた

これはむかしのお話だが  
 いつまでも新しいお話だ  
 まさしくこんな目にあつたものは  
 心臓がふたつに裂けてしまふ

## 四四

友情と戀と賢者の石\*

この三つをほめるのを僕は聞き

僕もほめて探したが  
 かなしや一つも見つからなかつた

\* 中世期に銅などを黄金にかへることが出来る力をもつと信じられた。

## 四六

花といふ花はみな  
 かゞやく太陽を見上げてゐる  
 河といふ河はみな  
 かゞやく海に流れてゐる

戀人がむかし歌つた  
 うたがひびいて來るのを聞くと  
 はげしい苦痛にせめられて  
 僕は胸がはり裂けさうだ

歌といふ歌はみな  
 僕のかゞやく戀人のところへ飛んでゆく—  
 かなしい歌よもつてゆけ  
 僕のなみだと吐息をも

## 四七

暗いこがれに追ひ立てられ  
 僕は森山へのぼつてゆく  
 僕の大きすぎるかなしみは  
 そこではとけてなみだとなる

濡れた蒼い頬をした  
 王女のゆめを僕は見た  
 僕たちは緑の菩提樹の下にすわり

いとしく抱擁しあつてゐた

「僕はおまへの父の玉座を望まない  
黄金の笏をものぞまない  
ダイヤモンドの王冠をものぞまない  
戀人よ、おまへがほしいのだ」

「それはだめです」と彼女がいつた  
「わたしは墓の中にあつて  
夜だけあなたのところへ來ます  
こんなにあなたが好きですもの」

## 四八

戀人よ、僕たちはよりそつて  
輕快な小舟に乗つてみた  
夜はしづかで僕たちは  
はるかな水路に浮んでた

美しい幽霊の島が  
仔のくんと月影に横たはつてた  
好きな歌がそこでひびき  
霧の踊りが波うつてた

その歌はますます／＼好くなつて  
踊りはあちこちへと波動した  
僕らはしかしこゝを過ぎて  
暗澹とひろい海に出た

## 四九

古い物語から白い手で  
さしまねくものがある  
魔法の國のことを  
うたつたり奏したりしてゐる

そこでは大きな花が

金色の夕映えの中で思ひにやつれてをり  
花嫁のやうな顔をして  
やさしく見つめあつてゐる

そこではすべての木がものを言ひ  
コーラスのやうに歌ひ  
鳴りひびく泉はダンスの  
音楽のやうに囁き出でゐる

おまへの聞いたことのない調子で  
こひのしらべがかなでられ  
とう／＼ふしぎに甘いあこがれが  
おまへをふしぎに甘く惑はせる

あゝそこへ行けたらなあ  
そこで心がたのしくて  
すべての苦しみがなくなつて  
自由でしあはせになれたらなあ

あゝその歡樂の國

そこをたび／＼ゆめに見る  
けれど朝日がさしてくと  
空しく泡になつてとけてしまふ

## 五〇

僕はおまへを愛して來ていまでも愛してゐる  
たとへ世界が滅亡しても

僕の戀のほのほが  
その破片から立ちのぼることだらう

## 五一

ひかりかゞやく夏の朝  
僕は花園をまはつてゆく  
すると花はさゝやきものがたる  
しかし僕は無言で歩いてゆく

花はさゝやきものがたり  
 僕を同情してながめてくれる  
 「わたしたちの姉妹を恨まないでね  
 かなしさうな蒼いかほした方」

## 五二

僕のこひはくらいけれど  
 美しくかゞやいてゐる  
 夏の夜にはなしてもらつた  
 かなしい陰氣な物語のやう

「魔法の園をだまりこんで  
 戀人二人だけがさまよつてる  
 夜ナイト鶯はうたりたひ  
 月かげはキラ／＼かゞやいてる

をとめは彫像のやうにしづかに立つてゐて

騎士はそのまへに跪いてる  
 そのとき荒野の巨人が来て  
 こはがつたをとめは逃げる

騎士が血まみれになつて地にたふれると  
 巨人はつまづきながら家へ歸る——  
 僕が埋葬されたら  
 この物語は終りとなる

## 五三

彼等は僕を苦しめ  
 顔が蒼くなるほど怒らせた  
 愛でさうしたやつもあり  
 憎しみでさうしたやつもある

彼等は僕のパンに毒を入れ  
 彼等は僕の盃に毒をついだ

心臓には夏が来るだらう

## 五五

ふたりが別れるときには  
 たがひに手と手をとりははし  
 なみだを流しはじめ  
 とめどなくといきをつくものだ

僕は泣きもしなかつた  
 かなしい、あゝなど吐息つかなかつた  
 涙と吐息とは  
 別れたあとからやつて来た

## 五六

彼等は茶卓について茶をのみ  
 戀愛についていろ／＼と語つた

おまへのほつべたには  
 暑い夏の日がある  
 おまへの小さい心臓には  
 寒い冬が入つてゐる

## 五四

けれど僕を一等ひどく  
 苦しめ怒らせ悲しませたひと  
 そのひとは僕を憎まなかつた  
 そしてまた愛しもしなかつた

おまへ好きなすきなやつよ  
 おまへのところでは入れかはるだらう  
 ほつべたには冬がやつて来て

審美的な紳士がたと

やさしい感情をもつていらつしやつた御婦人がたと

「戀愛はプラトニックでなければならん」と

やせつぼちの宮中顧問官が仰せになつた

顧問官夫人は皮肉に笑まれたが

それでも「あゝ」と嘆息なすつた

御門跡は口を大きく開かれて

「戀愛は粗野であつてはならん

とかく健康を損するものだ」といはれた

令嬢はつぶやかれた「なぜでせう」

伯爵夫人は憂鬱にいはれる

「戀愛はパッションです」と

それからしとやかに男爵閣下に

コーヒー茶碗をさし出された

テーブルにはまだ席が一つのこつてゐる

戀人よ、そこちやおまへが缺けてゐた

戀人よ、とても愛嬌よく

おまへの戀愛の話をすりやよかつたのに

### 五七

僕の唄には毒がまぜられた――

どうしてかへることができよう

僕の全盛の生活へ

おまへが毒をつぎこんだのだ

僕の唄には毒がまぜられた――

どうしてかへることができよう

僕は胸にたくさん毒蛇と

戀人よ、おまへとを入れてるのだもの

### 五八

またもむかしの夢を見た――

五月のある夜のことだつた

僕らは菩提樹の蔭にすわつて

永久にかはらぬことを誓つた

誓つてはまたあらためて誓つた

しのびわらひ、愛撫、キッス――

僕が誓を忘れないやうに

おまへは僕の手を噛んだ

おゝ澄んだ眼をした戀人よ

おゝ美しく噛みつくくせのあつた戀人よ

誓ひはちやんとしてゐたし

かみつくのはふんだんにして下すつたね

### 五九

僕は峰の頂に立つと

センチメンタルになる

「僕が小鳥だつたらなあ」

何千度も僕はといきをついた

燕だつたら、戀人よ

すぐにおまへのところへ飛んでゆき

おまへの窓ぎほに

巢を造らうものを

鶯だつたら、戀人よ

すぐにおまへのところへ飛んでゆき

青い菩提樹の枝から

よる僕の歌をうたつてあげようものを

もしも 罌<sup>オピウム</sup>だつたら  
 すぐにおまへの胸にとびこまうもの  
 おまへは馬鹿<sup>バカ</sup>にならやさしくして  
 その悲しみをなほしてくれるもの

## 六〇

僕の車はのろ／＼動き  
 風の吹く緑の森をすぎ  
 日光に照らされて魔法のやうに  
 花盛りの谷をすぎてゆく

僕は坐し冥想し夢み  
 戀人のことを考へてゐる  
 すると三人の影法師が  
 頭をさげて馬車に挨拶する

やつらは跳ねてとても嘲けるやうに

だがとてもこはさうにしかめつづらす  
 それから霧のやうにぐる／＼廻り  
 くす／＼笑つて行つてしまふ

## 六一

僕はゆめで泣かされた  
 おまへが墓にゐるゆめを見たのだ  
 目がさめたが涙は  
 まだ頬を流れおちてゐた

僕はゆめで泣かされた  
 おまへが僕を捨てたゆめを見たのだ  
 目がさめたがずつとあとまで  
 僕はつらくて泣いてゐた

僕はゆめで泣かされた  
 おまへが好意をもちつゞけてくれたゆめだつた

目がさめたがいまもなほ

瀧の涙が流れてゐる

## 六一

毎晩おまへをゆめに見る  
 おまへがやさしく挨拶してくれるゆめだ  
 僕はワア／＼泣きながら  
 おまへのかあいい足もとに身を伏せる

おまへはかなしげに僕をながめ  
 ブロンドの頭をふる  
 おまへの眼からはこつそりと  
 眞珠の涙の粒がおちる

こつそり低いこゑでこつそりかけ  
 絲杉の花束を僕にくれる  
 目をさますと花束はどこかへ行つて

おまへのことは忘れてしまつてゐる

## 六三

雨風の音、咆哮のこゑ  
 秋の夜で雨と風とだ  
 かあいさうなこほがつた子よ  
 いま一體どこにゐるのだ

その子が窓に倚つてゐるのが見える  
 さびしい小さな部屋で  
 目には涙がいつばいで  
 闇をじつとながめてゐる

## 六四

秋の風は木々をゆすり  
 夜はしめつぽくつめた

灰色の外套にくるまつて  
僕はさびしく森をゆく

馬を走らせても思ひの方が  
僕より先に行つてしまふ  
かるく、と僕を  
戀人の家へつれてゆく

犬が鳴く、召使が  
蠟燭の灯をもつて出て来る  
拍車をガチャつかせながら  
僕は螺旋階段をのぼる

明るい絨緞を敷いた部屋の中は  
いゝ匂ひがしてあたゝかい  
そこで僕をきれいなひとが待つてゐる——  
僕はその胸にとんでゆく

風が木の葉をざわめかし  
隣の木がものをいふ

「馬鹿な騎手よ  
ばかけたゆめを見てどうするのだ」

## 六五

輝く高空から  
星がひとつ落ちて来た  
戀の星で  
落ちるところを僕は見た

林檎の木から  
花と葉とがたくさん落ちる  
いたづらもののそよ風がやつて来て  
もてあそびものにしてゐるのだ

池では白鳥が歌をうたひ

浮いたり沈んだりしてゐるが  
こゑは低くなる一方で  
水の中に沈んでしまふ  
ひどくしづかだまつくらだ  
葉や花は吹き散らされ  
星はパチ／＼燃えてとびざり  
白鳥の歌は消えてしまつた

## 六六

ゆめの神は僕を巨人の城へつれて行つた  
そこでは不安な魔法の霞と蠟燭のうすらあかりと  
大へんな人ごみが迷宮のやうに  
ひどく手のこんだ部屋を通つて流れ出た  
もみ手をし心配して泣きながら  
あをざめた群衆は出口をさがしもとめる  
令嬢たちや騎士たちは人ごみからきは立つて見える

僕自身は人ごみの中へ身をうつした

ところが急に僕はひとりぼつちになり、いかにすばや  
群衆が身を消し得たかを見ておどろいてた  
そしてひとり歩きだし、急ぎあしで  
奇妙にこみいつた部屋部屋を通りぬけた  
足は鉛のやうになり胸の心配と苦しみとで  
僕は出口を見つけるのにはとんど絶望した  
そのころとう／＼最後の扉へ来た

外へ出ようとした——おゝ神よ、誰かそのまへに立つ  
てゐる

扉のまへに立つてるのは戀人だつた  
唇のまはりには苦痛、額には心配を  
僕には戻れと手でしらせた  
忠告してゐるのか怒つてゐるのかわからなかつた  
でも目からはこゝろよい煙がほとぼり出て

僕の心臓と脳髓とをすばやく通りぬけた  
彼女が僕をいかめしく氣むづかしく  
しかもかあいしく眺めたとき、僕は目がさめた

## 六七

ま夜中で寒くて物音がしなかつた  
なげきながら僕は森をさまよつた  
眠つてる木をゆりおこすと  
同情するやうに頭をふつた

## 六八

自ら命を斷つたものは  
四つ辻に葬られる  
そこには青い花が咲く  
死刑囚の花だ

四つ辻に僕は立ち吐息した  
夜で寒くて物音がしなかつた  
月の光にゆるやかに動いた  
死刑囚の花が

## 六九

戀人よ、おまへの眼の光が  
もはや照らしてくれなくなつて以來  
どこにゐても僕のまほりを  
陰鬱な濃いくらやみがとりかこんでる  
かあい戀の星の黄金の光は  
僕からは消え去り  
地獄が足もとに口をあけてる——  
原始の闇よ、僕を迎へてくれろ

## 七〇

わが眼には闇がかぶさり  
わが口には錆がふたした  
こはばつた額と心臓とをもつて  
僕は墓穴にねた

眠つてゐたのはどれくらゐの間だつたか  
僕はいふことが出来ないが  
目をさますと誰かが  
墓を叩くのが聞えた

「起きないの、ハイソリヒ

永遠の日がはじまつたのよ

死者はよみがへり

永遠の快樂がはじまつたのよ」

戀人よ、僕は起きられない  
まだ眼がめくらのまゝだもの  
涙のために僕の眼は  
まつたくなつてしまつたのだ

「キッスしてあげるわ、ハイソリヒ  
そしたら眼から闇がなくなるわ  
天使と天國の榮光を  
あなたは見なけりやならないわ」

戀人よ、僕は起きられない  
まだ出血しつゞけてゐるのだから  
おまへがひどいことばで  
心臓を刺したところから

「ほんとにしづかに、ハイソリヒ  
あなたの胸に手をあててあげるわ  
そしたら血はもう出なくなり

「いたみはすつかり癒るでせう」

戀人よ、僕は起きられない

僕の頭からも血が出るのだ

おまへが僕の手から奪ひ去られたとき

そこを射られたんだ

七一

頭と胸から血の川が

はげしい力で流れ出て

そして見よ——僕は目がさめた

古い怨みの歌や

不快でわるいゆめは

もう葬つてやらう

大きな棺をもつて來い

その中へ僕は多くのものをいれる

何であらうとかまはない

棺はもつと大きくなくちやならないよ

ハイデルベルヒ(二)の樽のやうに

それから棺臺をもつて來い

板のしつかりした厚いやつを

「わたしの捲髪で、ハイソリヒ  
頭の傷をつめてあげませう  
血の流を押しかへし  
頭を癒してあげませう」

やさしく可愛く願ふので

僕はさからふことができず

起き上つて

戀人のもとへ行かうとした

すると傷は破れた

これもマインツ(三)の橋のやうに

もつと長くなけりやならないぞ

それから十二人の巨人をつれて來い

ライン河岸のケルン(四)の御堂の

聖クリストフ(四)のやうに

いつそ強いやつぢやなけりやならないぞ

その巨人たちが棺をかついで行き

海へ沈めることになる

こんな大きな棺には

大きな墓がふさはしいから

なぜまた棺がそんなに大きく

重いかわけを知つてるか

僕は僕の戀と苦痛とを

そのなかへ入れたのだ

(一) ミッカル河畔の都會。大阜、古城蹟で名高い。

(二) ライン左岸、マイン川との合流點にある大都會。

(三) ハイネの生れ故郷テューセルドルフから遠くないライン左

岸の大都會。

(四) 傳説によればカソリックの十四人の救難者の一人、その名  
は十二使、非常な強力の持主だったといふ。



歸

鄉

一八三三年——一八三四年

一

僕の全く暗すぎる生涯にも  
かつてはかあいい姿が輝いた  
いまではかあいい姿は消え  
僕は全く暗につままれてしまつた

子供たちはくらがりになると  
氣持がわるくなつて来て  
心配を抑へつけるために  
大聲で歌をうたふ

iii 冊 終  
いまくらやみで  
ぼかげた子供の僕はうたふ  
歌はたのしくひじかないが  
心配からは救ひ出してくれたのだ

二

どういふわけだかわからない  
僕がこんなに悲しいのは  
遠いむかしの御伽噺が  
僕の頭からはなれないのだ

空気がつめたく、くらくなり  
ライン川はしづかに流れてゐる  
山の峰はまつ赤になつてゐる  
夕方の日光に

一等美しいをとめが坐つてゐる  
あすこの高みにふしぎなさまで  
その金の髪飾りはキラ／＼光り  
彼女は金の髪を梳いてゐる

彼女は金の櫛で梳いてゐる  
 そして唄をうたつてゐる  
 その唄はふしぎな  
 強いメロディーをもつてゐる

小さい舟につてゐる舟人を  
 唄はげしい悲しみでとらへる  
 彼は暗礁を見ないで  
 たゞ高みばかりを見あげてゐる

遂には舟人と小舟とを

多分、波がのみこんだことだらう

これはその唄で

ローレライがやつたことだ

\* 正しくはルールライ、ライン川中流にそびえる岩、高さ一三〇  
 米、これを妖女とみたてた傳説が一八〇〇年ブレンタノによつ  
 て紹介され、ハイネ以外のものからも筆にされた。

## 三

僕の心は、僕の心はたいそう悲しいが  
 五月はたのしげにかゞやいてる  
 古い稜堡の上で  
 僕は菩提樹に倚つて立つてゐる

下方を市の青い濠が  
 しづかに流れてゐる

ひとりの少年が小舟でゆき

釣をしながら口笛を吹いてゐる

むかふにはとても小さく

いろ／＼な形をして

別荘や庭園や人間や

果樹園や牧場や森が氣持よく見えてゐる

## 四

森をさまよつて僕は泣いた

つぐみがこずゑにゐて

飛びながらやさしいこゑでうたふ

「どうしてそんなにかなしいの」

「おまへの姉妹の燕なら

話してきかせられるのだ

僕の戀人の窓のあるところに

うまいこと巢を作つて住んでるもの」

## 五

夜はじめ／＼として嵐の氣配がする

空には星の數もすくない

森のざわめく木の下を

\* ハノーヴァー王國の兵隊の制服。

僕は無言で歩きまはる

さびしい狩人の家からは  
はるかにあかりがチラ／＼する  
そつちへ誘つちやいけないよ  
そこは不快な様子だから

盲の婆さんが革張りの  
肘掛椅子に坐つてる  
氣味わるく石像のやうにじつとして  
ひとことだつて言ひはしない

口汚くのゝしりながらあちこちへ  
山番の赤毛の息子が歩きまはり  
鐵砲を壁に投げつけて  
怒りと嘲りとのために笑ふ

糸を紡ぐ美しい子は泣いて

それからあのやさしく啼いた  
小さい犬のことをもきいた

それからまた結婚した戀人のことも  
ついでに僕はきいてみた  
そしたら親切に答へてくれた  
あのひとは産褥にゐるんだつて

そこで僕は親しく祝賀の辭をのべ  
愛嬌よくさゝやいた  
「どうぞ皆さま衷心からわたくしが  
よろしくいつたとお傳へ下さい」

妹はそのまに口をはさんだ  
「やさしくて小さかつた犬は  
大きくなつて氣がちがひ  
ライン川にはまつて死んだの上」

涙で亞麻を濡らして  
うなりながらその足に  
父親のあなぐまがまとひついでる

## 六

旅で僕ははからずも  
戀人の家族に出くはした  
妹、父、母  
僕に氣がつくと喜んでくれた

僕の健康状態をたづね  
自分たちからもすぐかういつた  
「ちつとも前と變つてない  
たゞ顔色がわるいね」と

僕は叔母たちやいとこたちのこと  
たくさんの面白くもないやつらのことをたづね

この子は戀人によく似てる  
とりわけ笑ふそのときは  
僕をこんなにみじめにした  
あの眼と同じ眼をもつてゐる

## 七

僕は漁師の家にゐて  
海を眺めてゐた  
夕方の霧がやつて来て  
高みへのぼつて行つた

燈臺ではあかりが  
だん／＼とつけられた  
とほくの遠くでは  
漁船がまだ一隻見えた

僕は話した、暴風と難船のことを

船乗りとその生活のことを

空と水との間にあつて

危懼と喜びとの中間に漂ふことを

僕は話した、遠くの海岸のことを

南方や北方のことを

珍らしい民族のことを

そこでの珍らしい風習のことを

ガンジス河の岸ではものがみなかをりを輝く

大きな木が花咲き

美しくもの静かな人々が

蓮の花のまへにぬかづく

ラップランドには汚い民族がある

頭が平たく口が大きく背がひくい

焚火のまはりに集まつて

魚を焼きキャツ／＼と叫んでゐる

むすめたちは熱心に耳かたむけ

おしまひにはみんな物を言はなくなつた

船はもう見えなくなつてゐて

あたりはすつかり暗くなつた

＊ スカンデナヴィヤ半島から白海にかけての北極圏内の地方、  
その住民はアジア系統のラップ人。

## 八

美しい漁師のむすめよ

舟を岸につけなさい

僕のところに来て坐りなさい

僕は手をとりあつてはなししよう

僕の胸に頭をつけなさい

こはがりすぎてはいけません

おまへは毎日あらい海をも

こはがらないで信用してゐるぢやないの

僕の胸は海とそつくりで

暴風も干潮も満潮もあるのです

そして美しい眞珠がたくさんに

底には沈んでゐるんだから

## 九

月がのぼつて来て

波をくまなく照らしてゐる

僕は戀人を抱いてゐて

ふたりの胸は波うつてる

岸邊では僕だけが

美しい子の腕の中に休んでゐる

「風のそよぎで何を聞く

おまへの白い手はなせビク／＼する」

「あれは風のそよぎぢやなくつてよ

あれは人魚の歌なのよ

人魚はむかし海に吞まれちやつた

わたしの姉妹なのですよ」

## 一〇

雲のうへに月が休んでゐる

大きな（おぼろ）雲が休んでゐる

あまわく灰色の海を

金の光りで照らしてゐる

白い波のくだける岸べを

僕はさびしくさまよつてゐる

たくさんの甘いことはがきこえる

水のなかではなす甘いことはが

あゝ、夜はまつたく長すぎる



痛いくらゐるに感じさせた——

「おまへは僕をしめすぎる

お、美しい水の妖精よ」

「わたしはあなたを胸に抱きしめ

力いっぱい抱きしめる

あなたの體であたゝまりたい

夜は冷たすぎるもの」

月はいよ／＼蒼くなり

くらい雲の間からのぞいてる——

「おまへの眼は悲しくなり濡れて来るね

美しい水の妖精よ」

「悲しくなつたり濡れて来たりしませんよ

わたしの眼ははじめから濡れて悲しいのよ

水の中から出て来たもの

滴が眼の中に残つてるの」

僕をさぐるやうに見る

「あなたはどなた、何がほしいの

見知らぬ病氣のお方」

「僕はドイツの詩人で

ドイツでは人に知られてみます

もしも一等偉い人の名をあげるなら

僕の名もそのなかに入るでせう

僕の欲しいものは、好きなしとよ

ドイツではたくさんの方がしがつてるもので

もし一等いやな苦しさを挙げるなら

僕の苦しさもそのなかに入るでせう」

一六

海はずつととほくまで

夕日の最後の輝きで照り映えてゐた

鳴はかなしげに金切聲あげ

海はとゞろき荒れくるふ——

「おまへの心臓はひどく動悸をうつね

美しい水の妖精よ」

「わたしの心臓はひどく動悸するの

感動してひどく動悸するの

口にいへないくらゐ愛してるからよ

かあいい人間さん」

一五

おまへの家の前を

僕が朝とほつてゆくとき

かあいいひとよ、もしもおまへが

窓ぎには見えたら僕は喜ぶ

おまへは濃い茶色の眼で

僕らはさびしい漁師の家に坐り

無言でふたりきりで坐つてゐた

霧はのほり潮はみち

鳴はあちこち飛びかはしてた

おまへのかあいい眼からは

涙がおちた

おまへのてのひらに涙がおちるのを見て

僕はひざまづいた

僕はおまへのてのひらから

涙を飲みとつた

そのとき以來、僕の體はやせて来て

魂はこがれのため死んでしまつた——

不幸な女が涙の中に

毒を入れて僕に飲ましたのだ

## 一七

あすこの山の上には  
美しい城があつて

三人の美しい姫が住んでゐる

僕はそのひとたちと戀愛を樂しんだ

土曜にはイユッテがキツスしてくれ

日曜にはユリアが

そして月曜にはクニグンデが

僕を窒息させるところだつた

けれど火曜にはお城で

僕の三人の姫のところへ宴會があつた

近くの紳士淑女がたが

車と馬とでやつて來た

僕はしかし招待されなかつた

姫たちがほんやりしてやつたことだ

内緒話の好きな親戚の御婦人がたが

これに氣づいて大笑ひした

## 一八

僕の愛する百合よ

小川のほとりでゆめみごこちで立つてゐて

かなしげにのぞきこみ

「つらや」、「かなしや」と小聲でいつてるね

「あまいことばはいりません

信用ならぬ男のかた、あたしはちゃんと知つてます

あたしのいとこの薔薇ちゃんが

あなたの信用ならぬ心を手に入れたのを」

## 一九

はるかた地平線に

幻のやうに塔のあるまちが

夕もやに包まれて

そのすがたを見せてゐる

しめつぽい風の流れば

うすぐらい水路にさざ波を立てる

かなしい音を立てて船人は

僕の船の櫂を漕いでゐる

太陽はも一度地平から

かゞやきながらのぼり

僕が戀人を失つた

あの場所を見せてくれるのだ

## 二〇

今日は、大きな

祕密の多い

かつてその膝に

わが戀人をいだいたまちよ

塔よ、門よ、いつてくれ

わが戀人はどこにある

おまへたちに僕はまかせておいた

おまへたちが僕の保證人であるはずだつた

塔には罪がない

彼等は動くことができなかつたから

トランクや箱をもつてこひびとは

市をとともすばやく去つたから



門はただ僕を戀人を  
 まつたく無言で逃れさせてやつた  
 門はいつでも柔順だ  
 女門番のこゝろしだいたいだ

\* 「門」のドイツ語 *Tür* には「恋人」の意味があり、女門番 *Türhüter* は「愚かな女」の意味がある。ハイネはこれをしやれに使つてゐる。

## 二二

そこで僕はむかしの路をまたさまようた  
 むかしなじみの小路をさまようた  
 人が住まずに荒れはてた  
 戀人の家のまへへやつて來た  
 通りも全くせますぎた  
 舗石ががまんできかねる  
 家並は頭におちかへりさうだ

僕はなるたけ早足で歩く

## 二二

あの子が誠をちかつたあの廣間へ  
 僕は入つて行つた  
 むかしあの子の涙が流れたところには  
 蛇が這ひ出してゐた

## 二三

夜はものしづかで小路は静止してゐる  
 この家には僕の戀人が住んでゐた  
 その子はどうのむかしにこのまちを立去つたが  
 家はいまだに同じ場所にある

そこにはまたひとり男が立つて空を見つめ  
 はげしい苦痛に手をにぎりしめてる

つれて行つたといふ歌を

美しいかあいい子よ

ほんとうだよ

僕は生きてゐるんだから

どんな死人よりも一層強いんだよ

## 二五

をとめは部屋で眠つてゐる  
 月はふるへながらのぞきこむ  
 戸外では歌をうたひ  
 ワルツのメロディーに似た音楽がする

「誰が下であたしの眠りの邪魔をするのでせう

ちよつと窓からのぞいて見ませう」

するとそこには骸骨が立つてゐて

ヴァイオリンをひき歌うたふ

おまへは古い歌を知つてるか  
 むかし狂つた少年が  
 眞夜中に戀人を墓の中へ

その顔を見たとき氣味わるかつた——  
 月が僕自身のすがたを見せたのだ

なんぢ二重出現者、蒼いやつよ

なせ僕がむかしこの場所だ

幾夜も幾夜もくるしんだ

こひのくるしさのまねをするんだ

## 二四

どうしておまへはすやく／＼眠れるのだ  
 どうして僕がまだ生きてることがわかるのだ  
 むかしの憤りがかへつて來て  
 僕は自分の桎梏をうちやぶつた

「まへにダンスしよう」と約束して  
その約束を破つてしまつたね  
今夜は墓地で舞踏會がある  
一緒においで、あすこで踊らうよ」

骸骨はをとめをしつかととらへ  
家から外へつれ出した  
をとめは先に立つて歌うたひ  
ヴァイオリンをひく骸骨についてゆく

骸骨はヴァイオリンをひき、をどり、跳ね  
足をガク／＼鳴らして  
月光の中に氣味わるく  
頭鉢カサをこつくり／＼させる

## 二六

朦朧としたゆめの中で立つて

耐へ得ぬものに耐へ體內では  
心臓が裂けさうになる

あゝ高慢な心臓よ、おまへがそれをのぞんだのだ  
あゝ高慢な心臓よおまへは幸福で、無限に幸福であるか  
でなけりや無限にみじめでありたいとのぞんだ  
だからいまおまへはみじめなのだ

※ギリシャ神話で巨人族ティタネスの子、ゼウスに挑戦して敗  
れ、罰に頭と兩手とで天を支へることを命じられた。

## 二八

年々は来てまたすぎゆき  
ひとびとは草に入るが  
僕が胸に抱いてゐる  
こひだけは決して死んでゆかない

あの子の肖像を見つめてゐると  
かあいい顔はこつそりと  
生きものになりはじめた

その唇のあたりには  
ふしぎなほゝゑみが浮ひ  
かなしいなみだのせみのやうに  
雙の眼はかゞやいた

僕の涙も兩頬から  
流れおち——  
そして、あゝ僕がおまへを失つたことが  
ほんとうだとは思へない

## 二七

あはれなアトラスである僕は  
世界、さうだ苦痛の全世界をになはねばならない

も一度だけおまへを見て  
おまへのまへに跪まづき  
死にゆきながらおまへにいひたい  
「東嶽、あなたを愛します」と

## 二九

僕はゆめを見た、月はかなしげに眺め  
尾はかなしげに光つてゐた  
ゆめは僕を戀人の住んでゐる  
數百哩はなれたまちへつれて行つた

彼女の家までつれて行つた  
僕は階段の石にキッスした  
たび／＼彼女の小さい足と  
着物の裾にふれたのだもの  
夜は長くつめたかつた

石はとてもつめたかつた  
窓からは月光に照らされて  
蒼ざめたひとかげがぞいてみた

## 三〇

このさびしい涙はどうしたがつてゐるのか  
僕の眼を曇らせるのだから  
わかしから僕の眼に  
滞在してゐるのだ

青い小さい星たちも  
霧のやうにとけ去つた

あゝ、僕の戀そのものも  
はかないかをりのやうにとけ去つた  
古いさびしい涙よ  
おまへももうとけ去れよ

## 三一

蒼い秋の夜の半月は  
雲間からのぞいてゐる  
墓地にはさびしく  
しづかな牧師の家が建つてゐる

母はバイブルをよんでをり  
息子はあかりを見つめてゐる  
姉嬢はねぼけてのびをする

妹嬢はいふ

「あゝあゝなんとこの家では  
退屈に日がすぎてゆくこと  
誰かが埋葬されるときだけよ  
あたしたちが何か見られるのは」

母親は讀むのをやめていふ  
「おまへは思ひちがひしてゐるよ、あすこの  
墓地の入口にお父さんが埋められなすつてから  
たつた四人しか死んでないよ」

姉嬢はあくびして

「わたしはあなたたちと一しよに飢死しないわ  
明日は伯爵のところへゆくわ  
あのひとはわたしを愛してゐてお金持よ」

息子は笑ひ出して

「三人の狩人が星の中で宴會して  
黄金をこさへるものだから、僕にも  
喜んでその秘術を教へてくれるよ」

母は息子のやせた顔に  
バイブルを投げつける  
「罰あたりめ、そんならおまへは  
追剥ぎにならうとするんだね」

彼等は窓を叩く音を聞き  
さし招く手を見る  
黒い牧師の服を着て  
死んだ父親が戸外に立つてるのだ

## 三二

ひどいお天気で  
雨ふり嵐がし雪が降つてゐる

僕は窓ぎはにすはつて  
やみを眺めてゐる

さびしい一つのあかりがチラ／＼見え  
のろ／＼と向ふへ動いてゆく  
カンテラをさげたおばあさんが  
あの通りをよろ／＼とゆくのだ

多分、小麦粉に卵に  
バターを買ひこんで来たのだらう  
お菓子をごさへて  
大きな娘に食べさせようといふんだらう

その子は家で脇かけ椅子にゐて  
ねむさうにあかりに見入つてる  
かあいい顔の上で  
ブロンズの捲髪が波うつてゐる

他人は僕がひどい戀の  
なやみのため悶えてると思つてゐる  
最後には僕みづからも  
他人と同じやうにさう信じた

大きな眼をした小さなひと  
おまへにいつもいつてたらう  
口にいへぬほどおまへを愛すると  
戀は僕の胸をくひやぶると

だけどそんなふうにいつたのは  
ひとりの部屋にゐたときだけで  
そしてあゝ、おまへのあるところでは  
いつも僕はだまりつゞけてた

悪い天使がそこにゐて

僕の口をおさへつけたのだ  
そしてあゝ、この悪い天使のおかげで  
僕はいまこんなにもじめなのだ

「では彼女は一度も君の戀してる様子について  
意見をいはなかつたのかい

君は彼女の眼に

戀の答へを一度もよみ得なかつたのかい

彼女の眼を見て君は一度も  
魂のなかまで入つてゆけなかつたのか  
友よ、君はかうしたことがらでは  
いつもはそれほど馬鹿ぢやないのにね」

二人はたがひに愛しあつてゐたが

どちらも相手にうちあけようとしなかつた  
たがひに憎げに眺めあつたが

那 僕を憫ませる、どういふ意味だらう  
歸 このかあいい青い謎は

おまへのま白い百合の指に  
も一度キッスできたなら  
それを心臓に押しつけて  
しづかに泣きながら死ねたなら

おまへの澄んだ重の眼は  
よるひる僕の眼のまへにちらつき

しかも戀のために死なうとした

とう／＼二人は別れ、相手をば

ときどき夢に見るばかりとなつた

二人はとつくに死んでしまつた

そのことは當人たちもほとんど知らなかつた

## 三七

僕がきみらに苦しみを訴へたとき

きみらはあくびして何も言はなかつた

ただどそれを僕がきどつて詩にしたとき

大したお世辭をいつてくれた

## 三八

僕が悪魔を呼んだので悪魔は來た

そしたら僕は驚嘆してながめた

彼は醜くもなく跛でもない

彼は愛すべく魅力のある男だ

男盛りの年配で

丁寧で禮儀正しく世慣れた男だ

如才のない外交官で

教會と國家とに關して實にうまく論じる

顔色は少々わるいがそれもふしぎではない

サンスタリットとヘーゲルとを目下勉強してゐるのだ

彼の愛する詩人はやはりフーケーだ(三)

しかし批評にはもう手出しをしないことにしてる

現在のところ批評は

祖母のヘカテにまかせてゐるのだ(三)

彼は僕の法學の研鑽をほめた

自分もまへにはこれを研究してゐたのだ

彼は僕が交際を

あまり親しくしないといつてうなづき

いままでも一度

スペイン大使邸で會ひはしなかつたかときいた

まだ何度も借金せずにはすまないからな

そこでよくその顔を見たら  
昔の知人の顔を思出した

## 四〇

(一) ドイツの哲學者、ハイネはベルリンの大學で教を受けた。

(二) ドイツの詩人、小説家、後期浪漫派に屬する。その代表作

「魔法のゆびわ」「ワンドイーネ」等は一八一一年から一三三

三年

ごろに出た。

(三) 夜、月、出生、死、呪術を掌るギリシヤの女神。こゝではこ

の名を冠した當時の雜誌のことをしやれていつてゐる。

## 三九

人よ、悪魔を嘲るなかれ

人生の軌道は實に短く

永劫の地獄の苛責は

單なる愚民の妄想ではないからな

人よ、おまへの借金を支拂へ

人生の軌道は實に長く

おまへがいままでたび／＼したやうに

「ベツレヘムの道はどれか  
坊やたちよ嬢ちゃんたちよ」

若きも老いも知らなかつた

王はさらにすゝんで行つた

かあいく清く照らす

金色の星に従つて

星はヨセフの家のうへにとどまつた

彼等はそこへ入つて行つた

牡牛は啼いた兒は啼いた

聖なる三人の王は歌うたつた

\* 新約聖書マタイ傳に見えるキリスト生誕を題材とした。

## 四一

わえおまへ、僕たちは子供だつた  
小さく愉快な二人の子供だつた  
僕らは雞小舎へもぐりこんで  
藁の下にかくれた

僕らは牡雞の啼きまねをした  
人がとほりすぎる――

「コケコッコ」みんなは牡雞の  
啼きごゑだと思つた

僕らの庭の箱に

壁紙をはり

その中へ二人で住み

立派な家にした

隣のうちの老猫が

よくお客に來た

僕らは彼女におじぎをし

お世辭も十分にいつた

僕らは彼女の健康を

心配けにしたしくうかゞつた

そのあとでたぐさんの

年より猫の健康のことを話した

僕らはまた坐つて年とつた人のやうに  
分別臭く話をした

わしらの時代は何もかも

いかにもつとよかつたかと嘆息した

なんと夢や誠實や信仰が

世界から亡くなつたことぢや

なんとコーヒーが高くなつたことぢや

なんとお金が儲からぬことぢや……

子供の遊びはすぎ去つた

何もかもが行つてしまつた――

金も世間もいゝ時も

信仰も愛も誠實も

\* 一八二三年に結婚した妹シャルロットの婚約がとゞかつた時と  
れた與へた作。

## 四二

胸がしめつけられるやうで

なつかしく僕はむかしを思ひ出してゐる

世間はそこははまだ佳みよかつた

のん氣にひとひとはくらしてた

だけと今は何もかもちがつたものやうだ

窮迫だ、困苦だ

天上では神様がなくなられ

下界では悪魔がくたばつた

すべてがひどく怨めしげに陰氣に見る

ひどく狼狽して腐つて冷やかに見る

これでもつとの愛情もなかつたら

どこにもつかみどころがないわけだが

## 四三

月がくらい雲のヴェールの間から

輝き出るやうに

僕の暗い時代からひとつの

明るいすがたが浮び出る

皆は甲板に坐つて

ほごりかにライン川を船で下つた

夏の緑の岸は

夕日の光をうけてかゞやいた

## 四四

ものおもひにふけりながら僕は美しく

かあい婦人の足もとに坐つてた

そのかあい蒼ざめた顔には

あかい日の光がちらついてゐた

夢に戀人を見た

悲しくうれはしげな女で

むかしはあんなにいゝ體だつたのに

しほみ衰へてゐた

琴は鳴り子供たちは歌うたつた

なんといふたのしざ!

天はますく蒼くなり

魂はひらけた

子供をひとり腕に抱き

もひとりの手を引いてゐた

明らかに貧困と不幸とが

足どりにまなざしに着物にあらはれてゐた

物語のやうに山々や

城や森や野原がすぎてゆき――

それらすべてが美しいひとの

瞳のなかにかゞやくのを見た

市場を彼女はよろ／＼歩いた

そこで僕に會つた

僕を見つめたのでしづかに

悲しげに僕はいつた

「僕の家へいつしよにいらつしやい

顔色がわるく病氣だもの

僕は一心に働いて

食物や飲物をこさへてあげよう

くりかへして歌つて何になるのだ

おまへは古い戀の卵の上に

孵さうとして永久に坐つてゐるつもりか

お、おまへの詩はいつも同じしくみだ

鼓からはひよこがはひ出して

ピイ／＼鳴いたりはゞたいたり

それをおまへは小さい本にとちこめる」

## 四六

僕はまたおまへの横にゐる

子供たちを育てて守りしてあげよう

だけどとりわけ可哀さうな

不幸な子供のおまへ自身を

僕がおまへを愛してたことは

決しておまへには話さない

そしておまへが死んだなら

僕はお墓のうへで泣いてやる」

せつかちになることだけは止して下さいね

たとへ古い悲しい調子が

最近の歌でも

いまだに明瞭にひゞいてゐても

しばらくお待ち下さい、僕の悲しみの

こだまはひゞき止むでせう

## 四五

「親しい友よ、古い歌をいつもいつも

新しい歌の春が  
癒えた胸から湧き出るでせう

## 四七

僕が悟性をもつて  
僕のすべての愚行をかたづけける時が来た  
僕は長いあひだ喜劇役者として  
おまへと喜劇を演じて来た

すてきな書割が描かれてあつた  
古浪曼派の様式で  
僕の騎士外套は金のやうにかざやいて  
いちばん高尚な感じがした

だけど今はすつかり用心して  
きちがひじみた愚行をかたづける  
だけどやはり僕はみじめだと思ふ

あひかはらず喜劇をやるんだから

あゝ神様、笑談に、無意識に  
わたしは感じたことをいひました  
私は自分の胸に死を抱いて  
死にゆく戦士を演じたのです

## 四八

ヴァイシュヴァーミトラ王は  
小止みもなしに驅り立てられる  
王は戦闘と苦行とによつて  
ワシシュタの牝牛を得たのだつた

おゝヴァイシュヴァーミトラ王よ  
おゝおまへは何たる牝牛なのだ  
そんなに何度も戦闘し苦行したつて  
しかもたつた一匹の牝牛のために

＊ カーニークブドシヤの王、ワシシュタ仙人の如意牛を獲ようと  
したが成功せず、苦行によつて要羅門の階級となり、七大人  
の一人に上せられた。

## 四九

心よ、わがこゝろよ、苦しむな  
汝の運命に耐へよ  
新しい春がかへしてくれる  
冬の汝から奪つたものを

汝に残つたものの何と多いことだ  
世界はやはり何と美しいことだ  
わがこゝろよ、汝の氣にいつたものは  
何でもかでも汝は愛してよいのだ

## 五〇

おまへは花のやうに

かあいく美しくきよい  
おまへを見るとかなしみが  
僕のこゝろに忍び入つた

神がおまへをこのやうに  
かあいく美しくきよいまゝで  
置きたまへと祈りながらおまへの頭に  
手をおかねばならないやうな氣持がする

## 五一

いゝ子よ、おまへの破滅になるから  
おまへのかあいい胸が  
僕のために戀にもえないやうに  
僕はみづから骨を折つたのだ

たゞ僕がたやすく成功したことだけは  
それでも僕をひどく悲しませ



140  
やつぱりたびたび考へる  
「やつぱり僕を戀してくれりやよかつた」

五二

ベッドにねて  
くらやみとふとんにつゝまれてみると  
かあいい氣持よく  
いとしい姿が眼のまへに浮ぶ

しづかな眼りが僕の眼を  
ふさぐかふさがなにかに  
その姿はこつそりと  
僕のゆめの中にしのび入る

けれども朝にゆめといつしよに  
姿は決して消え去らない  
それから僕は胸の中に

これをいれて一日ぢゆう持ちまはる

五三

紅い小さな口をしたをとめ子よ  
かあいい澄んだ眼のをとめ子よ  
僕の愛する小さなをとめ子よ  
僕はいつもおまへのおもつてる

けふは冬の夜がながいから  
僕はおまへのそばにゐたい  
おまへのよこに坐つて語りた  
勝手を知つた小さな部屋で

おまへの小さな白い手を  
僕の唇におしつきたい  
それから涙でうるほしたい  
おまへの小さな白い手を

五四

戸外では雪がつもらうとも  
霞が降らうとも、嵐にならうとも  
僕の窓をガタ／＼鳴らさうとも  
決して苦情をいはうとしない  
戀人の姿と春の樂しさを  
僕は胸に抱いてゐるんだから

五五

他人はマドonnaに祈り  
またはボーロやベテロに祈らうとも  
僕は、僕はただ祈る  
おまへに、美しい太陽に  
僕にキッスしてくれ、よろこびを與へてくれ

僕に親切であつてくれ、僕に情深くあつてくれ  
をとめの中の一等うつくしい太陽  
太陽の下の一等うつくしいをとめ

五六

僕の蒼い顔は  
戀のくるしさをおまへに示さぬのか  
そしておまへは傲慢な口が  
哀願のことばを打明けるのをぞんでゐるのか

あゝこの口は傲慢すぎる  
キッスと笑談としかできないのだ  
この口は多分くるしさのあまり  
僕が死にゆくときでも嘲弄のことばをいふだらう

五七

親しい友よ、きみは戀をしてる  
新しい苦痛がきみをなやませてゐる  
頭の中はますます暗くなるが  
きみの心はいよいよ明るくなる

親しい友よ、きみは戀をしてる  
そしてそれを告白しようとしないのだ  
僕はただきみのチョッキをと母して  
もえてゐる胸の熱を見てとつた

## 五八

僕はおまへのところにとどまりたかつた  
おまへのそばに休みたかつた  
おまへは僕と急いで別れねばならなかつた  
おまへは仕事がたくさんあつた

僕はいつた、「僕の魂は

まつたくあなたまかせです」と

おまへは大聲で笑つて  
膝をかきめておじぎした

おまへは僕の戀の不満を  
いよいよ強めて  
そのうへ僕に最後には  
別れのキッスをも拒んだのだ

たとへ事態がどんなに悪化しても  
僕が自殺するなんて思ひなざるな  
こんなことはすべて、いとしいひとよ  
すでに一度、僕にはあつたことだ

## 五九

おまへの眼はサファイア  
かはいく愛らしい

あゝその眼で愛をこめて會釋してもらふひとは  
三層倍しあはせだ

おまへのこゝろはダイヤモンドで  
たふとい光を發する  
あゝその心を愛しながら燃やしてもらふひとは  
三層倍しあはせだ

おまへの唇はルビー！  
これより美しいものは見られない  
あゝその唇で戀を打明けてもらふひとは  
三層倍しあはせだ

あゝそのしあはせなやつが知りたい  
あゝ僕がそいつをさへ見つけたら  
緑の森にそいつだけがあるところを――  
彼の幸運は即座に終るものを

## 六〇

愛のことはで自分自身を  
おまへの胸にしつかりと縛りつけ  
自分自身の糸にからまれて  
自分の笑談がまじめになつた

當然のことだがおまへが笑談いつて  
いま僕から離れることがあれば  
地獄の力が僕にせまつて来て  
まじめに僕は自分を射殺するよ

## 六一

世界と人生とはあまりに断片的だ――  
僕はドイツ人の教授のところに行かう  
彼は人生を構成する法を知つてゐて

悟性的體系をつくつてくれる  
彼のナイトキャップと寝巻のほろとをもつて  
彼は世界構造の間隙をふさぐ

## 六二

僕はながいことを頭を悩まして考へた  
日夜、深慮熟考して  
けれどもおまへの愛する価値あるまなこは  
僕に決心をなさしめた

いまや僕はおまへの眼の照らすところにとどまる  
そのころよき賢明なる光の中に——  
も一度こひするなどは  
決して考へなかつたのに

## 六三

たつた一語でいひつくしたい  
その一語をたのしげな風に話したい  
たのしげにもつて行くことだらう

風はおまへのもとへ持つてゆく、戀人よ  
苦痛にあふれた言葉を  
おまへはいつもいつもそれを聞く  
どこにゐてもおまへはそれを聞く

そして夜とろ／＼とまどろんで  
眼をとぢるが早い  
僕のことばは一等ふかい  
ゆめの中までおまへについてゆくだらう

## 六五

おまへはダイヤモンドや眞珠や  
人間のほしがるものすべてをもつてゐる

今夜は志客があつて

家ちゆうあかりが一杯ついでゐる

上の明るい窓には

人影が動いてゐる

おまへは僕を見ない、この下のくらがりに  
僕はひとり立つてゐる

ましておまへは僕のくらしい胸の中など  
のぞき見できるはずがない

僕の暗い胸はおまへを戀し  
おまへを戀してやぶれ裂け  
裂けてひきつつて出血する  
けどおまへは見はしない

## 六四

僕の苦痛のすべてを

また一等うつくしい眼をもつてゐる——

戀人よ、そのうへ何がほしいのだ

おまへの美しい眼のために

僕は不朽の歌を

おそろしくたくさん作つた——

戀人よ、そのうへ何がほしいのだ

おまへは美しい眼で

僕をひどくなやました

そして僕をほろぼした——

戀人よ、そのうへ何がしたいのだ

## 六六

はじめて戀をするものは  
たとへ失敗したとても神様だ  
だけど二度目の戀をして

失敗するやつは馬鹿だ

## 六八

さうした馬鹿のおれさまが  
 とも反應なしの戀をした  
 太陽や月や星が笑つた  
 僕もいつしよに笑つて——そして死ぬ

## 六七

おまへの心の生ぬるさと  
 だらけ加減とには適しない  
 岩をもとほしてその路を  
 僕の戀のあらさは貫くもの

## 六九

「お、お情けぶかいお嬢さま、どうかこの  
 ミューズの病める子にお許し下さい  
 僕の詩人の頭をあなたさまの  
 スワンのやうなお胸に休めてまどろむことを」  
 「あなた、よくもあつかましく  
 そんなことを入なかで仰しやいますわね」

おまへは戀愛では大通りが好きだつた  
 そして僕はおまへがその夫の  
 腕に倚つてゆくのを  
 おとなしいお腹の大きい奥様よ

僕に忠告と良き教訓とを與へて下さつた  
 僕に榮譽をふんだんに下さつた  
 待つてさへひればよいといつて下さつた  
 僕を鼻負にしようとなすつた

しかし彼等の御鼻負にもかゝはらず  
 僕は飢えてのたれ死にするところだつた  
 あるけなげな男が來なかつたら  
 彼は僕を感心に世話してくれた

けなげな男だ、彼は僕に飯を食はせてくれた  
 僕は決して決して忘れないよ  
 僕が彼に接吻できないのが残念だ  
 なせなら僕自身がそのけなげな男だから

## 七〇

この愛するに値する若者を  
 どんなに尊敬してもいい  
 彼はしばしば僕に牡蠣や  
 ライン葡萄酒やリキュールを寄つてくれる  
 上衣とスボンがよく似合つて粹なのだ

襟飾りはしかし一層いきだ  
 そして毎朝やつて來て  
 僕の健康をたづねる  
 僕の八方への名聲と  
 僕の貧困と機智とについて話す  
 熱心にこまめに  
 僕の用を足してくれ僕の役に立つてくれる  
 そして毎晩、會合で  
 感激したおももちで  
 御婦人がたのまへで  
 僕のすぐれた詩を朗讀する

お、なんと甚しく喜ぶべきことだ  
 かゝる若者のいまだに見つかることは  
 現代に於いては日一日と  
 だん／＼いゝものがなくなるのに

\* ハイネの友人ルードルフ・クリスティアニアニを説いてゐる。

## 七二

夢を見た、僕は神様になつてゐて  
上方の天にのみし

天使たちは僕のまはりにもながれ  
僕の詩をたへてゐる

僕は金貨何個のねだんだけ

饅頭を食ひコンフェクト(一)を食つた

それからカルディナル(二)も飲んだが

借金は少しもない

しかし退屈するには僕も甚だ困つて

下界へ歸りたいと思つた

僕が神様でなくて

悪魔だつたらと思つた

「長ずね天使ガブリエルよ  
行け、出發して  
わしの親友オイゲン(三)を  
天上へつれて歸れ

彼を講義の中では求めるな

トカイ葡萄酒(四)の杯のよこに求めよ

ヘドヴィヒ(五)教育で求めるな

マイエル(六)姐さんの許で求めよ」

そこで雙の羽をひろげ

天使は舞ひくんだり

彼を背負つて天上に連れて來る

愛する野人の友を

「やい若者、僕は神様で

下界を治めてゐるのだ

僕はいつもおまへに話してみたらう

いまに正しい地位に就くと

僕は毎日、奇蹟を行つてゐるが

おまへを狂喜せしめるにちがひないやつだ

けふはおまへの慰みに

ベルリンのまちを祝福してやらう」

「街上の鋪石は

いき裂けよ

その石ごとに新鮮にして

純粹な牡蠣が一つづつつけよ

レモン水の雨よ

そのうへに霧のやうに降れ

街の溝には最上の

ライオン葡萄酒が流れよ」

ベルリン人はなんと喜んでることだ

彼等は今もうガツ／＼食ひはじめ  
地方裁判所の判事連は  
溝を飲んでゐる

かゝる神の與へた美食に對し

詩人たちはなんと喜んでることだ

尉官たちや見習士官たちは

道路を舐めてゐる

尉官たちや見習士官たちは

一等かしのいやつらで

今日のやうな奇蹟は

毎日起るものぢやないと考へてる

(一) 砂糖菓子。

(二) 葡萄酒に砂糖と蜜柑とを入れたもの。

(三) ハイネのベルリン時代の友人、ポートランド人フレザ伯爵。

(四) ハンガリーのトカイ市産の葡萄酒。

(五) ベルリン唯一の舊教堂。

(六) ベルリンの喫茶店の名。

## 七二

きみたちと一等いゝ季節の七月に別れ  
ふたゝび一月にめぐり會つた  
あの時には情熱のさかりにゐたが  
いまはさまざま冷たくさへなつてゐる

馭者がもう馬をひいてやつて来た

それが人生だ、をとめよ、永遠の嘆き  
永遠の袂別、永遠の別離なのだ  
一體おまへの胸は僕の胸を掴めなかつたのか  
おまへの眼さへも僕をとめられなかつたのか

## 七四

まもなく僕はも一度別れるがいつかまた歸つて来る  
そのとき、きみたちは温くもなく冷たくもない  
僕はきみたちの墓の上を歩くだらう  
自らの心臓もみじめで老いてゐるだらう

ひとよさ暗い郵便馬車で

ふたりだけで行つた

胸をもたせあつて休み

笑談いひ笑つた

## 七三

美しい唇からひきはなされ  
二人をしつかと抱擁した美しい腕からはなされた  
もう一日だけとゞまりたかつたが

しかし明るくなつたとき

をとめ子よ、ふたりは何と驚いたことだらう

ふたりのまん中にアモールモルが坐つてゐたんだから

あの盲の旅人が

\*ギリシヤ神話の愛の神エロス、またキネービッドとも呼ばれる。

## 七五

あのきちがひじみたをとめ子が  
どこに宿をとつたか誰も知らない  
のゝしりながら雨の中を  
まちぢゆう僕はかけまはる  
一つの宿から他の宿へと  
僕は駆けていつたが  
無禮な給仕たちにはみんな  
かけあつても無駄だつた

## 七六

ぼんやりした夢のやうに  
家々は長い列をなして立つてゐる  
外套にふかくくるまつて  
黙つて僕は歩いてゆく  
大寺の塔は  
十二の時を告げる  
魅力とキッスとで  
戀人はいま僕を待つてゐる

月は僕の道づれで

親切にゆくてを照らしてくれる

おまへの家へもう着いた

喜んで上へ叫びかける

そのとき僕は窓ぎはに彼女を見つけた  
彼女はウインクしほがらかに笑つた  
きみがこゝに住んでると知るはずもなかつた  
をとめ子よ、こんな華美な宿に

「ありがたう、古い親友よ  
よく道を照らしてくれたねえ  
さあ、もうきみとお別れだ  
これからは他の世界を照らしたまへ

さびしくその悲しさを嘆いてる

戀するひとを見つけたら

慰めてやつてくれたまへ、きみがむかし

僕自身を慰めてくれたやうに」

## 七七

おまへの口がキッスで僕を傷つけた  
だからキッスでも一度丈夫にしておくれ  
もしも夕方までにすまなくつても  
あんまり急ぐことはない

まだまる一晚あるんだ

僕の心から愛するひとよ  
こんなまる一晚があれば  
たくさんキッスが出来て楽しめるのだ

## 七八

おまへがまあ僕の妻になれば

ひとから羨まれるよ

娯樂ばかりでくらしめてゆけるよ

たのしみや喜びばかりで

そして小言をいつたり騒いだりしたら

僕は辛抱がよくがまんする

だけどおまへが僕の詩をほめなけりや

僕はおまへと別れるよ

## 七九

彼女が僕をやさしく抱きしめたとき  
僕のためしひは天へ飛んで行つた  
僕はとぶにまかせてそのあひだに  
彼女の口から神酒カミサケを吸ひとつた

## 八〇

キッスの中にはどんなうそ

見せかけの中にどんな楽しみ

あゝ、だますことはなんとたのしいことか

だまされることは一層たのしい

戀人よ、おまへがどんなに拒まうと

おまへがゆるすことを僕は知つてゐる

おまへの誓ふことを信じてやる

おまへの信じることを誓つてやる

## 八一

雪のやうに白いおまへの肩に

頭をよせかけて

こつそりと僕はききすますることが出来る

何をおまへの心はのぞんであるか

青服の驃騎兵は喇叭を吹いて

門のなかへ騎行する

そして僕を明日は見棄てるだらう

こゝろからいとしい戀人が

明日はおまへが僕を見棄てるとしても

けふはまだおまへは僕のもので

おまへの美しい腕の中では

僕は二倍にしあはせだ

## 八二

青服の驃騎兵は喇叭を鳴らし  
門の方へ出てゆく

そのとき戀人よ、僕は歸つて来て  
おまへに薔薇の花束をもつて来る

こいつは亂暴狼藉だつた  
兵隊と國土の負擔とだもの  
おまへの心中にも  
たくさん含蓄してゐたのだつた

## 八三

若い年だのに  
戀の情熱から  
さまじくつらい目にあつた

しかし薪が高すぎるので  
火は消えようとする  
全く、こいつは結構だ

わかい美しいひとよ、これを考へて  
ばかな涙とばかな戀の恨みとは  
追ひ拂ひなさい

おまへの命が残つてゐるなら  
古い戀など忘れなさい  
全く、僕の腕の中で

## 八四

本當におまへはきらつてるのか  
本當におまへはすつかり變心したのか  
世界ぢゆうへ僕は訴へる  
おまへが僕をこんなにひどく扱ふことを

おゝ思知らずの唇め

どうして悪口がいへるのだ  
あんなに愛して、よかつた日に  
おまへにキッスした男のことを

## 八五

むかしかあいく會釋してくれた  
あゝ、あの體がもとのとほりにある  
それから僕の生活をたのしくしてくれた  
あの唇がもとのとほりにある

僕がむかし喜んで聞いた  
あの體ももとのとほりにある  
僕自身だけがもとのとほりぢやない  
かはつて故郷へ歸つて来た

白い美しい腕に

しつかりと愛情こめて抱かれながら  
僕はいまあのひとの胸に凭つてゐる  
無感覺でいやいやで

## 八六

僕がもしもこの罪ふかい欲望を  
おさへるならばすばらしいだらう  
しかしそれがうまくゆかなかつたら  
それでも大した楽しみが得られよう

## 八七

うつくしい娘よ、僕に恥かゝせないでおくれ  
ウンテル・デン・リンデンでは挨拶しないでおくれ  
そのあとで家へかへつたら  
なんでももう思ふとほりに出来るから



## 八八

ねえ友よ、こゝワソテル・デン・リンデンでは  
おまへの心に信心を起させることできる  
こゝでは一番うつくしい女どもを  
ひととこで見る事が出来るのだ

みんなはでな絹の着物を着て  
とても美しくきれいなのだ  
一人の詩人が彼女たちをたくみにも  
さまよふ花と名づけたのだ

なんときれいな羽の帽子だらう  
なんときれいな土耳古シヨールだらう  
なんときれいないろの頬だらう  
なんときれいな白鳥のやうな首だらう

とてもやさしく清いこゑだつた

彼等はこひのあこがれを歌つた  
戀と戀の發露とを

かういふ藝術を享受して  
御婦人がたは涙におぼれたまうた

## 九一

サラマンカの城壁の上では  
そよ風がしづかですはやかだ  
そこを美しい婦人といつしよに  
僕は夏の夕方に散歩する

美人のほつそりとした體に  
僕は腕をまはし  
しあはせな指で感知する  
胸のほこりかのときめきを

## 八九

きみらは僕をめつたに理解してくれなかつた  
僕もきみらをめつたに理解してやらなかつた  
お互ひが泥の中でめぐりあつたときだけ  
僕らは直ちに理解しあつた

## 九〇

僕がこゑを出したとき  
隣人どもはブツ／＼いつた  
彼等はブツ／＼いつてかういつた  
あなたの歌ひかたは荒すぎると  
それから彼等はみなかあいらしく  
小さいこゑを出しやがつた  
水晶のやうなトレモロだ

しかし心配なさゝやきが  
菩提樹のしげみを渡つて来て  
下の方の暗い水車の小川では  
不吉な不安なゆめが吐いてゐる

「あゝ、奥様おとここんな豫感がします  
いまに僕は消放されて  
サラマンカの城壁のうへを  
ふたりは二度と散歩できないと」

\* スマインの市、こゝではクラチンゲンのことを歌つてゐる。

## 九二

僕の隣には美男といはれてる  
ドン・ヘンリケスが住んでゐる  
僕らの部屋は隣同士で  
薄い壁がわけへだてするばかり

サラマンカの女たちはボーッとなる  
 拍車を鳴らし口癖をちぶらし  
 そしていつも犬をつれて  
 彼が街に出てゆけば

しかししづかな夕べの時刻には  
 たつたひとりで彼は家にある  
 手にはギターをもち  
 心には甘い夢をもち

絃をふるはせて

彼は即興的に演奏しはじめる――

あゝ、ふつか酔のやうに僕を苦しめる  
 そのフン／＼といふ音とキン／＼と細いこゑとは

### 九三

會ふとすぐ眼とこゑとで僕にはわかつた

だめだ、カーテンが上らない  
 あの子はまだベッドにゐて眠つてる――そして僕のこと  
 をゆめに見てゐるのか

### 九五

ハレの市場には

二匹の大きな獅子が立つてゐる

あゝこのハレの傲慢な獅子よ

なんとよくおまへは馴らされたことだ

ハレの市場には

巨人が立つてゐる

劍をもつて動かない

驚きのため石になつたのだ

ハレの市場には

大きな教會が立つてゐる

おまへが僕に好意をもつてゐることは  
 もしもきびしいお母さんがすぐよこにゐなかつたら  
 僕たちはすぐキッスしたらうと信じる

そして明日は僕は再びこのまちを去り  
 もとの道を急いで立ち去るので  
 そのときわがプロンドのをとめは窓へに倚つてゐる  
 そこで僕は親しい會釋を上に向つて投げる

### 九四

峰の上には日はや登り  
 仔羊の群は遠くで啼いてゐる  
 わが戀人よ、わが仔羊よ、わが太陽よ、よろこびよ  
 も一度おまへを見たいものだ

僕はうかどぶやうな顔して見上げた――  
 ごきげんよう、をとめ子よ、僕はこゝから旅に出る

學生組合や同郷人會が  
 祈りの場所をそこにもつてゐる

※ ドイツ中部の郡會、ライブチヒの西北三〇軒にあり、大學が  
 あり、古蹟が多い。

### 九六

美しい家政上手な婦人よ  
 家屋敷はきちんと世話が出来て  
 厩も穴倉も手入れがよく出来て  
 鳥はよく耕されてゐますね

庭は隅から隅まで  
 草ぬき掃除が出来て  
 鹽をとつた麥藥はそのうへに  
 ベッド用にもちゐられてますね

けれどあなたの心とくちびるは  
美しい婦人よ、あそんでますね  
さうしてあなたの居心地よい寢室は  
半分だけしか使はれてませんね

## 九七

夏の夕べは森やみどりの牧場の上に  
妄想にふけりながら横たはつてゐる  
蒼い空には金の月が  
かほりを放つてさはやかに輝いてゐる

川邊にはこほろぎがなき  
水のなかに動くものがある  
しまの中に旅人は  
ビチャ／＼いふ音とひとの息づかひを聞く  
そこ川邊にはたゞひとり

美しい妖精が水浴してゐる  
白く愛らしい腕と背は  
月光にキラ／＼と輝いてゐる

## 九八

しらぬ路に夜が来た――  
胸はいたみ身は疲れてゐる――  
あゝしづかな祝福のやうに  
美しい月よ、おまへの光は路にふりそゞぐ

あゝ美しい月よ、おまへは光で  
僕の夜の恐怖を追拂つてくれる  
僕の苦しみはとけてなくなり  
眼には露がいつばいだ

## 九九

「あの炎は消えてしまつた  
僕の心は冷たく憂鬱だ  
さうしてこの小さい本こそ僕の戀の  
灰をいれた骨壺だ」

死は涼しい夜で  
生はむし暑いひるだ  
もう日がくれてねむい  
ひるが僕を疲れさせた

僕のベッドの上には一本の木が生え  
その中で若い夜鶯がうたふ  
きよい戀をうたふ  
僕は夢にさへそれを聞く

## 100

「ねえ、むかしふしぎな力のある炎が  
ふしぎにきみの胸に一杯になつたとき  
きみがあんなに美しくうたつた  
美しい戀人はどこにゐる」

## 神々のたそがれ

五月は金の光と絹のやうなそよ風と  
 かぐはしいかをりともつてやつて来て  
 白い花でしたしげにまねき  
 幾百の青い葦の眼から會釋をし  
 日光と朝露とを織りこんだ  
 花模様のある緑色の絨氈をひろげて  
 かあいい人の子を呼びよせる  
 内氣な人間がその最初の呼びごゑを聞きつけ  
 男どもは南京木綿のズボンと  
 金いろのボタンのついた晴着の上衣をつける  
 女どもは純白の着物を着る  
 青年たちは口ひげをひねり  
 をとめたちは胸を渡うたせる

町の詩人はポケットに  
 紙と鉛筆と柄附眼鏡とをいれ——歡聲をあげて  
 この群衆は町の門へと向ひ  
 門の外の緑の芝生に陣どつて  
 木々がまめまめしく大きくなつてゐるのにびつくりし  
 色とりんどのやさしい花をおもちやにし  
 たのしい小鳥の歌に耳をかたむけ  
 青天井にむかつて歡聲をあげる。

僕にも五月はやつて来た。彼は三度  
 僕の扉をたゞいて叫んだ「わしは五月だ  
 青ざめたゆめ見るやつよ、出て来い、キッスをしてや  
 らう」

僕は扉に錠をおろしたまゝにしておいて叫んだ

「僕を誘つてもむだだよ、いやなやつ  
 僕はおまへを見ぬいたよ、世界の組織を  
 見ぬいたよ、そしてあまり澤山見すぎたし

あまり深く見すぎたのでうれしいことはみななくなつて  
 永遠の苦痛が心にくひこんだ  
 人の住家と人の心との  
 石のやうに堅い殻の中を見ぬき  
 どちらにもいつはりとかたりとふしあはせとを見るんだ  
 顔を見ればひどくいやな考へがよみとれる  
 をとめたちのはぢらふ顔色に

ひめかくしてゐる欲望がもえ立つてふるへてゐるのを見  
 るし

熱狂し自負してゐる青年の頭には

をかしい派手な色の鈴つき頭巾を見るし

この世ではカリカチュアとやつれ果てた影法師とだけが  
 見えて

癡狂院だか病院だか

どつちともわからない  
 古い地球の表面が  
 まるで水晶のやうに見ぬけるし、五月がむだに骨折つ  
 て

たのしい緑でかくさうとする  
 おそろしいものを僕は見る。僕は死人を見る  
 下の方のせまい棺桶のなかで兩手をくみあはされ  
 眼をみひらいてよこたはつてゐる  
 着物はまっ白、顔もまっさをだ

唇のあひだからは黄いろい蛆むしが這ひ出てゐる  
 僕は見る、息子がうさ晴らしに

おやじの墓の上に情婦と腰をおろすのを——  
 嘲弄のうたを夜鶯は四方でうたつてゐる——

かあいい牧場の花もいちわるく笑つてゐる——

死んだ父親は墓の中で動いてゐる——

老母なる地球は苦しげに痙攣する

かあいさうな地球よ、僕はおまへの苦痛を知つてゐる  
 僕にはおまへの胸に熱情がうごめいてゐるのが見える

おまへの幾百本の血管から出血するのが見える  
 おまへの傷口が大きく裂けるのが見える  
 荒々しく炎と煙と血がふき出すのが見える  
 僕にはおまへのいふことを聞かぬむすこの巨人どもが  
 あの太古の悪黨どもがぐらゐ奈落からのぼつて来て  
 赤いたいまつを手にも手にうち振つてゐるのが見える——  
 彼等は鐵のはしごをかけ  
 蒼穹へと荒々しくかけのぼる——  
 黒い小人どもがそのあとからよぢのぼり、  
 金の尾はみんなバチ／＼いつてとびちる  
 おそれ知らぬ手で神の天幕の  
 金の帷を引きむしりと  
 敬虔な天使の群は泣き叫んでつつぶす  
 蒼ざめた神さまは玉座の上で  
 おつむから冠をおぬぎになつて髪をかきむしられる——  
 しかも亂暴な一揆どもはます／＼近く押しよせる。  
 巨人どもは赤いたいまつを廣大な  
 天國ちゆうらに投げちらし、小人どもは

天使たちのせなかを焰の鞭でむちうつ——  
 天使たちは苦しさでもがきのたうちまはり  
 髪をつかんで投げとばされる——  
 フロンドの髪とかあいい顔と  
 口のまはりに永遠の愛をたゞよはせた  
 僕自身の天使もそこに見かけたが——  
 身の毛のよだついやらしい黒い妖怪が  
 僕の蒼ざめた天使をつかみ上げ  
 けだかい手足を齒をむき出してながめ  
 情愛ふかくしつかと抱きしめる——  
 叫びごゑが一聲するどく宇宙全體にとどろきわたり  
 柱は折れ地と天とは  
 崩壊し古い暗黒が支配する。

## ラトクリフ

165 郷 歸  
 夢の神は僕を一つの土地へつれて行つた  
 そこでは校垂柳がその長い  
 緑の手で「ようこそ」の會話をし  
 花たちは姉妹のやうなかしこい眼で僕をながめ  
 鳥たちのおしやべりは親しげにひびき  
 犬の吠えるこゑさへも懇意におもはれ  
 物音やすがたは舊友のやうに  
 僕に挨拶し、しかもなにもかもが  
 僕にはひどくよそ／＼しく、ひどくふしぎによそ／＼し  
 く思はれた  
 一軒の田舎風の美しい家の前に僕は立つた  
 僕の胸はときめいたが、頭の中は  
 しづかであつた、しづかに僕は

旅行着の塵を拂つた  
 呼鈴はけた／＼ましく鳴り扉はあいた  
 そこには男たちや女たちやたくさんの  
 知合ひの顔が見えた、みんなの顔には  
 しづかなかなしみとひそかにおそれてゐるさまが見え  
 た  
 ふしぎにとり亂して、まるで弔みの態度で彼等は僕を  
 見た  
 それで僕自身も心の奥底までふるへた  
 まるで未知の不幸を豫感したやうに  
 マルグレーテ婆さんを僕はすぐに見つけた  
 僕は彼女をさぐるやうに見つめたが彼女はものをいけ

なかつた

「マリアはどこだ」と僕はたづねたが、彼女はものをい  
はないで

そつと僕の手をとつてたくさんの

善美をつくした死のやうな静けさの支配してゐる

長い照りわたる部屋をぬけてつれてゆき

とう／＼うすくらしい部屋につれて行つた

さうして顔をそむけながら

ソファに坐つてゐるひとの方を指した

「マリアさんですか」と僕はたづねた

僕自身ものいひにこもつてゐるつよさに内心おどろきを

感じてゐた

すると石や金属のやうなひどきこゑがいつた

「みなさんがさう呼んで下さいますの」

するどい苦痛がそのとき僕の體ぢゆうを凍らせた

そのうつろな冷たい聲音こそ

むかしあんなに甘かつたマリアのこゑだもの

色のさめたりラ色の着物を着たその女は

だらしない着付けをして乳はぶらんと垂れ  
眼はガラスのやうにすわり

青いかほの頬の筋肉は革のやうにたるみ——

あゝその女がしかしむかしあのやうに美しかつた

花ざかりのやうにきれいだつたかあいかつたマリアだ

「あなたは永いあひだ旅行してらつしやつた」

彼女は冷たい不氣味ななれなれしさをこめて大聲でい

つた

「あなたはもうあまりやつれてはいらつしやらないや

うね

お丈夫ね、しつかりしたお腰とこむらとが

頭丈でいらつしやることの證據ですわ」

あまいほゝ多みがうす黄いろい口のまはりにたゞよつ

た

僕はどきまぎしていつてしまつた

「あなたが御結婚なすつたつてききました」

「えゝ、しましたよ」と無頓着に大聲で笑ひながら彼

女はいつた

「夫と自稱する草をかぶせた木の杖を

あたしは手にいれました、でも木は

木ですもの」そしていやらしくこゑも立てずわらつた

そこで僕の心中を冷たい恐れが走りぬけ

疑問が僕をつかまへた——「これがあの純潔だつた

花のやうに純潔だつたマリアの唇だらうか」

しかし彼女は立上つて椅子から手早く

カシミアのショールをとつて首にまきつけて

僕の腕によりかゝつて

そこからあげはなされた門口をぬけて

野こゑ敷こゑ牧場をこえてつれて行つた

もえる赤い日輪ははや低くかたむいて

その眞紅の光は木々や花や

とほくへ莊嚴に流れてゐる

流れのうへに照りわたつた

「青い水に大きい金いろの眼が

うかんでゐるのが見えますか」とマリアはせか／＼と

叫んだ

「しいつ、哀れなものよ」と僕はいつて

たそがれの光の中にお伽歎めく動くものを見た

野からは霧のやうなものすがたが浮び出て

白いやはらかい腕で抱きあつてゐた

草はやさしくながめあひ

百合のうてなはこがれるやうによりあつて頭をたれ

薔薇の花のうへにはすべて愛欲の火がもえてゐた

撫子は火のやうな息をついてゐた

たのしい匂ひにすべての花が酔つてゐて

みなしづかな喜びの涙をながし

みなが歡聲をあげてゐた「戀よ、戀よ、戀よ」

蝶はひら／＼舞ひびか／＼光る

はなむぐりは上手な妖精の歌を口ずさんでた

夜風はさゝやき、僻はざわ／＼と鳴り

夜鶯はこひしさうに歌つてた——

そしてさゝやきやざわめきや歌のなかで

僕の腕によりすがつてゐるやせ衰へた女は

うつろなひびきのない冷たいこゑでしやべつてみた  
「あたしはこれらのものの夜お城でしてることを知つて  
ます

この長い影はいゝ奴で

してほしがる人になら誰にでもおじぎをします

青い上着のは天使です

光つた繩をもつた赤いのはその敵ですの」

それからまだたくさん様々なふしぎな話を

彼女はたえまなしにしやべつてから

疲れて櫛の木の下にある

苔の腰掛に僕と坐つた

こゝで僕たちは一緒にしづかに悲しく坐り

お互ひにながめあつてます／＼悲しくなつた

櫛の木は死にゆく人の呻めきのやうにざわ鳴り

夜鶯はひどくかなしげにうたつた

けれど赤い光が木の葉のあひまからもれて

マリアの白いかほのまはりにたゞよつて

そのすわつた眼から熱情をさそひ出すと

むかしのあまいこゑで彼女はいつた

「あたしがひどくみじめだつてことをどうしておわか  
りになつたの

このあひだあなたのはげしい歌でよみましたのよ」

これが僕の胸に氷のやうに冷たくしみわたり

未来を見た自身自身の狂氣に身の毛がよだち

僕の額はくらく癡癡して

恐怖のため僕は目をさました

## ドンナ・クララ

夕べの園を法官<sup>フツカイ</sup>の姫は

そゞろ歩きをなすつてる

太鼓や喇叭の鳴る音は

お城の方からひびいて来る

「ダンスはうるさくなつちまひ

甘つたるいお追従や

あたしを上品ぶつて太陽にたくへる

騎士たちもうるさくなつたわ

何もかもうるさくなつたわ

夜なかにあたしの窓下で

琴をかんでて誘つた騎士を

月の光で見えてからは

立つてる姿はすらりと雄々しく

氣高く蒼いお顔から

お眼はキラ／＼刺すやうだつた

ほんとに聖ジョージさまそつくりだわ」

ドンナ・クララはかう考へて

地面を眺めてた

彼女が視線をあげると眼の前に

あの美しい見慣れぬ騎士が立つてゐる

手を取りあひ戀をさゝやきながら

ふたりは月光の中をさまよつた  
西風はしたしげに御機嫌をうかゞひ  
薔薇の花はお伽噺のやうに會釋する

薔薇の花はお伽噺のやうに會釋をし  
戀の使のやうに興番してゐる——

「ところでできくが、戀人よ、どういふわけで  
そんなに急にまつ赤になつたのです」

「いとお方、蚊が刺しましたのよ

夏には蚊がひどく憎らしい

ほんとに憎らしいつたらありやしない

長つ鼻のユダヤ人の一揆のやうよ」

「蚊やユダヤ人のことはおおきなさい」

騎士はやさしく愛撫しながらいつた

巴旦杏の木からは落ちて来る

幾千の白い花の雪が

幾千の白い花の雪が

そのいゝ匂ひをまきちらした

「ところでできくが戀人よ

あなたのお胸はわたしに好意をもつてますか」

「え、いとお方、あなたを好きよ

神様に呪はれたユダヤ人に

極悪無道に陰險に

殺されなすつた救世主様にかけて」

「救世主やユダヤ人のことはおおきなさい」

騎士はやさしく愛撫しながらいつた

月光に照らされた百合の花が

はるかに夢のやうに揺れてゐる

月光に照らされた白百合の花は

上の方の星を眺めてゐる——

「ところでできくが、戀人よ

あなたの誓ひはうそではないね」

「あたしの心に嘘はありません

あたしの胸にモール人<sup>(1)</sup>や

けがららしいユダヤ人の血液が

一滴もないのと同じやうに」

「モール人やユダヤ人のことはおおきなさい」

騎士はやさしく愛撫しながらいつた

そして天人花<sup>(2)</sup>の茂みへと

法官<sup>(3)</sup>の姫をつれて行く

やはらかな戀の網でもつて

彼はこつそり姫をくるんでしまつた

短いことば、長いキッス

ふたりの心臓はみちあふれた

心もとける甘い祝婚歌のやうに

やさしい夜鶯<sup>(4)</sup>は歌つてる

松火<sup>(5)</sup>踊りのやうに

螢が地面で上下してゐる

あづまやの中はひつそりとなり

人目を忍んでゐるやうに

用心ぶかい天人花のさやめきと

花の息つかひが聞えるばかり

ところが急にお城から

太鼓と喇叭とがひびいて来る

夢からさめてクララは

騎士の腕から身を引いた

「おや、あたしを呼んでますのよ

でもお別れするまへに

こんなに永く隠してらつしやつた

お名前をあたしにいはねばなりませんよ」



騎士は晴れやかにほゝゑみながら  
戀人の指にキッスする  
唇とひたひとにキッスする  
それから最後に彼はいふ

「お嬢さま、あなたの戀人なるわたくしは  
甚しくほめられる偉大なる  
博學のラビなる

サラゴツサ(四)のイスラエルの息子です」

- (一) アラゴン、ポルトガル及バイングランドの守護とあがめられる聖者、ディオクレチヤヌス帝のキリスト教迫害のときニコメディアで殺された(紀元三〇三年)。  
(二) マウレタニアの住民の意味から轉じて北アフリカのマホメット教徒の稱となつたが、こゝではスベインを中世占據してゐるアラビヤ人のことを指す。  
(三) ユダヤの律法を教へる者の稱號。  
(四) スベインにあつたアラゴン王国の二州。

## エドム\*に

千年もそのうへも

僕たちは仲好く我慢してゐる

おまへは僕の呼吸するのを我慢し

僕はおまへのあばれるのを我慢してゐる

たゞときん／＼暗いときには

おまへはふしぎな気分になつて

愛の恵氣のない爪を

僕の血で染めたのだ

いまは僕たちの友情は一層かたくなり

日に日に厚くなつて来る

僕自身があばれ出し

僕がおまへと同じく強くなるからだ

\* アブラハムの孫、イサクの子のエサウ、ヤコブと双生児、またの名エドム(赤)(創世記)。この詩はユダヤ人のキリスト教徒に對する關係をいつてるものと解される。一八二四年に作られ、同じくユダヤ人なるモーゼス・モーゼルへの手紙に記された。

## 『ラビ・フォン・バハラッハ』\*の寄贈本とともに

高い音となつて破れる  
 かなしい殉教者のうたよ  
 僕がながいあひだ  
 もえるしづかな心のなかに抱いてゐたうたよ

みんなの耳に忍び入り  
 耳から心へと忍び入る  
 僕は強く呪ひ出した  
 一千年の苦しみを

大人も子どもも泣き  
 冷たい紳士たちも泣く  
 女たちも花も泣き

空では星が泣く

なみだはみな静かな結社をつくつて  
 南の方へ流れてゆく  
 なみだは流れる、そしてみんな  
 ヨルダン河へ流れこむ

\* 一八二四年より二六年にかけてハイネが書いた未完の小説。  
 この詩も一八二四年のモーゼルあての手紙に記された。

## アルマンゾル

コルドバの大伽藍の中には  
 千三百本の柱が立つてゐる  
 千三百本の巨大な柱が  
 大きな圓屋根をさへへてゐる

そして柱と圓屋根と壁とは  
 上から下までコーランの  
 アラビア文字の箴言が  
 さかしくも花模様(二)に組み合はされて連つてゐる

モール人の諸王がむかしこの堂を  
 アラー(三)をたへて建てたのだ  
 けれど時代の暗い渦巻に  
 たくさんのことが變つてしまつた

塔守が祈禱のとき  
 聲高く呼んだ塔からは  
 いまではキリスト教の鐘が  
 陰鬱な音をひびかせてゐる

信者たちが獲言者のことばを  
 誦してゐた階段には  
 いまでは禿頭の小坊主どもが

ミサで氣のぬけた奇蹟を見せてゐる

いろとり／＼に塗つた人形のまへを  
ぐる／＼まはりして

吠えるし煙を立てるし鳴らし立てるし  
いやな蠟燭はキラ／＼してる

コルドバの伽藍のなかに

アルマンゾル・ベン・アブドゥラーが立つてゐる

柱といふ柱をしづかに眺めながら  
しづかなことばをつぶやきながら

「あゝ、汝ら巖丈な大きな柱よ

むかしアララをたゞへて建てられたのに

いまではいやなキリスト教のために

汝らは仕へてうや／＼しくしなきやならないのか

汝らは時代に順應し

重荷を辛抱つよくさへへてゐる

さうだ、もつと弱い者はなほさらに

ずつと穏やかに甘んじてなけりやならぬ」

一層はれやかな顔をして

アルマンゾル・ベン・アブドゥラーは拜禮する

コルドバの伽藍の

飾りのついた洗禮盤の上に

## 二

急いで伽藍からかけ出して

荒々しい黒馬をかり立てた

しめつた髪の毛と帽子の羽は

風にふさ／＼波立つた

グアダレキヴェイル川<sup>四</sup>に沿つた

アルコレア<sup>五</sup>へのみちを

白い巴旦杏の花の咲く

にほひのいゝ金色のオレンジの咲くみちを

たのしげな騎士は馬をはせ

口笛をふき歌をうたひ氣樂さうに笑つてゐる

鳥どもも歌をあはせ

流れの水もこゑ高く合唱する

アルコレアの城には

クララ・デ・アルバレスが住んでゐる

父はナバラで戦つてゐる

それで窮屈がすくないのを喜んでゐる

アルマンゾルはとほくから

もう太鼓や喇叭のひびくのを聞き

城のあかりが木の間にしに

キラ／＼光るのを見かける

アルコレアの城では

十二人の着飾つた婦人が踊り

十二人の着飾つた騎士が踊つてゐる

けれどアルマンゾルが一等うまく踊る

楽しい氣持で翼が生えたやうに

彼は廣間をとびまはる

婦人たちみんなに

甘いおべつかをいふすべを心得てゐる

彼はイサベラの美しい手に

すばやくキッスしそこから飛び立つて

エルビラのまへに腰をかけ

たのしげに彼女の顔を見る

ほゝゑみながらレオノラに聞く

「本日わたしはお氣に召しますか」

さうして自分の外套に刺繍してある

金の十字架を見せつける

どの婦人にも断言する

「わたしはあなたを心から好いてます」と

「ちやうどわたしはクリスチャンであると同じくほんと  
うに」

その夜は誓つた三十回も

三

アルコレアの城では

楽しみも音楽もやんでしまひ

騎上も婦人がたも姿を消し

あかりも消えてしまつた

ドンナ・クララとアルマンゾルだけが

廣間に残つてゐた

ふたりのうへには最後のランプが

うすらあかりをさびしくかけてみた

婦人は椅子にかけてをり

騎士は床几にかけてゐた

彼の頭は疲れてねむたげに

愛するひとの膝にのつてゐる

婦人はいろ／＼思ひこみながら

金の小瓶から薔薇油を

アルマンゾルの薨いろのまき毛にかけてやる――

男は胸の底から吐息つく

婦人はいろ／＼思ひこみながら

やはらかい口でキッスを

アルマンゾルの薨いろのまき毛にしてやる――

男の額は曇つて来る

婦人はいろ／＼思ひこみながら

あかるい眼から涙の川を

アルマンゾルの薨いろのまき毛にそ／＼――

男の唇のまはりがビク／＼する

彼はゆめを見る、自分がまたもや

コルドバの伽藍の中に

ふかくうなだれ涙を流しながら立つてるゆめを

たくさんのはつきりしない聲をきくゆめを

高い大きな柱がみな

不平さうに怒つてつぶやくのが聞える

もうこれ以上さ／＼へてゐたくない

くらく／＼し出しふるへ出す――

柱はめき／＼折れ出して

群衆も僧たちもまつさをになる

圓屋根はひどい音を立てて落ち

キリスト教の神々がす／＼泣くゆめを

(一) スペインのアンダルシヤ州の首府。

(二) マホメット教の聖典。

(三) マホメット教の唯一神。

(四) アンダルシヤ州を流れる川。

(五) コルドバの近くの驛站。

## ケブラール詣り

## 一

母親は窓ぎはに立つてゐた  
息子は寢床によこたはつてた  
「ウィルヘルムや、行列を見に  
起きる氣はないの」

「おかあさん、僕は病氣がひどくて  
何もきこえないし見えません  
死んだグレートヘンを思ふので  
心臓が痛くてたまりません」

「起きなさい、ケブラール<sup>\*</sup>へ行きませう  
聖書と数珠をおもちなさい  
聖母さまがおまへの病氣の胸を  
すつかり癒してくださいさるよ」

教會の旗はひら／＼し  
教會の歌のこゑがする  
ライン川の岸のケルンだ  
行列がゆく

母親は人々のあとにつき  
息子の手をばひいてゆく  
ふたりとも聲を合せてとなへる

「かたじけなギマリアさま」

## 二

ケブラールの聖母さまは  
けふは一番よい葺物をおつけになり  
けふはとつてもお忙しい  
たくさんの病人がやつて来る

病人どもはおそなへに  
蠟でこさへた手足を  
蠟製の手と足とを  
聖母さまにもつて来る

蠟の手を捧げると  
手の傷がなほる  
蠟の足を捧げると  
足が達者になる

掙木杖にすがつてたくさんケブラールへ行つたが  
いまでは繩の上で踊つてる

指一本自由にならなかつた者が  
いまでは大勢ヴィオラを弾いてゐる

母親は蠟燭をとりあげて  
それで心臓をこしらへた  
「これを聖母さまにもつておいで  
おまへの痛みをなほして下さいさる」

息子は嘆息しながら蠟の心臓をとりあげ  
嘆息しながら聖像のまへへ行つた  
涙は眼からほとぼしり  
ことばは胸からほとぼしる

「ありがたいありがたい聖母さま  
清淨無垢の神をとめさま  
天國の女王さま

僕の苦しみを聞いて下さい

僕はそのケルンのまちに

母親と一緒に住んでみます

このまちには何百といふ

禮拜堂や教會があるのです

うちの近所にグレートヘンが住んでゐましたが

今では死んでゐないのです——

マリヤ様あなたにと鱧の心臓をもつて來ました

僕の心臓の傷をなほして下さい

僕の病氣の心臓をなほして下さい

朝晩ともに熱心に

お祈りし歌ふことにします

かたじけなやマリヤさま」

三

病氣の息子と母親とは

小さいへやで眠つてゐた

そこへ聖母さまがお越しになつた

足音たてずにこつそりと

病人のうへに身をかゞめ

お手をこつそりと

心臓におあてになり

やさしくほゝゑまれて姿を消された

母親はのこらず夢に見た

なほそのうへのことをゆめに見た

うたゝ寝から眼をさました

犬がひどく吠えたので

息子は手足をのびしたまゝ

ねてゐて息が絶えてゐた

青いほゝには

あかるい朝日かけがさしてゐる

母親は両手をくみあはせ

どうしていゝかもわからなかつた

小聲で信心ぶかくとなへるのだつた

「かたじけなやマリヤ様」

\* ハイネの住む故郷のデューケルドルフに近い地帯、ゴシック式の加蓋で有名。

ハ  
ル  
ツ  
の  
旅  
か  
ら

ブ ロ ロ ー グ

黒い上衣よ絹の靴下よ  
白い禮儀正しいカフスよ  
やさしいことばよ、抱擁よ——  
あゝそれに心さへあつたなら

胸の中に心が、心の中に  
愛が、熱い愛があつたなら——  
あゝ彼等のにせものの戀のくるしみの  
歌が僕をば殺すのだ

しづかな小屋が建つてゐて  
胸が自由にあき  
自由な風の吹く

一八二四年

山々の上へのぼつて行かう  
黒い樅の木がつつ立ち  
谷川がざわ鳴り小鳥がうたひ  
人を見下げる雲のかけてゐる  
山々の上へのぼつて行かう

つる／＼する廣間よ、さやうなら  
圓滑な紳士淑女がたよ、さやうなら  
山々の上へのぼつて行かう  
笑ひながら君たちを見下さう



## ハルデンベルヒ山上にて

むかしのゆめよ、出て来い  
心の扉よ、ひらけ  
歌のよるこび、うれひの涙が  
ふしぎに流れ出て来る

陽気な泉がふき出し  
ほこらしげな鹿がさまよひ  
かあいづくみのうたつてゐる  
樅の林をぬけて流浪しよう

大昔の城のあとが  
朝日のなかに立つてゐる  
山の上へのぼらう

けはしい岩山へのぼらう

そこでしづかに腰を下して  
古い時代を思はう  
むかしさかえた人々と  
衰へたその榮華とを

草はいま闘技場をおほつてゐる  
そこではけこりかの男が闘ひ  
最もすぐれた敵に克ち  
闘技の賞を勝ち得たのだ

葛がいまバルコニにまとひついでゐる

そこには美しい貴婦人が立ち  
誇らしげの勝利者を  
眼で打ち負かしたのだ

あゝ、男の勝利者も女の勝利者も  
死の手が征服してしまつた——  
あのやせた鎌もつた騎士<sup>\*</sup>どのは  
僕たちみなを砂の中へうち倒す

\* 死神。

## 山の牧歌

—

山の上には小屋がたつてゐて  
年とつた山番が住んでゐる  
そこでは緑の樫の木がそよぎ  
金いろの月が照つてゐる

小屋の中にはすばらしい彫刻をしな  
よりかけ椅子が置いてある  
それに掛けるものは幸せだ  
そしてその幸せ者が僕なのだ

古い唄をうたつてるよ」

をとめはこゝろで  
聲をひそめてさゝやく  
いろんな大切な秘密をば  
もう彼女は僕にうちあげた

「けれど伯母さんがなくなつてからは  
あたしたちはもうオスラルの  
射撃場へは行けません  
とてもすばらしいところなだけけれど

こゝほそことちがつてさびしいですわ  
冷たい山の上ですもの  
冬にはあたしたちは全く  
雪の中に埋められちまつたやうなものですわ  
あたしはこはがりのむすめでして

僕の膝に手を置いて  
床几に少女がかけてゐる  
青い二つの星のやうなそのまなこ  
緋ばらのやうなその口

このかあいい青い二つの星は  
空のやうに大きく開いて僕をながめ  
この緋ばらのうへにずるさうに  
をとめは百合のやうな指を置いてゐる

「いゝや、おつかさんは僕らを見てゐない  
一生懸命つむいでゐるもの  
お父さんはチーテルを弾いて

夜になると活動する

山のおばけたちを  
子供のやうにこはがりますの」

かあいいむすめは急にだまりこむ  
自分のことばにおびえたやうに  
そしてちつちやい両手で  
自分の眼をかくしてしまふ

そとの樫の木のそよぎは一層高くなり  
糸車はブン／＼音立てて  
チーテルがそれにまじつてかなでられ  
古い唄は口ずさまれる

「おそるるなかれいとし子よ  
悪しき諸霊の力をば  
晝さへ夜さへ、いとし子よ  
天使はまもりぬたまへる」

縦の木はみどりの指で  
 低いちひさい窓をたくく  
 月はだまつて聞いてゐて  
 金の光をそゞぎこむ

近くの寢室では

父母がかすかにいびきをかいてゐる  
 けれど僕たちふたりはたのしげに  
 おしやべりして眠らないでゐる

「あなたがよくお祈りなされるなんて  
 信用しにくいわよ

あなたの唇のふるへるのほ  
 お祈りのせみぢやないわよ

そのいやな冷たい唇のふるへは  
 いつもあたしをこはがらせますのよ  
 でもそのわけのわからぬ心配を  
 お眼のやさしい光がなだめるわ

正しい信仰といはれるものを  
 信じていらつしやるかもあたしは疑ふわ――

父なる神、神の子、聖靈を  
 ほんとお信じにならないの」

「あゝ、好きな子よ、子供の時から  
 おつかさんの膝の上に坐つてたときから  
 僕はたくみに偉大に治めたまふ  
 父なる神を信じてゐたよ

この美しい世を造りたまひ  
 そこに美しい人間を造り  
 太陽や月や諸星の

運行をお定めになつた神を

もつと大きくなつたとき、好きな子よ  
 もつといろ／＼のことがわかつて來た

僕は理解がつき分別がついて  
 神の子もやはり信じたんだ

愛してわれわれに愛を明らかにされ  
 報酬にいつもさうであるやうに

民衆から十字架につけられなすつた  
 神の子もやはり信じたんだ

いまでは成長しきつたものだから  
 いろ／＼本を読み方々旅をしたものだから

胸がふくらんで、心のかぎり  
 聖靈をも僕は信じてゐる

この聖靈は最大の奇蹟をなさり

もつと大きなことも澤山なされるのだ  
 暴君どもの城をうち破り  
 奴隸のくびきをうちこはしたまうた  
 致命の古傷を癒して下さり  
 古い權利をよみがへらせたまうた  
 人間はすべて生れながらに平等であり  
 みな一様に貴族であると

悪い迷霧をちらし  
 われわれの愛と樂しみをそこなうて  
 日も夜もわれわれをせゝら笑ふ  
 くらい妄念をちらしたまうた

自分の意志を遂行さすために  
 ものの具たしかによそほうた幾千の騎士を  
 この聖靈はよりすぐりなすつて  
 これに勇氣を賦與したまうた

彼等の貴重な劍はかゞやくし  
そのよき旗は風になびく  
ねえ、好きな子よ、きみはほんとうに  
このほこらしげな騎士が見たいのかい

そんなら、好きな子よ、僕をごらん  
僕にキッスし平氣でごらん  
僕自身がこの聖靈の  
えらんだ騎士のひとりなのだもの」

## 三

外では月はしづかに  
みどりの樅の木のうちろにかくれてゐる  
部屋の中ではランプは  
力弱くちら／＼しやつと光つてゐるといふくらゐ  
けれど僕の青い星は

明るい光で輝いて  
小さい緋ばらは眞赤に燃えて  
かあいいをとめは語り出す

「小人たちが、一寸法師たちが  
あたしどものパンとベーコンとを盗むのよ  
晩には箱の中にあつたのに  
朝になると姿をけしてゐるのよ

小人たちはあたしどものクリームを  
牛乳からつまみ食ひして  
鉢にふたをしないでをきますもの  
猫がのこりを飲みますの

そしてこの猫が魔女ですの  
夜の闇とあらしにまぎれては  
上の方の幽霊山へと  
古くて崩れた塔へ忍んでゆくんですもの

あの山にはむかしお城があつて  
愉快なことやピカ／＼光る武器が一杯  
立派な騎士や淑女やお小姓が  
たいまつ踊りをしてゐたんです

ところがいけない魔女があつて  
お城と人々に魔法をかけて  
いまでは廢墟がのこるばかり  
ふくろふが巢をかけてます

でも亡くなつた伯母さまの話では  
夜しかん／＼の時刻にあたり  
しかん／＼のことを山の上の  
しかん／＼の場所で發したら

廢墟はまたもや  
立派なお城にかはり  
騎士や淑女やお小姓の一隊は

またもや愉快に踊るんですつて

そしてお城も人も  
そのことばをいつた人のものとなり  
その新しい主權に  
太鼓や喇叭を鳴らして忠義が誓はれます」

このやうにお伽噺の光景が  
小さい薔薇の口から咲き出して  
眼はそのうへに青い星の  
光を注ぎかけるのだ

少女は自分の金髪を  
僕の両手にまきつけて  
指にみなきれいなあだ名をつけて  
笑つてキッスしてとう／＼だまつてしまふ

だまりこんだ部屋の中の何もかもが

僕をとても親しげに眺めてゐる  
テートルも戸柵もずつとまへに  
一度見たことがあるやうに思へて来る

壁時計はしたしげにまじめにしゃべりつゞけ

テートルは聞えるか聞えないかに

ひとりでに鳴りはじめるので

僕はゆめみごちで坐つてゐる

いまこそしかくゝの時刻なのだ

しかくゝの場所なのだ

さうとも僕の唇から

きつとしかくゝのことばが出る

好きな子よ、ねえもう暗くなつて

真夜中ときになつたのだ

小川も樫の木も一層こゑ高くなり

この古い山は眼をさました

その光のうしほがそゝぎこむ

だけど、かあいい子よ、僕たち自身は

もつともつとひどく變つてしまつた

たいまつ光と金と絹とが

たのしげに僕たちのまはりに光る

おまへつたら王女に變つてしまひ

この小屋はお城になつちまひ

騎士や淑女や小姓の一隊が

よろこびの聲あげて踊つてゐる

テートルの音と小人の歌が

山の裂け目からひゞいて来る

陽氣ちがひの春のやうに

外では花の森が咲き出した

花は時期はづれのふしぎな花

葉は大きくてうそのやう

もゆる思ひにせまられたやうに

にほひがよく色が派手でせつかちで活潑だ

薔薇は赤いほのほのやうにはげしくも

その混亂の中からほとばしり出るし

百合は水晶の柱のやうに

大空たかくとびいだす

太陽のやうに大きな星は

こがれこがれた思ひで見下してゐる

百合の大きなうてなには

僕ときたらおまへとお城と人と

何もかもすつかり手に入れた

太鼓や喇叭は僕の新しい

主權に忠誠を誓つて鳴らされる。

(一) 古代ギリシヤ人の樂器キタラ、ギターはこれより出た。

(二) ハルツ山中の一都會、ハインリヒ三世の宮城のあつたとこ

## 牧童

牧童は王様だ

緑の丘はその玉座

その頭上の太陽は

大きな金の王冠だ

その足もとには

やさしい御機嫌とりの羊がねそべつてる

仔牛どもは貴族で

るばりくさつて歩いてる

仔山羊は宮廷俳僮で

笛や鈴をもつた

鳥たちと牝牛どもは

宮中樂人だ

きもちよくひびきうたふそのものどもに

まじつてまた氣持よくざわめくのは

籠つ瀬と椈の木とで

王様はうとくまどろまれる

その間も大臣の

あの犬は統治をしなけりやならぬ

その氣むづかしい吠えこゑは

全版圖にこだまする

ねむさうに若い王様はつぶやかれる

「統治はひどくつらいものだ

あゝ早く家へ歸つて

妃のもとにゐたいものぢや

妃の腕の中では

王のかうべも安樂に休まるのぢや

して彼女のうつくしい眼のなかに

朕のはかりしれぬ國土が存してをる」

## ブロッケン山上て

太陽のうすあかりで  
もう東方は明るくなり

山のいたゞきは霧の海の  
あちらこちらに浮んでゐる

七哩もある靴があれば

あの山々のいたゞきをわたつて

風のやうな速さで

いとしい千の家へかけてゆく

そのまどろんでゐるベッドから

そつととぼりを引きのけて

こつそりキッスしたいそのひたひに

こつそりルビーのやうなその口に

一層そつとさゝやきたい

小さい百合のやうなその耳に、

僕たちふたりは愛してゐる

決してかはりはしないと夢でも思へといふことを

## イルゼ

わたしは王女のイルゼ(二)です

イルゼンシュタインに住んでます

わたしの城へついていらつしやい

しあはせにくらしませう

わたしの清い水で

あなたのおつむを濡らしませう

うれひで病氣のお方

あなたのなやみを忘れさしてあげますわ

わたしの白い腕の中で

わたしの白い胸にもたれて

おやすみになりむかしのお伽噺の

楽しいゆめを見さしてあげますわ

あなたをキッスして抱いてあげますわ

今ではおかくれになつていらつしやる

いとしいハインリヒ皇帝(二)を

抱いてキッスしてあげたやうに

死んだひとは死んだまゝですわ

生きてる者だけが生きてますの

わたしはきれいでさかりです

わたしの心は笑つてふるへてゐます

わたしのお城へ下りていらつしやい

わたし水晶のお城へと

そこではをとめたちや騎士たちが踊り  
お小姓の群がさわいできます

絹のもすそはサラ／＼いふし

鐵の拍車はガチャ／＼いひ

侏儒どもは喇叭吹き太鼓を打ち

胡弓をひき角笛を鳴らします

けれどあなたはわたしを抱きますわ

ハインリヒ皇帝を抱いたやうに――

喇叭が鳴るときには

あの方のお耳をあたしはふさいであげましたわ

(一) オークル川の右支流イルゼ川を堰人化してある、イルゼン

シュタインはその中にそびえる一七五米の花崗岩。

(二) ドイツ皇帝ハインリヒ三世(在位一〇三九―五六)、黒王  
とあだ名された、宏壯な宮城をゴスラールに築き、ドイツ諸侯  
はみなこれに服従した。

## 北 海



一八二五年——一八二六年

## 第一 齣

### 一 戴冠式

歌よ、僕の良い歌よ  
起て、起て、武裝せよ  
喇叭を鳴らせ  
いまや僕の心をすつかり  
女王となつて支配する  
このうら若いをとめを  
楯にのせてくれよ

萬歳、うら若い女王

空の太陽からは

輝く赤い金をとり

おまへの神聖な頭のために

王冠を織りなさう

夜のダイヤモンドをちりばめた

ひら／＼する青絹の空の天井からは

高價な一片を切りとつて

おまへの女王の肩に

戴冠式のマントとしてかけて上げよう

鹿爪らしく着飾つたソネットや

るぼりちらしたテルツイネや鄭重なスマンザ(三)の

廷臣どもをおまへに獻じよう

僕の機智(ソイツ)はおまへの傳騎になり

僕の空想はおまへの空中道化になり  
 僕のユーモアは笑ふ涙を紋章にした  
 式部官になつて仕へるのだ  
 しかし僕みづからは、女王さま  
 僕みづからはおまへのまへに膝づき  
 赤いピロードのクッションの上で忠誠をちかひながら  
 國の先代の女王が  
 憐みたまうて残して下すつた  
 すこしばかりの悟性をば  
 おまへに捧げるよ

(一) 特別な韻の法則のある十一綴音の十四行詩

(二) 三行を一節とする詩の一型

(三) 八行の尾韻のある詩の一型

## 二 たそがれ

蒼い海べに  
 僕は思ひなやんでさびしく坐つてみた

太陽はだん／＼傾いて  
 水に深紅の光線をなげかけ  
 白い大波は

潮におひ立てられて  
 だん／＼ま近く泡立ち鳴つてやつて来る――  
 ふしぎなざわめき、囁き、ヒュー／＼いふ音  
 笑ひ、つぶやき、ためいき、うなり

それまじつて子守唄のやうな安らかな歌ひごゑ――  
 僕はまるで消えうせた傳説を聞くやうな氣がした  
 むかし僕が子供のとき

近所の子供たちから聞かされた

とても古いかあいいお伽噺を聞くやうな、

そのころ僕たちは夏の夕方には

家のかどくちの階段の石に

しづかな物語をきくために

小さな心を聞きたさで一杯にして

物知りたさでかしこさうな眼をしてうづくまつてたの  
 だ

一方おほきな娘たちは

にはひのいゝ花瓶とならんで

窓ぎはにばらのやうな顔をして

ほゝ多みながら月かげに照らされて

向きあつて坐つてみたのだつた

むかし空には女神のルナと

男神のゾルとが

夫婦なかよく輝いてゐて

そのまはりを小さい無邪氣な子供の

星たちが群れてゐた

しかし悪い舌が不和をいひ立て

この高貴な輝く夫婦は

仲たがひになつてわかれた

今では晝間はさびしげに光つて

大空を目の神がめぐつて行く

その尊嚴を

高慢な幸運に恵まれて来た人間どもから

崇拜されさま／＼たゝへられながら

けれど夜には

みなし兒になつた子供たちをつれて

あはれな母の

もえ立つ赤い太陽は

はるかとはくまで波立つてゐる

銀灰色の海に洗んでゆく

着薇いろをした幻影が

そのあとを追うてゆく、すると反対側では

秋らしくかすんだ雲のヴェールから

悲しげな死人のやうに青い顔を

月は突然のぞかせる

そのあとから火花のやうな

星たちが霧をとほして閃き出す

ルナが空をさまよひ  
しづかに悲しげにかげやく  
こひするをとめたちとやさしい詩人とが  
彼女に涙と歌とを捧げる

やさしいルナよ、女らしい氣持で

いつもいつも美しい夫を愛してゐる

夕方ごろになるとふるへながらあをさめて

薄雲のなかからのぞいて見て

別れゆくひとを苦しげに眺め

心配さうに呼ばうとする「いらつしやい

いらつしやい、子供たちがこひしがつてますのよ」

けれど強情な日の神は

妻を見ると

怒りと苦しみに

二倍もまつ赤になつて

満潮で冷たい鰐夫の寢床へ

たのみをきかないで急いで下りてゆく

★ ★

悪いシュック／＼鳴る舌は

このやうに永遠の神々にさへも

苦痛と破壊とをもたらしただ

そして高空の氣の毒な神々は

悶えにもだえてやるせなく

無限の軌道をさまよひ

死ぬことも出来ず

その光りかゞやく不幸を

ひきつれてゆく

僕はしかし人間で

下賤に生れて死を運命づけられてゐるので

ながくは嘆かない

(一) 月の女神。

(二) 日の神。

#### 四 海邊の夜

この夜は星もなくうすら寒い

海はあくびする

海の上には腹ぼひになつて

無恰好な北風が寝そべつてゐる

上機嫌になつたわがまゝな氣むづかし屋のやうに

うめきごゑで低いこゑでこつそりと

水の中へしやべりこみ

たぐさんの馬鹿げた話をかたつて

人ごろしを喜ぶ巨人の話や

ノルウェーの古代のものがたりをかたつて

そしてそれにまじへて遠くこだまさせて笑ひ

エツダの降魔の謠を聲高く叫ぶ

またルーネン(三)の箴言を叫ぶが

これが暗くて魔法の力をもつてゐるので

白い海の子どもたちが

大へん陽氣な氣分になり

高くとび上り歡呼をあげる

そのとき平坦な岸べでは

潮にぬらされた砂の上を

風や波よりなほ荒い

心をもつた異國人が歩いてる

彼の歩いたあとには

火花がとびちり貝殻が鳴る

彼は灰色の外套をしつかとつけて

風の吹くくらやみを早足で歩く――

彼をしつかとみちびくのは

さびしい漁師の小屋からの小さいあかり

誘ふやうにかあいきましたゝいてゐる

父と兄とは漁に出てゐて

小屋にはひとりぼつちで

漁師のむすめが

びつくりするほど美しい漁師のむすめがのこつてゐる  
 爐ばたに坐つて

何かを豫告するやうなあまのこゝろの秘密のうなりを

湯釜の音を聴いてゐる

パチ／＼いふ粗朶を火にくべて

火を吹くと

もえ上る赤い光が

魔法のやうに反射する

花のやうなかほにあたつて

ひとの心を動かすやうに

あらい灰色の肌衣からのぞいてゐる

やさしい白い肩にあたつて

ほつそりした腰のまほりに

下着をしつかとゆはへてる

小さな用心ぶかい手にあたつて

ところが不意に扉がパツとあいて

まつ黒な異國びとが入つて来る

ふるへながら眼のまへに立つ

おどろいた百合ともいふべき

まつ白なほつそりしたむすめをば

その眼は愛の光をおびてながめる

彼は外套を地面に投げすてて

笑つてものをいふ

「ねえ、むすめさん、僕は約束を守つて

やつて来たよ、僕といつしよには

天上の神々が

人間のむすめたちのところへ降りて来て

人間のむすめを抱きしめ

王笏をもつ玉族や

世界の奇蹟なる英雄を

つくり出したまふ古い時代がやつて来たよ

でも、かあいい子よ、もうおどろかなくていい、

僕が神だつていふことを

お願いだからラム酒入りのお茶を沸かしておくれ

そとは寒くつて

こんな夜風にあたる

永遠の神なるわれわれでも凍えるし、

たやすく神々の風邪をひいて

不滅の咳をもらふからね」

(一) 十三世紀頃の北歌神話集。

(二) 古代ゲルマン族の文字、おみくじやト筈に使用された。

## 五 ポセイドン

遠くまでうねつてゐる海のうへに

日光はたはむれてゐた

僕をふるさとへ運んでゆくことになつてゐる

船はとほくの碇泊場でかゞやいてゐた

けれどちやうどいゝ順風が吹かないので

さびしい海岸の

白い砂地に僕はまだじつと坐つてゐた

オディッセーの歌を

古い、しかし永遠に若い歌をよんでゐた

その海の音の聞えて来るページからは

神々の息吹が

よろこばしく立ちのぼつて来た

かゞやかしい人間の春が

ヘラスのかゞやく空が立ちのぼつて来た

僕の氣高い心は忠實に

ラエルテスの息子(二)の彷徨や窮迫についてゆき

女王たちが紫衣を紡いでゐる

宿の爐邊に

彼とともにこまつて坐り

巨人の洞穴やニソフの胸から

彼がうそをついて首尾よく逃げ出すのを助け

常闇にもついでゆき

嵐や難船にもついでゆき

口でいへないほどの苦勞をもともにしのんだ

嘆息しながら僕はいつた「いぢわるいボセイドン(三)め  
おまへの怒りはおそろしい  
僕自身の歸郷のことも  
心配になつて来る」

かういふやいなや

海は泡立ち

白い波のなから

海の神の蘆の花環をつけた頭があらはれ

あざけるやうに叫んだ

「小詩人よ、心配するな

おまへのあはれな小舟なぞ

わしはちつとも害しようとは思はない

危険に揺りすぎで

おまへのかあいい生命を脅かさうとは思はない

小詩人よ、おまへはわしを怒らせなかつたからな

プリアモス(四)の聖なる誓ひの

塔ひとつをも損なはなかつたし

わしのむすこのポリュフェエモスの眼の(五)

睫毛ひとつをもこがさなかつたし

知恵の女神パラス・アテネが(六)

援助しておまへを守つたことなぞ無いのだからな」

かうボセイドンは叫んで

海に沈んでしまつた

この荒つばい海負らしいウイットに

不細工な傳法女のアンフィトリトや(七)

ネレウスのばかなむすめたちが(八)

水の底で笑つた

(一) ホーマーの敘事詩、トロイ戦争の英雄オディッセーのこと  
をうたふ。

(二) オディッセーのこと、父のラエルテスはイタカの王。以下  
にはオディッセーの冒険をさまざまに引いてある。

(三) 海の神、ローマ神話のネプチューン。

(四) トロイの王、トロイ戦争の原因なるパリスの父、海の神は  
ギリシヤ方だつた。

(五) オディッセーたちが歸國の途中に出會つてとちこめられる羽  
穴の主なる一つ眼の巨人。

(六) パラスもアテネもともに知恵の女神ミネルヴァのギリシヤ名、  
ウイーナスがトロイ方であつたに對し、彼女はジュノー(ヘラ)。

とともにギリシヤ人の味方をした。

(七) 海の神ボセイドンの妻、傳法女 (Eriochthys) は魚の妻と  
ふ意味と兩股かけてある。

(八) 海の女神たちネレイドの父はネレウス、ネレイドのひと  
りがアンフィトリト。

## 六 宣 言

夕方でくらくらなつて来て

潮はます／＼あれ狂つた

僕は磯べに坐つて

波の白いダンスをながめてゐた

僕の胸は海のやうにふくれ上り

おまへの美しいすがたへの

ふかい郷愁が僕のむねをとらへてしまつた

そのすがたはどこへ行つても僕のまはりに現はれ

どこへ行つても僕を呼ぶ

どこへ行つても、どこへ行つても

風のざわめきにも、海のとどろきにも

僕自身の胸の吐息からも呼ぶ

細い蘆の莖で僕は砂に書いた

「アグネス汝をわれ愛す」

けれど意地の悪い波が

この甘い告白のうへにやつて来て

すつかり消してしまつた

折れやすい蘆よ、とびちる砂よ

とける波よ、おまへたちを僕はもう信用しない

空は一層くらくらなり、僕の胸は一層あらくなる

強い手でノルウェーの森林から

僕は一番大きい樅の木を引きぬいて

これをエトナ(トナ)のもえる火口にひたし

こんな火を含んだ

巨人の筆で

僕はくらい天穹に書いてやる  
「アグネス汝をわれ愛す」

かうすれば毎晩、大空には  
永劫の筆蹟がもえ上り  
あとから生れて来る子孫たちはすべて  
よろこびの聲あげながら天の言葉を讀まう  
「アグネス汝をわれ愛す」

※ ミシリー島にある活火山。

## 七 船室の夜

海は眞珠をもつてゐる  
空は星をもつてゐる  
しかし僕の心は  
僕の心は戀をもつてゐる

海と空とは大きい  
しかし僕の心はもつと大きい  
そして眞珠や星より美しく  
僕の戀は光りかゞやいてる

ちひさいかあいいをとめよ  
僕の大きな胸のところへおいで  
僕の胸と海と空とは  
本當の戀のために死ぬんだからね

★ ★

美しい星のかゞやいてる  
青いおほぞらに  
僕の唇をおしつけない  
はげしく押しつけてあらしのやうに泣きたい  
あの星は僕のいとしいひとの  
まなこで千様に、

きらめいて青い大空から  
やさしげに挨拶する

青い大空へ  
愛するひとのまなこへ  
信心ぶかく僕は手をあげて  
ねがひ哀願する

「きれいな眼よ、慈悲の光よ  
お、僕の魂を幸福にしてください  
僕を死なして下さい、そのかはり  
そなたと空全體とを手に入れさせて下さい」

★ ★

海 高みの天の眼からは  
北 闇をとほしてふるへながら  
金の火花が落ちて来る  
215 僕の魂は愛のためにひろくひろくなる

お、高みの天の眼よ  
僕の魂のなかで泣き出しておくれ  
明るい星のなみだで  
僕の魂が洪水になるやうに

★ ★

海の波にゆられ  
夢みるやうなおもひにゆられ  
僕はしづかに船室で  
くらい隅のベッドに横たはつてる

開いてゐる船口からは  
たかみに明るい星が見える  
僕のいとしいひとの  
いとしい甘い眼が見える

このいとしい甘い眼は  
僕の頭上で番してる

ひらめき目くばせする  
青いおほぞらから

青いおほぞらを

僕はたのしく永らくながめてゐる  
白い霧のヴェールが  
いとしい眼をかくすまで

★ ★

僕がゆめみる頭をよせかけてゐる  
板の舷側には

荒々しい波が打ちよせる

ざわ／＼いひ僕の耳に

こつそりとつぶやく

「馬鹿なやつよ

おまへの腕は短くて天は廣大だ

空の星は金の釘で

しつかりうちつけてある——

無駄なあこがれ、むだな吐息  
一等いゝのは寝ることだ！

★ ★

しづかな白い雪で見わたすかぎりおほはれた  
廣い荒野をゆめに見た

僕は白い雪の下に埋められて

さびしい冷たい死の眠りについてゐた

しかし上の方の暗い空からは

星のひとみが僕の墓を見下してゐた

あまい眼だ、勝ちほこつたやうに

しづかに樂しげに、しかし愛でみちてかゝやいてゐた

## 八 嵐

嵐は吹き荒れて

波をうちたたく

僕の願ひも訴へも申妻がない

僕の叫びこゑはあれくるふ風に

風の戦鬨のさわぎにかき消される

音のきちがひ病院のやうに

吼え、吹き、爆音を立て怒號する

そしてそれにまじつて

さそひの堅琴の音が聞きとれる

心をとかずやうに心をひきさくやうに——

僕はその聲におほえがある

はるか遠くスコットランドの岩磯には

荒れる海の上へと

灰色の小城がそびえてゐる

その高い弓形になつた窓きはに

か弱いすきとほるやうな大理石のやうに青い

ひとりのきれいな病氣の女が立つてゐて

堅琴を弾いてゐたつてゐる

風はその長いまき毛をとほりぬけ

海  
帆柱で嘴をみがき

北  
おまへの娘の名聲をたゞへた心臓を

おもちやにえらび出した心臓を

よだれをたらして欲しがつてゐる

波は怒つて泡立つて反抗し

高く上り

白い波の山がはげしくそびえる

小舟は急いで

骨折つてよちのほり

たちまち墜落する

黒い大口あげた潮の淵へ——

おゝ、海よ、

美の母よ、泡から生れたもの(こ)の母よ

戀の祖母よ、僕を宥して下さいよ

もう死人を嗅ぎつけて

白い幽霊のやうな囀がとんで来て

帆柱で嘴をみがき

廣いあらしの風をわたつて  
その陰氣な歌をもつて來るのだ

(一) 美と愛の女神ヴィーナス(ギリシヤ名アフロディテ)はヂ  
ピターとディオネとの間に生れ九が海の淵から生れたといふ傳  
説もつてゐる。  
(二) 戀の神キューピッド(ギリシヤ名エロス)はヴィーナスのむ  
すこである。

### 九 風 ぎ

風ぎだ、太陽は

光線を水面に投げてる

波動する寶石に

船はみどりの切目をつけてゆく

舵のところには水夫長が

腹ばひにねて低くいびきを立ててる

帆柱のところには帆をつくるつて

タールまみれのボーイがうづくまつてゐる

そのよこれた頬は赤く燃え

大きな口のあたりはかなしげにピク／＼する

大きな美しい雨の眼は

かなしげないろをうかべてゐる

船長が彼のまへに立つて

どなり悪態をつき叱つたからだ

「悪太郎め、きさまはおれの樽の

鮓を一匹ぬすんだな」

風ぎだ、波からは

かしこい魚ども浮び出る

頭を日光であたゝめて

しつぽで愉快に水をはねとばす

しかし空から鷗が

魚めがけてとび下り

すばやいことやつたのを嘴にくはへて

青空へまた飛び上る

### 一〇 海の幽靈

僕はしかし舷側にねころんで

ゆめ見るやうな眼をして

鏡のやうに澄んだ水を眺め

だん／＼ふかく見て行つた――

海底まで見ると

はじめは朦朧と霧のやうだったが

だん／＼物のけじめがはつきりして

教會の圓屋根や塔が見えて來て

とう／＼市全部がはつきり見えて來た

古風なオランダ風で

人の住んでゐる市が

考へぶかさうな人々が黒いマントを着て

白い（カウチ）蓑（カウチ）首衣（カウチ）と榮譽の鎖をつけて

長い劍をつるし長い顔をして

人の一杯ゐる市場を通りぬけて

皇帝の石像が

王笏と劍をもつて守護してゐる

階段の高い市役所へと歩いてゆく

そこから近くの長い家ならびのまへを

鏡のやうに光つた窓と

ピラミッド形に刈りこんだ菩提樹のところを

絹すれの音のするをとめたちが

ほつそりしたからだをして花のかんばせを

黒い帽子とそこからはみ出た金髪とに

行儀よくかこまして散歩してゐる

スベインふうのみなりをした派手な若者たちは

そりかへつてゆきかひうなづいて會釋する

年輩の婦人たちは

茶いろの忘れられたやうな服を着て

手には讚美歌集と數珠とをもつて



大きな伽藍へ  
鏡のひびきと鳴るオルガンの  
音にこそはれて  
ちよこ／＼歩きで急ぐ

そのはるかな物音の秘密にみちたふるへが  
僕自身をとらへこんだ

はてしらぬあこがれ、深い憂愁が

僕の心にしのがび入った

まだ殆ど癒つてない僕の心に――

細い傷口が

愛する唇にキッスされ

またも出血しだしたやうな感じがする――

熱いまつ赤な滴りが

長くゆつくりとした／＼りおちる

深い海底の市の

古い家の上に

あの古い破風の高くそびえた家の上に――

この家は物かなしげに人かけもなく  
たゞ下の窓ぎはに

頭を腕にもたらせて

ひとりのをとめが坐つてるばかり

あはれなみすてられた子供のやうに

僕はおまへを知つてるよ、あはれなみすてられた子供

それぢやこんなに深く、海底ふかく

子供のやうな氣まぐれから

おまへは僕から身を隠したのか

そしてもう上つて來られなくなつて

みしらぬ人のところでないか

何百年も坐つてゐるんだね

その間、僕の方は胸を悲しみで一杯にして

世界ぢゆうおまへを探しまはり

いつもいつもおまへを探してた

いつも愛するおまへを

早く見失つたおまへを

とう／＼見つけ出したおまへを――

僕はおまへを見つけた、またもおまへの

かあいい顔を見つけた

かしこさうな誠實な眼を見つけた

かあいいほゝゑみをみを見つけた――

もう二度とおまへを手ばなさないぞ

僕はおまへのところへ降りてゆく

両手をひろげて

おまへの胸めがけて暎ちる――

折しもそのとき船長が

僕の足をつかまへて

舷側から引っぱり

腹立たしさうに笑ひながら叫ぶのだつた

「ドクトル、氣でもおくるひになつたのか」

氣ちがひじみたゆめよ

おまへは自分の海底にのこつてをれ

むかし僕の胸を幾晩も

嘘の幸福でなやまして

いまは海の幽霊になつて

白晝も僕を脅かすゆめよ――

永遠に海底にのこつてをれ

僕の苦痛と罪業とはすべて

やつぱり投げこんでやるからね

僕の頭のまはりで永らく鳴つてゐた

愚行の鈴つき頭巾も

僕の魂に永いことからみついてゐた

偽善の

冷たいキラキラ光る蛇の皮も

神を否定し天使を否定する

病める魂も

不幸な魂も投げこんでやるからわ――

ホイホ、ホイホ、風が出た

帆を揚げる、帆はためきふくらむ  
 凧でくさつた水面を  
 舟は急ぎ  
 解放された魂は歡呼する

一一 平和

白い雲にとりかこまれて  
 空高く太陽はかゝつてゐた  
 海はしづかで  
 考へにふけりながら僕は臆にゐた  
 ゆめ見こち考へにふけりながら――  
 そして半ば目覺めなればまどろみながら  
 世界の救ひ主キリストを見た  
 波うつ白い衣をつけて  
 巨人のやうな大ききで  
 陸と海とのうへをさすらつてゆかれた  
 そのかうべは天にそびえ

陸と海とのうへに

祝福しながら兩手をさしのべられた  
 胸の中にある心臓として

赤いもえ立つ太陽を  
 もつておいでだつた

この赤いもえ立つ太陽の心臓は  
 めぐみの光線と

恵みふかいやさしい心の光を

海と山とを

照らしあたゝめてそゝいでゐた

鐘の音は莊嚴に

かなたごなたにたゞよひ

すべりゆく船は薔薇の紐につなされた

白鳥のやうにすみ

人間の住んでゐる、高い塔のある

高く聳えた市の緑の岸に

奏樂しながら到着した

おゝ平和の奇蹟よ、市はなんとしづかだ  
 おしやべりで不安ななりはひの  
 陰鬱なきわめきもしづまり  
 清潔なごたまする街路には  
 白い着物を着た  
 棕櫚の枝をもつた人たちが歩いてゐて  
 ふたりがゆきあふと  
 意味深長な眼つきで顔見あはせ  
 愛と甘いあきらめとに身ふるひしながら  
 たがひに額にキッスしあひ  
 たのしくなだめようと赤い血を  
 下の方へそゝいでゐる  
 救ひ主の心臓なる太陽を  
 見上げて

三倍も幸福になつてことばを發する

「かたじけなやイエス・キリストさま」

## 第二齣

## 一 海の挨拶

タラッタ、タラッタ

永遠なる海よ、ごきげんよう

歎びにをどる心から

一萬回とごきげんようをいはせろ

ちやうどむかし一萬人のギリシヤ人の心臓が

誰知らぬ者のないギリシヤ人の心臓が

戦ひに利なく故國をこひこがれながら

おまへに挨拶したと同じやうに

潮は波立ち

荒れ狂つた

たはむれあそぶばら色の光を

太陽に急いでそゝぎかけ

おどかされて飛び立つた鷗のむれは

高聲で叫んで飛び去つてゆく

馬は足掻き、楯は鳴り

凱歌のやうにひびきわたる

「タラッタ、タラッタ」

永遠なる海よ、ごきげんよう

おまへの水は故郷のことはを思ひ出させるし

おまへの湧き立つ波間には

子供のころのゆめがかゝやいてる

むかしの思ひ出があらためて

好きな立派なおもちやや

びか／＼したクリスマススの贈物や

海の底のすきとほる水晶の家に

おまへが秘密にしまつてゐる

紅い珊瑚樹や金の魚たちや

眞珠や派手ないろの貝殻のことを語る

おゝこの荒涼たる他國でいかに僕がやつれたことか

植物學者のブリキの胸亂の中の

しをれた花のやうに

胸の中で僕の心臓は横たはつてゐる

一冬ちゆう病人として

くらい病室にねてゐたのが

突然そこをはなれて

太陽に目をさまされた青玉の春にあつて

目がくらむほど照らされて

白い花の咲く木々がさや／＼鳴り

若い花は派手な色の

かぐはしい眼でながめ

匂ひざわめき息つき笑ひ

青空で小鳥どもが歌ふといつた氣持——

タラッタ、タラッタ

勇ましい退却者の胸よ

どんなに度々、北方の續族の

女どもがおまへを追撃したことか

大きな勝ちほこつた眼から

彼女どもは燃える矢を放つた

ゆがめ細工をしたことばで

彼女どもは僕の胸を割くとおどかした

楔形文字の手紙で僕の

あはれな臍痺した額を破砕した——

僕は楯で防いだが無駄だった

矢はシュッ／＼と鳴り打ちこみはビシヤッと來た

北方の續族の女どもに

僕は海まで追ひつめられた——  
 そして僕は自由に息しながら挨拶する  
 愛する救つてくれた海に  
 タラッタ、タラッタ

※ クセノフオンのアナバシスからの故事を以下に引く、アナバシスはクセノフオンがスパルタ軍に加はつてペルシャに遠征、戦ひ利なく、いはゆる「一萬人の退却」を行つた歸來を記す。

## 二 嵐

嵐は海のうへに暗鬱に横たはり  
 黒い雲の壁をとほして  
 ギザ／＼のいなづまが閃く  
 クロニオン<sup>(二)</sup>の頭から出るウイットのやうに  
 さつと光つてさつと消えてゆく  
 荒涼たる波うつ水のうへを  
 雷はころがつてゆく  
 エレクテウスの美しい牝駒に

ポレアス<sup>(三)</sup>自身が生ませた

白い波の馬ははねる

海鳥は氣づかほしげにはばたく

カロン<sup>(四)</sup>が夜の渡舟をこぼんだ

三途の川のほとりの亡者どものやうに

あはれな飄軽な小舟は

最悪のダンスを踊つてゆく

エオルス<sup>(五)</sup>は一番敏捷なやつらをよこして

このたのしい輪舞に荒々しく演奏させる

笛を吹くやつがあり喇叭吹くやつがあり

三人目は暗鬱なブルムバスを弾く——

水夫はよろめきながら舳<sup>はな</sup>に立ち

舟のふるへる魂なる

羅針盤を氣づかほしげに見てゐる

そして両手をあげて天に祈る

「お、救けて下さい、カストル<sup>(六)</sup>よ、騎馬の英雄よ

ポリュククスよ、拳闘の戦士よ」

希望と戀と、みんなこはれてしまつた  
 そして僕自身は  
 海が怒つて投げ出した死骸のやうに  
 岸べに横たはつて  
 荒涼たる不毛の岸べに。  
 僕のみまへには水の沙漠が波打ち

## 三 難船したもの

- (一) クロノスの子、すなはちギリシャ・ローマ神話の最高神ジュピター(ギリシャ名ゼウス)、雷電をその武器とする。  
 (二) アテナの王だつたと稱せられる。北風の神ボレアスはその姪オレイテヤを討つて妃とし、二人の子を生ませしめた。  
 (三) 北風の神。  
 (四) ギリシャ神話で三途の川の渡守。  
 (五) 東風の神。  
 (六) レダとデュビターの化身なら白鳥の生んだ双生児カストルとポリュククスとはアルゴ號の遠征に加はり、暴風にあつたとさ、星が二人の頭上に現はれて、風が止んだといふので、航海者や漁師の守護神とされる。カストルは調馬の名手、ポリュククスは拳闘の名手。

僕のうしろには悲哀と窮乏とのみがあり

僕のうへを雲たちがうごいてる

これは風の無形の灰色のむすめどもで

霧の手桶で海から

水を汲んで

さも苦しうに引きすつて

また海の中へあけてしまふ

悲しく退屈な仕事だ

僕自身の生活のやうに無駄だ

波はつぶやき、鷗はさげふ

むかしの思ひ出がかき立てられる

わすれたゆめ、消え去つた面影が

苦しき多くあまいのが浮び上つてくる

北國にはひとりのをんながある

美しいをんなだ、女王のやうに美しい

ほつそりした扁柏<sup>ヒノキ</sup>のやうなからだを

色氣のある白い服がおほつてゐる  
ふさ／＼した黒髪は  
たのしい夜のやうで  
編んでつかれた頭からこぼれおちて  
甘い蒼い顔のまはりに  
ゆめのやうに甘くちどれてる  
甘い蒼い顔からは  
大きい強い眼が輝き出る  
まるで黒い太陽のやうに

おゝ、黒い太陽よ、なんと幾度も

憫殺されて僕はおまへの

荒々しい靈氣を吹きこむほのほを吸ひこんだことか  
そして立つて火に酔つてよろめいたことか——

そのときこの引きしまつたほこらしげな唇には

鳩のやうにやさしいほゝゑみがかひ

この引きしまつたほこらしげな唇は

月光のやうに甘い、薔薇のかほりのやうにやさしい

ことばを吐いたものだ——  
そして僕の魂はたかまつて  
鴛のやうに天へと飛んだものだ

波よ、鷗よ、だまれ

みんな行つてしまつた、幸運も希望も

希望も戀も行つてしまつた

わびしい難船したものは、僕は地べたに横たはる

そして僕のほてる顔を

ぬれた砂におしつける

#### 四 落 日

美しい太陽は

しづかに海に沈んでしまつた

波うつ水はもう

暗い夜のいろになり

夕陽だけが金の光をそのうへに撒いてゐる

ざわめく潮の力は

岸に白波を押しつけ

波はたのしげにせはしく躍る

羊飼の青年が歌うたひながら

夕方に家へつれかへる

毛の房々した千羊のむれのやうに

「なんと太陽は美しいんだらう」

長い沈黙のあとで友はかういつた

僕といつしよに磯べをさまようて

なかなば笑談のやうになかなば悲しげに

僕に明言した「太陽は

都合から年よりの海の神と

結婚した美しい女なんだ

晝ちゆうは彼女はいそいと

高い空を緋衣をよそほうて

ダイヤモンドをちりばめて

下界の生物すべてから

こよなく愛され驚嘆せられて

下界の生物すべてをその眼の光と

熱とで喜ばせながら逍遙してゐる

しかし夜は情なくも無理じひにされて

年よりの夫の荒くれた腕へ

ぬれた家へと

またち歸る」

「ほんとうだとも——友は附けくは

笑つて吐息してまた笑つて——

「もつとも情愛のふかい夫婦生活を海底

眠つてるか喧嘩してるかどつちかだ

だから上の方で海が荒れるのだ

水夫は波音のなかに聞く

老人が妻を叱るのを

「宇宙のまんまるなパンパンめ

光りかゞやく姦婦め

おまへは晝ちゆう他人のために燃え

夜おれのためとなら凍えて疲れてる」  
かうした床談義のあと

もつとものことだが、傲慢な太陽は  
涙にくれて悲しみを訴へ

あはれさをくどくどと訴へるので

海の神は突然とやけくそになつて床からとび出し  
急いで海面に浮き上る

風にあたつて正氣をつけようと

だから僕は昨夜まのあたり

彼が胸まで海からあらはしてゐるのを見たよ

黄いろいフランネルのジャケツを着て

百合のやうに白いナイトキャップをかぶり

しほれた顔をしてをつた」

### 五 海の女神の歌

夕方になつて海邊はうすあをくなつた

さびしげにさびしげな心を抱いて

荒涼たる岸邊にひとりの男が坐り

廣大な死のやうに冷たい蒼穹を

死のやうに冷たい眼で見上げてゐる

廣大な波立つ海をも眺めてゐる——

廣大な波立つ海のうちへ

その吐息は風の帆船のやうに行き

かなしげにまた歸つて来る

その錨泊しようと思つてた

心がしつかと閉ざされてゐたのに氣づいて——

彼の高いうめきに白い鷗どもは

砂地の巢から追つ拂はれて

群をなしてそのまはりをとびまはると

彼は笑つてことばをいひかける

「黒い足をした鳥よ

白い翼で海の上をとぶものよ

曲つたくちばしで海水を飲むものよ

魚油くさいあざらしの肉を食ふものよ

おまへらの生活はたべものと同じく苦いね

僕はしかし幸せもので甘いものばかり味はつて

僕は薔薇の甘いにはひや

月光を餌とするナイチンゲールの花嫁のにはひを味はつ  
てる

かき立てたクリーム入りの

一層甘い砂糖饅頭を味はつて

また一番あまいものを味はつて

あまい戀とあまい戀ひ慕はれと

彼女は僕を愛してる、彼女は僕を愛してる、美しいをと

めだ

いまごろは家のバルコニにたゞずんで

街路をたそがれに眺めやり

耳をすませて僕を待ちこがれてる——本當だとも

見張つた甲斐もなく嘆息し

嘆息しながら庭に下り立つて

花の香と月影の中をさまよつて

花と話して花に物語つて

愛人の僕がどんなにかあいくて

どんなに愛するに値してるか——本當だとも

それからベッドで、眠つて、ゆめに

たのしく僕の可愛いがたがちらちらする

朝でも朝食のとき

ピカ／＼するバターつきパンに

僕のほくろむ面影が眼にうかび

愛のためペロリと食つちまふ——本當だとも」

このやうに彼は自慢に自慢すると

その間かもめは冷酷に

皮肉に笑ふやうに叫び啼く

夕方の霧はのぼつて来る

朧いろをした雲からは

枯草いろの月が氣味わるくのぞき出る

海の波は高くさわめいて

さ、やく風のやうにかなしげに  
高くさわめく海の底から  
美しい思ひやりのある水の女神の  
海の女神の歌がひびいて来る  
なかでも銀の色をしたペレウスの妃の  
かあい醜がよくわかつたが  
みなため息してうたふのだつた

「お、愚かもの自慢をするお馬鹿さん  
苦勞にくろしむものよ

おまへの希望にみな殺された

心のたはむれる子供たちはみな殺された

そしてあゝ、おまへの心はニオベのやうに

悲しみのため石になつた

おまへの頭は夜になつて

狂氣のいなづまが閃いてとほる

だにおまへは苦しさのあまり自慢する

おゝ、愚かもの、自慢をするお馬鹿さん

おまへは御先祖と同じく強情だわね

天の火を神々からぬすんで

人間に與へ、兀鷹に苦しめられ

巖にしばられて

オリムポスにさからひさからひうめくので

あたしたちさへ深い海底で聞きとつて

慰めの歌をもつて行つてやつたあの巨人のやうに

おゝ、愚かもの、自慢をするお馬鹿さん

おまへはもつと無力なんだから

神々をあがめて

不幸の重荷を辛抱してになひ

アトラス自身が忍耐心を失つて

重い世界を永遠のくらやみやみへ

肩から投げ出すときまで

永くながく辛抱してになつてゐるのが分別だよ」

美しい思ひやりのある水の女神の

海の女神の歌はこのやうにきこえた

ひるまのやうに明るく、しかしぼんやりと魔法をかけ  
られて

海は廣い砂のむかうに横たはつてゐる

そして淡青色の星のない空には

白い雲がたゞよつてゐる

かゞやく大理石の

巨大な神々の像のやうに

いや、決して、雲ぢやない

あれは彼等自身だ、希臘の神々だ

かつては楽しく世界を支配してゐたが

いまでは追放され死滅して

巨大な幽霊になつて

ま夜なかの空を行つてるのだ

おどろいてふしぎに眩惑されて

僕はこの空のパンテオンを見た

いかめしくもだしておそろしげに

一層聲高の波の音がかき消すまで――

雲のうしろへ月がかくれ

海は大きく口をあげたが

僕はまだずつとくらがりに坐つて泣いてゐた

(一) ネレウスとドリスの子でネプチューンの妻アンフィトリーテ  
やテーテイスなど、ネレイドと總稱される。

(二) テーテイスはテッサリヤ王メレウスの妃となりアキレスを産  
んだ。

(三) テーベの女王でラトナ女神を侮辱して子供すべてを殺され、  
悲しみのため化石となる。

(四) 神々の住家なる山。

(五) 人類に文明と技術を教へテ、ピタルからコーカサスの山に上  
つたが、兀鷹に心臓をくはれてゐる。

(六) アトラスはペルセウスにメドゥサの首を見せられ化石となり  
宇宙を支へてゐる。

## 六 希臘の神々

満開の月よ、おまへの光で

海は流れる金のやうにかじやいてゐる

この巨大な手がたは動いてゐた

あすこの男神は天の王者のクロニオンだ

名高いオリンポスを震撼させた捲髪

頭の髪は雪のやうにまつ白だ

彼は手に消えた電光をもつてゐる

その顔には不幸と痛恨とが表はれてゐる

しかしやはりむかしの誇りが表はれてゐる

お、ゼウスよ、おまへが男の兒たちや

ニンフや牛百頭の供物を莊嚴に

喜んでゐたときが最良の時だつた

しかし神々でさへ永遠に支配はできないのだ

若い者が老者を追放する

あたかもおまへ自身がむかし老いたる父を

タイタン族の伯父たちを追放したやうに

ジュピター近親殺害者よ

おまへも僕にはわかる、高慢なジュノーよ

おまへの嫉妬ぶかい心配にもかゝはらず

他の女神が笏を獲てしまひ

おまへはもう天の女王ではなくなつた

おまへの大きな眼はすわつてゐて

おまへの百合の腕は力なく

神を生んだ處女と

奇蹟を行ふ神の子に

おまへの復讐は決してきかないぞ

おまへも僕にはわかる、パラス・アテネよ

楯と知慧とでおまへは

神々の滅亡を防げなかつたのか

おまへも僕にはわかる、アフロディテよ

むかしは金色だつたがいまは銀いろだね

いまだにおまへを帯の妖艶が飾つてゐるが

おまへの美を見ると内心おそろしくなる

おまへの施し好きだからだが僕にめぐまれれば

他の英雄たちと同じく僕はおそれ死ぬだらう――

死骸の女神としておまへは見える

ヴェーヌス・ビテイナよ

あすこのおそろしいアレクサへも

死せる夜にさまよふ亡霊よ

風をおそれる霧のやうに弱いものよ――

そしておまへたちに克つた神々が

新しく支障してゐる淺ましい神々が

卑下の羊の皮を着た意地わるきものどもが

いかに卑怯でくだらないかを考へると――

お、このとき陰鬱な怒りが身をおそふ

僕は新しい神殿をうちこわしたい

古い神々よ、おまへたちのために闘ひたい

おまへたちのために、おまへたちの善き甘露のごとき

權利のために

そしてふたたび建てられた犠牲の煙の立つ

高い祭壇のまへに

僕自身ひざまづき祈りたい

訴へながら手をばさし上げた――

なぜなら、古い神々よ、おまへたちはいつも

むかし人間のあらそひに

見すてられた神々よ

この巨大な手がたは動いてゐた

あすこの男神は天の王者のクロニオンだ

名高いオリンポスを震撼させた捲髪

頭の髪は雪のやうにまつ白だ

彼は手に消えた電光をもつてゐる

その顔には不幸と痛恨とが表はれてゐる

しかしやはりむかしの誇りが表はれてゐる

お、ゼウスよ、おまへが男の兒たちや

ニンフや牛百頭の供物を莊嚴に

喜んでゐたときが最良の時だつた

しかし神々でさへ永遠に支配はできないのだ

若い者が老者を追放する

あたかもおまへ自身がむかし老いたる父を

タイタン族の伯父たちを追放したやうに

ジュピター近親殺害者よ

おまへも僕にはわかる、高慢なジュノーよ

おまへの嫉妬ぶかい心配にもかゝはらず

他の女神が笏を獲てしまひ

おまへはもう天の女王ではなくなつた

おまへの大きな眼はすわつてゐて

おまへの百合の腕は力なく

神を生んだ處女と

奇蹟を行ふ神の子に

おまへの復讐は決してきかないぞ

おまへも僕にはわかる、パラス・アテネよ

楯と知慧とでおまへは

神々の滅亡を防げなかつたのか

おまへも僕にはわかる、アフロディテよ

むかしは金色だつたがいまは銀いろだね

いまだにおまへを帯の妖艶が飾つてゐるが

おまへの美を見ると内心おそろしくなる

おまへの施し好きだからだが僕にめぐまれれば

他の英雄たちと同じく僕はおそれ死ぬだらう――

死骸の女神としておまへは見える

ヴェーヌス・ビテイナよ

あすこのおそろしいアレクサへも

死せる夜にさまよふ亡霊よ

風をおそれる霧のやうに弱いものよ――

そしておまへたちに克つた神々が

新しく支障してゐる淺ましい神々が

卑下の羊の皮を着た意地わるきものどもが

いかに卑怯でくだらないかを考へると――

お、このとき陰鬱な怒りが身をおそふ

僕は新しい神殿をうちこわしたい

古い神々よ、おまへたちのために闘ひたい

おまへたちのために、おまへたちの善き甘露のごとき

權利のために

そしてふたたび建てられた犠牲の煙の立つ

高い祭壇のまへに

僕自身ひざまづき祈りたい

訴へながら手をばさし上げた――

なぜなら、古い神々よ、おまへたちはいつも

むかし人間のあらそひに



勝利者の側にはかり立つてみたとはいつても人間はおまへたちより寛大であるからそして神々の戦ひにはいまや僕は打ち負かされた神々の側に立つ

★ ★

から僕はいつた、すると空の青い雲のすがたは目につくほど赤くなり死にゆくもののやうに僕をながめくるしげにかじやいて急に消えた月は同じく雲のうしろに身をかくし雲は暗くなつて近づいた海は高くまでどよみを上げ空には勝ちほこつて永遠の星たちがあらはれた

(一) ギリシヤ語、神々を祀る神殿。

(二) ゼウスの父クロノス。

(三) 神々の住家なるテッサリアの山。

「お、僕に生の謎を解いておくれ

この悩みの多い遠いむかしからの謎を

この謎ではもう多くの頭が思ひわづらつた

象形文字をしるした帽子かぶつた頭や

ターバン巻いた頭や牧師の帽子着た頭や

髷つけた頭やそのほかいろ／＼の

かあいさうな汗をかいた人間の頭どもが――

ねえ、人間とはどういふことだ

どこから来たのだ、どこへゆくのだ

空の金の星には誰が住んでるんだ」

波は永劫のつばやきをするし

風は吹き雲は過ぎ

星は無頓着に冷たく光る

そして馬鹿は返答を待つてゐる

ハ 不死鳥<sup>(二)</sup>

(四) 神々と人間の父ジュピター。

(五) 混沌から生れた地と天の子供である種族、その一人なるサターン(クロノス)の子ジュピター(ゼウス)に征服される。アトラスもその一人。

(六) ジュピターの妻。

(七) ムリアとキリスト。

(八) ジュピターの娘で知恵の女神ミネルヴァ。

(九) ローマではヴィーナス、愛と美の女神。

(一〇) 拉丁語で死の女神の神。

(一一) 軍神マーズのギリシヤ名。

(一二) 弓と鎌言と許婚の神。

(一三) 拉丁名ヴァカカン、火の神、生れながらに跛だつたので母のジュノーによつて天上から送り出された。

(一四) ギリシヤで青春の女神、神々の酌女の役をしたもの種。

## 七 疑問

海邊に、荒涼たる夜の海邊に

一人の青年が坐つてゐる

胸は愁ひでいっぱい、頭は疑惑でいっぱい

悲しげなくちびるで波に問ふ

一羽の鳥が西の方から飛んで来て

東の方へ飛んで行く

香料の木が匂ひ成長し

棕櫚の木がそよ泉が涼しがらす

南の園のふるさとへ――

飛びゆきながらふしぎな鳥は歌ふ

「彼女は彼を愛してる、彼女は彼を愛してる

小さな胸にその像を抱いてゐる

あまくこつそりひめて抱いてゐる

なぜだかわけは自分でも知らない

ただゆめで彼があらはれると

彼女はせがんで泣いてその手にキッスし

その名を呼ぶ

呼んでゐるうちに目をさましてびつくりする

びつくりしてわれとわが眼をこする――

彼女は彼を愛してゐる、彼女は彼を愛してゐる」

★ ★

高い甲板の帆柱にもたれて

僕は立つてゐて鳥の歌を聞いてゐた

銀いろのたてがみもつた黒緑の馬のやうに

白いさゝ波は躍つてゐた

きら／＼する帆をあげて白鳥の列のやうに

ヘルゴランド人は舟をやつた

北海の果敢なる遊牧民よ

上には永遠の青空に

白い雲が風に飛び

永遠の太陽

火のやうに咲く空の薔薇は盛装して

うれしげに海にすがたをうつしてゐた――

空と海と僕自身の心は  
響應して鳴つた

「彼女は彼を愛してゐる、彼女は彼を愛してゐる」

(一) ギリシャ神話で焼かれるとその灰よりまた生れかへるとい  
はれる鳥  
(二) 北海の二鳥

九 船 酔

灰色の午後の雲は

低く海のうへに垂れてゐる

海はくろく雲にむかつて逆巻き

その中間を船は走つてゐる

船酔ひしながら僕はあひかはらずマストにもたれて坐

り

自分自身のことを考へてゐる

かのロト親父がすでに幸せをさま／＼と

味はひすぎてから不幸になつたときに

なした太古の灰色の考へを

それにまじつてむかしの物語のことをも考へる  
十字架のしるしをつけた昔の巡禮が

身をよこたへようとし

また急に荒い海の漣が

白い連波になつて落ちて来て

僕自身を泡でびしよぬれにする

この揺れと中ぶらりと振動とは

たまらない

僕の眼はドイツの岸を

見張つてさがすが駄目だ、あゝ、水ばかり

またもや水だ、動く水だ

冬のさすらひびとが夕方に

暖い心のこもつた茶一杯をあこがれるやうに

いまや僕の心はおまへをあこがれる

僕のドイツの故國よ

たとへおまへの氣持のいゝ地面が

いつも狂氣や驍騎兵や悪詩や  
生ぬるい薄つべらな小論文でおほはれてようと

あらしの航海で聖母の

慰めたまふ像に信心ぶかくキッスした話を

病める騎士がこんな海の災難で

その貴婦人の愛するハンカチを

唇につけて同じく慰められた話を――

僕はしかし坐つて氣むづかしく

古い餅を、ふつか酔ひとくそ災難の

鹽からいなくさめ手を囁んでゐる

そのあひだ船は

あれて波立つ潮と戦つてゐる

棒立ちになる軍馬のやうに

體で立つて舵がめき／＼いふかと思ふと

またもや船先が

吼える奈落に落ちてゆき

それからまた心配もせず力なく  
はげしく打寄せてくる  
大きな波の黒い腹の上に

たとへおまへの斑馬ヒョウマが

いつもあざみのかほりに薔薇で肥えてゐようと

たとへおまへの氣高い猿が

ひまなかさざりて高貴とゐばり

ほかの町人らしくはひずりまはる牛半ウシノハどもよりも

自らを良いものと考へようと

たとへおまへの蝸牛カタツムリの會合が

自分どもがのろろと這つてゆくからといつて

自分を不滅のものと考へようと

たとへそれらが毎日

チーズの蟲がチーズの一部か否かについて意見を集めよ

うと

またエヂプトの羊の毛が

改良出来て

羊飼どもが分けへだてなく

ほかのと同じやうにこれを刈れるやうに

また長いあひだ協議が行はれようと

たとへ愚鈍と不正とが

いつもおまへをすつかり覆つてゐようと、おま

ドイツよ

それでも僕はおまへをしたふ

なせなら少くともおまへはやはり陸地だからね

\* 舊約聖書創世記にアブラハムの甥で伯父と別れてソドムに住したが、この邑はエホバの怒で亡びされ、ロト一家のみ救はれたといふ。

### 一〇 港 で

港に着いたものは幸せだ

海とあらしとをあとにして

いまやブレイメンのよき地下酒場に

あたゝかくしづかに坐つてゐるものは

高脚の葡萄酒のコップに映じてみれば

さてさて世界はなんと居心地よくしたはしいことか

そしてこの泡立つ小宇宙は

渴いた心に日光のやうにそゝぎ入る

なにかもコップの中に見える

古代民族史も近代民族史も

トルコ人もギリシヤ人も、ヘーゲル(一)もガンズ(二)も

レモンの森も衛兵整列も

ベルリンもシルダム(三)もテュニス(四)もハンブルグも見える

なかんづくだけどいとしいひとのすがたが

天使のおつむがライン葡萄酒の金いろの底に見える

おゝななときれい、戀人よ、ななときれいだ

おまへはまるで薔薇のやうだ

ハフェイス(五)に詠じられた夜鶯ナツメノカの花嫁の

シラス(六)の薔薇のやうではない

豫言者にたゝへられた聖なる赤い

サロンの薔薇のやうではない——

おまへはブレイメンの地下酒場の薔薇のやうだ

これこそ薔薇中の薔薇で

年をとればとるほどかあいく咲く花だ

その天國のやうなかをりは僕を祝福し

僕を感奮させ僕を酔はせた

そしてもしブレイメンの地下酒場のおやぢが

僕をしつかと、僕の髪をしつかと掴へなかつたら

僕はもんどりうつてゐたらう

けなげな男だ、僕らは同席をして

兄弟のやうに飲んだ

僕らは崇高神祕なことについて話した

僕らは嘆息して抱きあひ

彼は僕を愛の信仰に改宗せしめた——

僕は不具戴天の敵の健康を祝して飲んだ

下手藝詩人をみんなゆるしてやつた

他日、僕自身もゆるしてもらへるやうに——

僕は渴仰のあまり泣き、そしてつひに

救済の門が開かれた

そこには十二人の使徒が、聖なる大酒樽が

沈黙してではあるが、しかしながら

萬人によくわかる説法をしてる

これぞ男だ

木製の上着を着て見かけはみすほらしいが

内部は金の飾りをつけ緋の衣をつけた

寺院の傲慢なる利未族(七)よりも

ヘロデ(九)の親衛兵や廷臣どもより

美しくて輝かしい――

いつも僕はいつたぢやないか

そんじよそこらの仲間のあひだでなく

最上の交際社會にこそ

天の王者はいつもみますと

ハレルヤ、ベテル(二〇)の標欄は

なんと氣持よく僕を吹き倒すことだ

ヘブロン(二二)の没薬はなんとかをることだ

ヨルダン(二三)河はなんとさわめき喜びによろめくことだ――

僕の不滅の靈魂もよろめいて

僕もそれとともによろめいて、そしてよろめきながら  
けなげなブレイメンの地下酒場のおやぢは  
僕を階段の上まで運んで日光にあててくれる

けなげなブレイメンの地下酒場のおやぢよ  
ほら家々の屋根の上に天使どもが  
坐つて酔つばらつて歌つてゐるぢやないか

空の燃える太陽は

赤い酔つばらつた鼻にほかならぬ

世界靈の鼻にほかならぬ

そして赤い世界靈の鼻のまはり

酔つばらつた全世界がまはつてゐる

(一) ドイツの哲學者、一八一八年以來ベルリン大學教授で、その學は一世を風靡してゐた、ハイネの恩師。

(二) エドワード・ガンス(一七九八―一八三八)、一八二〇年以來ベルリン大學の法學教授、ヘーゲル門下、ハイネの友。

(三) プロシヤ領メルゼブルクの一小都市シルダウ。

(四) 北アフリカのテニジアの首府、當時はトルコ領。

赤や青の花のやうだ

赤や青の花よ

不機嫌の刈手はやくに立たないといつて棄てる

木の連枷(一)はあざけりながら碎く

おまへたちを見てたのしみ慰められる

素寒貧のさすらひびとさへも

頭を振つて

おまへたちを美しい雜草と呼ぶ

しかし田舎のをとめたちは

花環を編むをとめたちは

おまへたちをうやまつて摘み

これを用ゐて美しい捲髪をかざり

かうして笛やヴァイオリンがいゝ音を立てる

ダンスの場所へ急いでゆくか

戀人の聲が笛やヴァイオリンよりも

一層いゝ音を立てる

しづかな山毛櫨(二)の木のところへ急いでゆく。

島の小麦の莖のやうに

人間の精神には思想が

成長し波うつ

しかしやさしい愛のおもひは

それにまじつてたのしく咲く

(五) ベルシアの抒情詩人、本名シャムス・ウッディン・マホメツ  
D(一三八八年死)。  
(六) 前者の生れ故郷、ベルシアのファルス地方の首府。  
(七) 舊約聖書の雅歌第二章には「われはシャロンの野花、百合花  
なり」とある。シャロンは新約聖書の使徒行傳第九章のサロン  
と同じ土地で、肥沃なイスラエル人によく知られた地方だつた。  
(八) ヤコブの子レビの子孫で、エダヤの祭司の下位を世職とした。  
(九) キリスト誕生の時のエダヤの王、「エダヤの王」として生れ  
た。イエスを殺すためベツレヘム近郊の二歳以下の子をみな殺  
した(新約聖書マタイ傳第二章)。  
(一〇) 中央パレスチナの都市、はじゆルスといひ、ヤコブによつ  
てベテル(神殿)と名づけられた(舊約聖書創世紀第二十八章)。  
(一一) ベツレヘムの南の町。  
(一二) パレスチナの川、死海にそそぐ。

一一 エビロトグ

## 解 説

ハインリヒ・ハイネ (Heinrich Heine) は一七九七年十二月十三日、ライン河畔のデュッセルドルフで生れた。父はザムソンといひ、英國産のヴェルヴェット商、母はバイラといひ、このまちのファン・ゲルデルン家の生れ、ともにユダヤ人であつて、これが彼の生活や思想に一生反映する。生れたときの名はハリー (Harry) ハインリヒは一八二五年にキリスト教に改宗したときからの名である。

三年後の一八〇〇年には妹のシャルロッテが生れた。この子と夫婦こつこをして遊んだことは、「歸郷」の第四十一に見えてゐる。この妹がエムデンといふ男に嫁して生んだ子のうち、マリアといふ娘はのちデラ・ロッカ公爵夫人となり、伯父の傳記をいくつか書いた。シャルロッテとは生涯仲好くしたが、一八〇五年に生れた弟グスタフのことは詩その他にも見えない。これも才氣のあつた男で、ウィーンに住ひ、ハイネ・ゲルデルン男爵家を創立した。その次の弟のマキシミリヤンは一八〇七年の生れ、ロシアに行つて、ペテルスブルグで、宮廷の侍醫となつた。これは兄の病床にも侍したが、いまハイネの自叙傳關係の諸篇のうち、叔父ザロモン一家に關することなどでの削除は、その手によつたといはれる。

これら四人の兄妹を生んだ兩親のうち、父は凡庸であつたが、詩人的な素質はむしろこの陽氣な派手すぎない父から享けたのであらう。母はルッソーの心酔者であり、ゲーテの西東諸篇をも愛讀したといふが、なか／＼に

知的で、子供のとき黒板に記してABCを教へたほか、詩人の少青年時代には、いろ／＼と進むべき途を指圖したが、母子の性質の相違からこれがごとく失敗に歸した。しかしハイネはその作品でたび／＼母のことをうたつて、深い愛情を示してゐる。

字のかき方は母に教はつたが、まもなくヒンデルマン夫人のABC學校で教育され、ついでユダヤ人の私立學校に入學、十歳ごろからはデュッセルドルフ中學校に入學し、主としてカソリック式教育を受けた。この學校在學中のことである。一八一二年、ハイネはナポレオンを見た。前年オーストリアの皇女マリー・ルイゼを娶り、イギリスを除く全ヨーロッパの覇權をにぎつたナポレオンは、また久しくデュッセルドルフの市民にとつても君主だつたのである。といふのは、ドイツでもラインの地方は早くからフランス軍に占領されたが、デュッセルドルフの市は一七九五年より一八〇一年まで占領され、一時その撤退を見たが、一八〇六年よりはナポレオンの直轄領となり、その代官に一八一三年のライプチヒの戦まで治められてゐたからである。ハイネの見た皇帝は「五フランの罰金の課される」御苑の並木道のまんなかを白馬に乗つて行進してゐたのである。ハイネにとつてさらにナポレオンを印象ふかからしめたのは、その支配下に於いてのみ認められたユダヤ人の平等視であつた。母はナポレオンを敬愛してあつたが、父もこのことのためにこれを崇拜した。「擲弾兵」(物語詩第七)に見られるナポレオン崇拜の念のごときも、ハイネにとつてはむりからぬことといへよう。しかし一八一五年この市をふくむとのベルク公國領はすべてプロシヤ領となつた。

この年、ハイネは商業學校に入つた。皇帝を敬愛する母も、この時までは息子を皇帝の官吏に仕立てあげようと考えへてゐたが、時勢の大變轉に際し、今度はロスチャイルド王朝に仕へささうと考へたのである。この學校にゐたのは秋までで、まもなく父につれられてフランクフルト・アム・マインのリンツコップといふ銀行家に引渡さ

れた。

父母のもとをはなれるまでは「ドン・キホーテ」と「ガリヴァー」の愛讀者であり、死刑執行吏のむすめヨゼファの話す怪奇譚に耳を傾けた少年が、實業家として成功するかどうかは明らかである。リンツコップからは數週間で歸され、つゞいて香料商に使はれたが、これも四週間で商才なしと認められた。しかし父母はいまだにあきらめず、翌一六年にはハンブルグの叔父ザロモンのもとへ送られた。

ザロモンは父のすぐの弟で、獨逸屈指の銀行家として、ハンブルグの王者の看があつた。オッテンゼンにあるその別荘は庭園、噴泉、立像、薔薇のしげみ、夜鶯の唄で彼を喜ばせたが、とりわけ彼を悦ばせたのは叔父のまなむすめアマリーエ (Amalie) の姿であつた。今後つくられる詩はみなこれに捧げられた。アマリーエはハイネより三つ年下で一八〇〇年生れ、大きな澄んだ眼をしてゐたが、詩を贈つても嘲笑するのみであつたといふ。

この哀れな戀愛が文學史にのこる多くの詩を生ましめたのである。

一八一八年には叔父から資金をもらつてハリ・ハイネ商會が出来上つたが、これは翌年には閉店する。商才の全くないことで、叔父から見離されたからである。かやうにハンブルグでハイネは、自分を實業家たらしめようとの母の希望を破つたばかりか、さらに喜ばれさうもない詩人としての門出をもこゝで踏み出した。すなはちこの市から出てゐた「ハンブルグス・ヴェヒテル」誌に筆名で投じた詩がこの詩人のデビューであつた。こゝに收める「夢のすがた」の第二と「物語詩」中の「得度式」が一七年の二月八日號に、同じく「物語詩」中の「ドソ・ラミロ」が二月二十七日號に、「教訓」と「歌」の第六と第八とが四月十七日號に出た。たゞし詩作のはじまりはもつと古からう。「擲弾兵」のごときも、詩人自身は一八一六年の作といつてゐるが、これが事實は一九年の作であるとしても、以上の六篇すべて最上といへないまでも、少年の作として決して拙いといへないことが

これを證明してゐる。この天稟の才能に加ふるに、ハイネ自身はまだはつきりと自覺してゐなかつたが、不幸な戀愛、どんな平凡な男をも詩的にする戀愛が、ます／＼詩作を促したことは當然である。しかし大富豪のまな娘にとつては、詩人的なあまりに詩人的な従兄との結婚など思ひもよらぬことであつたらう。その結婚はハイネがベルリン大學に在學中だつた一八二二年のことで、相手は同じく富豪の子であつた。

ハイネはしかしこの戀愛にも多少の希望をつなぎながら、叔父のすゝめに従つて、一九年の夏、父母のもとへ歸り、しばらく入學準備をしたのち、法律を研鑽して辯護士となるべくボン大學に入學した。こゝの大學には哲學科の教授として獨逸浪漫派の代表者たるアウグスト・ヴィルヘルム・フォン・シュレーゲルがをり、シェーグスピアやカルデロン等の外國文學、「ニーベルンゲンの歌」「ローランの歌」等の古典をはじめ印度文學に至るまで、その口から講じられ、ハイネはたちまちその崇拜者となつた。その詩中に印度を詠するものがあるのはその具體的な例證といふべきであらう。シュレーゲルもハイネの詩を見せられると、好意的な批評を與へたので、ハイネはこれにはげまされて、一八二〇年の夏には近郊の村で悲劇「アルマンズル」を書いた。

しかしハイネはこの秋ゲッティンゲン大學に轉校した。理由はハイネ自身がいろ／＼とのべてゐるが、その主なるものは級友との感情疎隔であつたやうである。父が破産して學費に困り、母が貴金屬を賣つてこれに買いだすものこのころのことであらう。しかしゲッティンゲン大學での期間は短かつた。こゝでも十二月に彼は級友に決闘を申込み、これが校長に知れて放校に處せられたのである。アマリーエ婚約もこのころ彼の耳に入つた。鬱鬱として翌年入學したベルリン大學では、しかし事態が好轉した。彼はこのころすでに發表した詩で相當有名となつてをり、「ゲゼルシャフテル」誌や「ツィンシャウエル」誌に多く寄稿することが出来るやうになつて、ゲッティンゲンでは唯一篇「後悔の歌」(物語詩第一七)しか作らなかつたのは、うづつてかはつて多作となつた。發

表機關のみでなく、文學的環境にもめぐまれ、生涯かはらぬ知己となつたアウグスト・ヴァルンハーゲン・フォン・エンゼとその夫人フリーデリケのサロンではシャミツソーヤフリーケやシュライエルマツヘルとも近づきなつた。フリーケはとりわけその作品「ウンディーネ」によつて、ハイネが尊敬してゐた後期浪漫派の代表作家である。當時名士の往來したルツテル・ウンント・ヴェーゲネルといふ酒場ではグラツペやE・T・A・ホフマンとも知合となつた。カール・インメルマンとの交際もこのころはじまつた。これにはげまされて二一年の十二月にはマウレル書店から詩集を出した。題は「ハイネ詩集」といふのであつて、著者への報酬はこの本四十冊の寄贈のみであつたといふ。内容は「若き日のなやみ」の諸篇から成つてゐた。即ち先づ少年時代の死刑執行吏の娘ヨゼファとの交際から得た怪奇な幻想とアマリーエの裏切を痛恨する呪ひの歌から成る「夢のすがた」十篇、「歌」の第四、九を除く十四篇、「物語詩」二十四篇、「抒情的間奏曲」の第十八、十九、二十の三篇と「ソネット」その他より成つてゐた。初期の作であるだけに、他人、たとへばE・T・A・ホフマンの影響なども強く感じられるが、しかし人を感じさせることは原型となつたホフマンなどの及ぶところでない。まして「物語詩」中の「擲弾兵」、「ベルシャザル」、「ドン・ラミロ」等はウーランド等の先人の壘を凌駕して、前人未踏の境をゆく之感あらしめる。二十歳を越すか越さぬかで、ハイネはすでに世界文學史上に残る作品を成したのである。ベルリンの文化界の歡迎もむりからぬといへよう。

ハイネのベルリンに於けるいま一つの收穫は、大學でヘーゲルの講座に列するを得たことである。ヘーゲルの當時すでに名聲高かつたことは「歸郷」の第三十八で、悪魔にさへもヘーゲルをよんだといはしめてゐること知られる。

二三年四月にはまたデュムレル書店から「悲劇集團抒情的間奏曲」が出た。これは「アルマンズル」と「ラト

クリフ」の二悲劇と、その間に挿んだことから表題を得た「抒情的間奏曲」の詩篇とから成つてゐた。これらの出版による名聲は、ハイネをして失意の憤みをいくらか忘れしめたであらう。たゞ子供の時以來の宿痾たる頭痛が再發し、休養の必要を感じて、この年五月兩親の許へ歸つた。兩親は二〇年から破産してデュッセルドルフにゐたため、ハンブルグよりエルベ河の支流オーレ河を少し廻つたリュエネブルグにゐたのである。しかしこの文學的名聲で得意になつてゐた詩人の心は、兩親に會ふとすぐ打ちひしがれた。母親さへも息子に儲けの多い貿易や名譽ある職業につかうとする氣のないことを嘆いたのである。たゞさへ困つてゐる兩親からは、こんな様子では學資が出るはずもなく、ハイネは歸郷したもの、一向病氣もよくならない。そこで氣分を變へるために數週間クックスハーフェンへ保養に赴いた。こゝはエルベ河の河口に近い、北海の岸にある保養地である。しかしこゝへ赴くためにはハイネは旅費を得るべく、いや／＼ながらもハンブルグへ赴かねばならなかつた。そむいた戀人の父なる叔父ザロモンから金を借りるためである。叔父は叔父でさん／＼甥の世渡りの下手なことを叱つたあとで金をくれた。しかし金以上にハイネによるこびをもたらししたのは、一八〇七年の生れで、このとき十六歳だつたアマリーエの妹テレゼ (Therese) の「姉をつくりの」姿であつた。まへには子供として相手にしなかつた従妹が、こびびとの復讐としてまた出現したのである。

たゞシアマリーエのことを忘れたわけではない。思い出の市は詩人の胸をかき立てて多くの詩を作らしめた。「歸郷」の詩は「ローレライ」(第二)やハノーヴァー王國兵の制服をつけた兵隊の出て来るリュエネブルグの景色を歌ふ第三などをぞいで、おほむね生れ故郷ではない、「戀愛の故郷」へ歸つた詩人の心情をうたふ。こびびとが齋庵にあると聞かされる男の姿はハイネの姿であり、姉をつくりのテレゼに氣づくことも第六に見える。第二十一より二十三までの三篇はとりわけハンブルグの市での心持をうたつて胸に迫る。

こゝに收められた詩中、また注目さるべきは、第七より十四に至る八篇がクックスハーフェンでの作で、ドイツの詩に珍しく海の風景を詠じ、のちの「北海」の詩の先驅をなしてゐることである。

この海岸で六週間滞在して、病氣もなほつたのであらう、ハイネは父母の許へ歸り、こゝに四ヶ月ゐたのち、翌二四年の一月からは再びゲッティンゲン大學に入學した。父母や叔父の意見に従つて、再び法律を勉強して辯護士となるためである。叔父から學資をもらふので生活も樂になり、ベルリンへも行つたが、この年の秋にはハルツ及びテューリンゲンへ旅行した。こゝに收める「ハルツの旅から」の諸篇はこのときの收穫である。この旅は徒歩で茶色の外套、黄色のズボン、縞のチョッキ、黒い首巻、頭には緑色の帽子をかぶり背囊を背景ふといふ男らしい姿で、ハルデンベルヒやプロッケン山へものぼつたのちアイスレーベン、ハレ、イェナ、ワイマル、エルフルト、ゴタ、アイゼナハ、カッセルと諸地を歴訪したが、なかんづくワイマルでのゲーテ訪問は豫定された計畫中の最大のものであつた。ハイネの母がゲーテの愛讀者であつたことはすでに説いた。ハイネ自身も少からぬ影響を受け、とりわけベルリンの友ヴァルンハーゲンのゲーテ崇拜には大きな感化を受けてゐた。一八二〇年の詩集も「悲劇集」も謙遜した獻辭とともに贈つてある。しかし尊敬が大きすぎただけにハイネは大先輩のまへに出ると、あがつてしまつて大失敗をやらした。弟マキシミリアンの述べるところによると、ゲーテに「いま君は何をやつてをられる」ときかれると、ハイネは「ファウストをやつてをります」と答へてしまつた。ゲーテは自分のファウストを書き直さうとしてゐるとでもいふかの如きこの答へに、「ハイネ君、もうワイマルには御用はありませんか」といつて早々にこれを送り出してしまつたのである。しかしこの失敗に先立つハルツ山中の詩は山の風景を傳へて、散文の「ハルツ紀行」のふざけや皮肉の勝つてゐるよりはつと愛すべきである。

一八二五年の初夏には新教に改宗した。これが卒業を前にしての就職準備であつたことは明瞭である。このと



き生年月日も一七九九年十二月十三日として、二つ若くした。卒業はその直後の七月末であつた。叔父からは奥美のやうに金をもらつて、八月にはノルデルネーに赴いた。九月まで二ヶ月をこゝにすごし、ホーマーをよみ、舊友ゼーテが新婦を伴つて来たのに會つた。ゾルムス・リヒ公爵夫人その他美しい婦人も交際した。みなドクトルの稱號と叔父の金のおかげであつた。かうして出来たのが「北海」の詩である。テレーゼに對する愛は、はつきりした形をとり、その第一編の第六「宣言」にアグネスと呼ばれるのは、たしかにテレーゼである。この詩はハイネの詩の中でも私の一等好きな部類に屬する。

ノルデルネーからこひびとのゐるハンブルグへ航行を企てたが、これは不可能とわかり、陸路父母のもとへ立寄つてから、十一月中頃にはハンブルグへやつて来た。「旅の繪」(Reisebild)第一部をこゝのキャンベ書店から出すためといふのが理由であつたが、もつと大きな理由はテレーゼに會ふことであつたに相違ない。テレーゼはアマールエより性質もやさしく、詩人としての従兄への理解もあつたやうであるが、父の反對をおし切る勇氣はもとよりなかつた。ハイネは叔父の別荘に姉の時と同じくともに夜鶯をきながら、つひにいゝ返事を得ないであつた。この間に「旅の繪」第一部の出版が成つた。「歸郷」の詩、「神々のたそがれ」、「ドンナ・クララ」、「ゲヴラール詣り」、「ハルツの旅」、「北海」の前半と、散文と詩の兩者より成るこの書の内容中、當時の讀者社會をおどろかせひきつけたのは「ハルツの旅」の散文に含まれたユーモアとウイットとイロニーとであつた。詩はむしろ副へ物として輕視されたが、これは讀者だけでなく著者自身が本來そのつもりであつた。その意味ではこの書に對する毀譽褒貶のかまびすしかつたことは、著者の豫期通りであつたらう。しかし著書の好評とは反對に、テレーゼとの結婚はこのころになつて大體だめなことがわかつて来た。二六年夏ハイネは再びノルデルネーに赴き、こゝからリュートネブルグにかへり、「旅の繪」第二部の後半を占める「觀想・ルグランの書」をかいた。この作品

はいひかへればテレーゼに捧げる建白書であつて、巻頭エフエリーナといふ名で呼ばれてゐる獻辭の相手は必ずやテレーゼである。しかしこの書が一八二七年四月に出ると彼はすぐ、イギリスにわたつた。その主な目的はこひびとのゐる「ハンブルグを去ることであつた」と親友モーゼルに詩人自らが書いてゐる。その主目的は達せられたが、イギリスは詩人にとつてあまりにも現實的で好感がもてなかつた。オランダ、ノルデルネーを経てハンブルグにハイネが歸つて来たのは九月であつたが、歸るとすぐ叔父にきびしい叱責を受けた。叔父はイギリス行の旅費として、ロンドンのロスチャイルド宛の四百ポンドの信用證券を甥に與へた。これをハイネは殆どすべて消費してしまつたらうへ、浪費を咎めた叔父に食つてかゝつたのである。テレーゼならずとも、このひととの結婚を躊躇する方が、女としてあたりまへだといはねばなるまい。

これまでの詩のほゞ全部を集めた「歌の本」(Buch der Lieder)がキャンベ書店から出たのは、この年のことであるが、多分その直前の十月に、ハイネはその結婚後をはじめてむかしのこひびとアマールエに會つた。この會合は苦しかつたらうが、テレーゼへの希望がこの苦しみを救つたことは疑ひない。しかしこの年末に、女優テレーゼ・ベッシュにうちこんでゐるとの評判がハンブルグでは盛んに立つた。ハイネはこれを心配して揉み消して廻つたがうまく行かなかつた。「歌の本」を出したキャンベは初版重版に對して五〇ルイスドルを支拂つたばかりであつた。丁度そのときミュンヘンの大出版社コッタから招かれたので、ハイネは直ちに赴き、自由主義者の名の高かつたバイエルン王ルドルフ・ヴィヒ一世にも謁した。ミュンヘン大學教授になれるやうな様子も見えたので、ハイネはコッタ男爵の手を経て王に「歌の本」と「旅の繪」を献上した。二冊とも著者が大學教授に不適であることと證明書の働きをすることにも氣がつかなかつたのであらう。そしてこの大學教授への希望にいくらか氣分をよくしてゐるとき、一八二八年二月、テレーゼがハンブルグのドクトル・ハレと婚約したとの通知がミュンヘン

までと書いた。

以上がハイネが詩集「歌の本」を出した直後までのその傳記のあらましである。のちの社會詩人としての面影はこゝには殆どあらはれてゐない。生活、感情も、戀愛にのみ向けてある青年時代の作品を網羅したこの詩集から「ソネット」を除く全部を譯し、これに「ハイネ戀愛詩集」の名を附したが、それが決してまちがひでないことは、すべての讀者に認めていただけると信ずる。

ハイネ戀愛詩集



昭和二十六年三月十一日 印刷  
昭和二十六年三月二十日 發行

定價 百六拾圓

譯者 田中克己

發行者 角川源義

印刷者 土岐佐光

發行所 角川書店

東京都千代田區富士見町一ノ〇  
櫻井口五 東京一九五二〇八

落丁・風丁本はお取替へ致します

